
心臓の逃げ道

壬哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心臓の逃げ道

【Nコード】

N3569B

【作者名】

壬哉

【あらすじ】

いつもどおり同じ生活をして、いつもどおり帰ってきたとき。急に目の前に現れたのはドッペルゲンガー？だと思われた全く俺と同じ人間。いるはずの無いもう一人の俺が、目の前に居て、名前も激似。そいつから聞かされた俺の昔。呆然とする以外他にはなくて。狙われているのは俺だといわれたとき。俺はどうすれば良いのだろうか。

プロローグ 始まりのドア

俺はいつもどおり学校から帰ってきたところだ。

本当に。何にもない同じ毎日を過ごしてきた。そして、この家にも本当に変わらないまま、じいちゃんになっても結婚せずに、毎日同じような生活しかしてなくて、顔ぶりも全く持って変わらない相手がいると想っていた。

特に、恋人なんているわけもないと想っていたし、それに、知らない人が居候なんてことは本当に考えなくなかった。

本当に。

考えていられなかったし、考えてロクな事にならなかつたら本当にいやだ。寧ろ、いやなことになりそうで怖かったからこそ、毎日同じ時間に嫌々起きて、そして、白い白米をゆつくりと噛んで食べて、そして朝風呂入って髪を乾かしながら歯を磨き。そして、間に合わないとか言いながら、のんびり階段を上り、遅刻だーなんて叫びながらも、きちんと鏡の前で制服を正し、アアもう無理だといいいながらカバンを持つ。そして、漸く家を出る際にはきちんとパンを銜えて、母さんたちに行ってきます。と告げる。それでもって、学校に着いたら、おはよーなんていいながら、銜えていたパンを食べ終えた瞬間に、担任の先生が来る。

このいつものペースがあつたはずだったのに。それがずれる予感なんて、本当にしなかった。家に帰る時に、カバンを持って、机から離れてきちんと椅子を正して、高校一年生の男子には、滅多にないくらい几帳面で、そんなに悪さを考えることもなく、純粹に宿題を忘れて。それで怒られて廊下を歩き、そしてのんびり靴を履き替えて、友達と帰ることなく、一人で電車に乗るわけもなく。たつた一人で朝来た道を戻っていく。

本当に予感なんてしなかった。

家について、ドアノブに手を伸ばして、軽く回してはカギが閉ま

っていた。

それがいつものやりとりなのに。

今日に限って、閉まっているはずのカギが、閉まってなく、軽くゆっくりと空いてしまった。

それにアングリと口を開けてしまった。

——この家のものが鍵をかけ忘れることなんてないのに………それでもって、あの鍵が閉まっているときの、あのガチャっと、負けた感じのが気に入りだったのに。

なんてシヨックを受けていた。

母さんか父さんのどっちかが、早く仕事から帰ってきたのだろうか。と少し想っても、その場合は、俺の携帯に来るはずなのに、ポケットに入っている携帯を見ても、着信も新着メールも来ちゃ居ない。

ドアノブを回しただけで、開こうとしない手が止まっていることに気づいても、なんとなくここを開けなくなかった。

ボロボロになって、グチャグチャになっていて、泥坊の足跡がそこらへんに残っているとこなんて、想像しなくなかったから。

なっているのかなって居ないのかわからず状況に陥ってしまったているからこそ、今のこの状況が怖いのに。

これであけて今よりもびっくりするような状況に陥ってしまったら、俺は一生の終わり。といって良いくらいのシヨックを受けること間違いなし。

このとき。一瞬違う思考が頭をよぎった。

——あつ。ここ違う人の家だったりするのかな？？

なんだかそう思えてくると、嬉しくなりパアッと顔を明るくする。そして握っていたドアノブを外し１・２歩下がって、家を見上げ

て、誰の家かを当てて見せよという勢いで凝視する。のだが、どこをどう見ても、自宅にしかおもえなかった。

——いやまてよ？似ている家なだけかもしれない

だんだんと、そうプラス思考に考えていくと、余計に嬉しくなつていき、門のところまで戻ってネームプレートを見てみる。

『朝倉』

そのミヨジだけは、全く持つて変わつてくれる予感も無しに。右を見ても、いつもの場所。左を見ても、いつもの感覚。どうみても、これが自宅ではない他の人の家とは思えなかった。

微かに見える、ガラスの向こうの家具だつて、どうみても自宅。でしかない。

それだけは帰られなかったかと、重いため息をついた後、心を決めてもう一度ドアのところまで立ち、ドアを開けようとした時、中のほうから何か楽しげな声が聞こえてきたと思えば、急にドアが開きだした。

俺から見てこれは引き戸。こっちに向つてくるドアだから、俺が被害を受けるに決まっている。避ける反射神経なんてありやしない俺に、思いつきりぶつかってきた。その勢いで後ろに座り込んでしまった俺を見下ろすのは……………俺？

——あー……………確かあゝドッペルゲンガー……………だかなんだかを見たら自分が死ぬとか……………

顔の血の気はすべて退いた俺を、ニツコリ微笑んでくる俺の顔。そして、そのドアとは逆にあるほうの手が伸びてきて、俺を起こすのか、俺の腕をつかんで思いつきり立ち上がらせた。が、足に力が

まともに入って居ない俺は、少しふらふらしてしまっている。

それに気付いたのか、少し抱えるように俺の腕を目の前にいる俺の横から首に回させ、当の俺の脇下をその目の前にいる俺の腕がとおり、逆の脇下をきちんと掴んで歩かせる。

「悪い。すぐそこにいるなんて想わなかったから迎えに行こうと思って出たっけぶつかっちゃって……ごめんな？」

玄関の靴を脱ぐ場所に座らせながら言い、俺の靴を脱がしていく。それでも今の状況が読み取れて居ない俺は、ボーツと目の前にいる俺を見つめていた。

どうして俺死んでないのだろうか。

そして何で俺と全く同じ奴が、目の前で俺の靴を脱がしているのだろうか。

元々考えるためにある脳ではなく、なにに使うのかわからない用途の俺の脳みそは、疑問ばかりでどうしようもなくなっていた。ここで漸く、俺の脳の用途が見つかった。

疑問を作る場所

そうだ。

絶対にそうだ。それしか考えられないからこそ悔しいものもあるくせに、少しホツとするのだ。

何で目の前に同じ奴がいるのだろう。

それだけは考えたくないと思っても、それしか考えられない脳なのだから仕方がない。とおもってしまっている。だからこそ、少しホツとしているかもしれない。

「……」

脱がし終わった俺の目の前の男は、その男を見つめている俺に視線を合わせていた。それに気付いていても、話しかけていいのかどうかわからずに、ボーッと見つめていた。

何か話しかけてくれないと結構困るんだけどなあ。なんて考えているしか、今は何もこの今の思考を出来るだけ考えないでおこうと思うことはできなかった。

今余計な事を考えると、変なことを口に出してしまう。だって。

俺の中では、ここでいつもどおり鍵をカバンの中から無い！！とか叫びながら取り出して、その鍵穴に取り出した鍵を差込み、そしてその手ごたえを感じながらゆっくりと回してカチャッといわせる。ふうといいながら中に入り、内側から鍵を閉めてそこでカバンを階段の方に投げ捨てて、思いっきり身体を上にはばす。

ため息とともに出た言葉と、足が動くのが同時で、そして今座っている場所に腰掛、ゆっくりと靴を脱いでいく。そして、脱ぐなりすぐそのリビングに入って、朝と同じパンを銜えながら出てきて投げたカバンを取って階段を上っていく。

口をもぐもぐ言わせながら明日の準備をして、服を私服に着替えて階段を降りてきて、それでもって適当にテレビをつけてボーッとソファに座って母の帰りを待つ。

というのが、俺の日常茶飯事な事だったのに。

「……大丈夫なのか？」

漸くあけた目の前にいる俺が、心配そうな瞳で手を出してきて、俺がドアにぶつけた場所に、ソツと手を当てる。

何が大丈夫なのかは良くわからないが、とりあえず眉間にしわを寄せてみる。

「ここぶつけただろ？赤くなっちゃってるな」

なんていいながら擦るもんだから、俺はどうすればいいのかわから無いではないか。ここで立ち上がっていつもどおりの対応をして、そして、今日の前にいる俺はいなかった事として、立ち振る舞いをする事だって出来るはず。

二人居るわけでもないし。

そうだ。

これは死んでしまったはずの俺似のご先祖様なんだ。

なんて凄く古臭いことを考えているのもなんだか悲しくなってきた。

しかも、俺に似すぎていて先祖とは程遠く感じもしてくる。

「……あんだだれだよ……」

降参しました。

なんて言っただって、これ以上考えたって、ドッペルゲンガー以外は思いつかないのだから仕方がない。一応普通の人間かもしれないと思いながらも恐る恐る聞いて見る。

パチクリと瞬きしたその瞳に、早く答えろという目つきで睨みつけてやる。どんな反応をするのかわからないから、なぜか脱がしてくれた足が軽い事に再び気付き、ゆっくりと退くようにカバンを持って階段の近くまで下がる。

すると、何が面白かったのか、くすつと急に微笑みだしてきた。

逆に俺がパチクリと呆然としてしまうではないか。

「別にとって食べちゃろうなんて思っていないから安心しろよ」

自分も靴を脱ぎ、俺の目の前に立ちはだかって来た。

ゆっくりと屈んで、しゃがみこんでいる俺に手を伸ばしてきた。

「ほらっ立てよ」

伸ばしてくれた手にゆっくりと触れて、軽く握ると、ギュツと握られ、俺を思いっきり起こす。その力強さに一瞬からだがやられて、ボーっとしてしまう。

「姫倉悠汰^{ひめくら ゆうた}。けど今日からは朝倉悠汰になるけどな」

ニッコリ笑って俺とは少し高い位置でしゃべるその言葉。一応俺ではないということは嬉しかったが。

——なんで今日から朝倉??ミヨジってそんなに簡単に変えていいもんなのか?

変えるときと言えば、どっかの誰かとどっかの誰かが再婚して、どちらかのミヨジになることは、なんとなくという薄っぺらな紙で知っているような気もするのだが。けど、俺はきちんと両親がいるし、再婚する必要なんてない。

なんていったって、そんな一日で急に離婚して急に再婚なんてありえないだろう。いやありえてほしくないと言う俺の意見からそう考えてやる。

「……なんで?」

渋い顔をしてしまっている事は覚悟の上で、ゆっくりと重い頭を傾げて見せた。

「なんでって……んゝ難しい話は後にするよ」

最初は困ったような顔をしているくせに、ニッコリと微笑みなお

して、今すぐ聞きたいこと葉を後にするなんて事を言い出した。

少しむっとしてしまつたのを、ゆっくりと直そうとしたが、そう簡単にも表情が変わるわけでもなく、俺はそのまま唇を尖らせるようにしてしまふ。

「……知りたいの？」

「知りたいに決まつてんだろ」

今にでも殴りつけるかのような怒鳴り口調で言つてやると、また何か困つたかのような表情で、頭をポリポリ掻き、ゆっくりと俺のカバンを持った。

「おっおい!？」

勝手に階段を上がつて行つてしまふから、俺はどうすれば良いのかと、少し慌てふためいてしまふ。

「立つて話すと長いからおいでよ」

——おいでよつて……ここは俺の家だつづの!!

何か主導権を握られている気分でもむかつく。しかも、今日から朝倉というところを抜けば、赤の他人だ。

俺は急いで悠汰と名乗る奴の後ろを歩き、向つた先は、どうして知っている俺の部屋だ。

悠汰はゆっくりと戸をあけて俺を入れてくれる。後ろ手で閉まつた音がするなり、俺はゆっくりとベッドに座つてネクタイを外しながら、テール越しに悠汰が座る。そいつは私服だから楽な格好をするだけであつて、特に何もない。

ネクタイを取り終え、ワイシャツの一番上のボタンを1・2個外してハアとため息をついて、じっと睨みつけてやった。

「はやくはなしてほしいって?」

ニツコリ笑いながら、テーブルの上に頬杖をつくその勝手さがまたムカツク。

「ある日あるところに、可愛いかわいい激似で見分けのつかない双子がいましたとさ」

一人むかついていると、急に悲しげな顔をして話を進めだした。しかも、何か童話みたいな話し方。

——だから俺なしで主導権を握るなバカ!!

余りに似すぎて、よく間違えられていて。けれど、そんなにもお互い仲がいいというわけでもなく、タダ一緒にいる相方というだけであって、そう多く話すわけは無いのに、アイコンタクトで通じ合うかのように、あ・うんの呼吸が合っていました。

が、その間に親戚方が押し寄せてきて、余りに似すぎているとどっちがどっちだかわからなくなるなんて理由だけで、片方の兄の悠汰の方を連れて行ってしまいましたとさ。

その親戚と朝倉家は、すつごく犬猿の仲で、そんなにも会わないし会おうとも思わなく。逆に会いたくないと朝倉家は思っていました。会ったら会ったで、口げんかばかりを繰り返してしまうほど息が合いませんでした。

もちろん悠汰を引き取るといってきたときは、朝倉家の両親は必死拒いて拒否りました。そして、似すぎているというところをいい理由にして、悠汰と弟の悠樹ゆうきと一緒にいさせて、そしてそのままその二人を連れて両親は車に乗り込み、逃走しました。

もちろん逃げ切れないことは覚悟の上でした。

2人を抱きしめながら、運転していない母親が、ギューツと抱きしめながらごめんね。ごめんね。と何度も謝ってきました。本当に小さい頃過ぎて、何が起きていて、何で両親がなくてしまっているのかわかりませんでした。向かう先だけはわかっていました。

警察です。

警察に行こうとしていた事だけは、悠汰にはわかっていました。だけど、その前に何台もの車に囲まれてしまい、運が良かったのか悪かったのか、狙っていた方の悠汰を誘拐されてしまいましたとき。もちろんその家の人が『土村家』だということはわかっていましたから、その後も何度も押し寄せ、返してもらうように争いましたが、結果は全敗。

そこで、その状況を知った親戚の姫倉家の方々が、手を貸してくれてもちろんその人たちは強く、悠汰奪還を成功しました。

漸くそこで悠汰ははつきり解りました。

姫倉家は信じて良いのだ

と。

悠樹と悠汰を一緒にするわけにはいかないと察した両親がたは、姫倉家に悠汰を預けましたとき。

けれど、浅はかだったのはどうして『悠汰』の方を狙ったのかで

した。が、最近それがわかり、土村家は悠汰ではなく、必要なのは『悠樹』のほうだとわかりました。

それで、悠汰の方は安全だと察した姫倉家は、悠汰を朝倉家へ返しましたとさ。

「チャンチャン」

ニッコリ微笑んで悠汰はパンパンと両手を俺の目の前で二回ほど叩いた。

なんとなく理由はわかったのだが、そんな事がおきていたことなんて、本当に綺麗さっぱり忘れていたというのに、どうしてこいつは覚えているのだろうか。

ヤッパリ頭の出来が違うのだろうかと悩みながら、俺は少しばかりその状況を思い描くと、少し疑問に思うことがハッと出てきた。

——なんで悠汰じゃなくて悠樹の俺が必要なんだ？っていうかなんで必要なんだ？

考えれば考えるほど、だんだんと疑問がわいてくる。

なぜそれで警察に連絡して、警察を利用して取り戻そうとしないのだろうかとか。いろいろと考えた挙句。

わからない

で済みます。

「……理解できてますか？悠樹」

「簡単に言えば、俺たちは生き別れしてしまった双子ってことか？」

「さすが悠樹。理解早いね」

誉められているんだか貶されているのだから。

貶されているような予感はないが、何かバカにされているような気だけはする。

「なんで俺が必要なの？っていうかじゃあ俺が狙われる？？」

渋い顔をしながら考え出す。

だけど、今まで俺が狙われた感じはしない。全くもってない。

帰ってくる时候だって、へんなベンツも見なかったし、多分ストーカーなんてされていないと思うし、何かを飲まされたわけでもない。

「そう。悠樹が狙われるの。そして、必要なのは悠樹の心臓なんだよ」

真剣な瞳で見つめられる俺。

結局俺は……これからどうなってしまうのだろうか。

そこが一番聞きたかったりもする。

心臓

「ちよつと待てよ……心臓って……どうして心臓なんて？」

焦った気持ちを押さえようとしても、ヤッパリ動揺するこの心音は止まらない。全く持って止まる様子もなく、自分の心臓をギョツと握るように、押さえつけていた。

手なんかで止まるはずがないことくらい解っている。解っているからこそ、余計に怖かった。この心臓が、いつの間にか爆発して、自分自身ごとなくなってしまうのではないかと。心配で心配で、誰かに大丈夫だよと、安心するような言葉を、一つや二つくらい待っている、自分自身おかしくなくないと思う。

「心臓が人間のエネルギー源の一つだって事はわかっているか？」

冷静な口調で、一つ一つ説明していくかのように、真剣な瞳で見つめてきた。それだけで余計に緊張して、ゴクリと唾を喉に通す。そんな音すら、響き渡っていきそうに怖いくらい静まり返ってしまったのだ。

先ほどから父さんや母さんのいる存在が薄い。さっき階段を上る前に、少し母さんがいそうな雰囲気がりビングの方から漂っていたことも気付いていた。だから少し安心していただけなのに、こんなにも静かだと、余計に怖くなってきた。

本当に今すぐ窓ガラスがわれ、思いつきり変な人！！っていうくらいに黒ずくめがきて、俺を奪い去っていきそうな勢い。多分俺はそう簡単にはつかまらないと思うのだが。

少し考えて、ゆっくりと首を縦に振った。

心臓。

その存在は俺もわかっているし、どんな働きをするのかも、一応わかっているはずだから。

ゆっくりと頷くしかできなかった。

「そこにはたくさんの血が行き来している事も知っていますか？」

うん。

知っている。

細かいつくりはわからないが、心臓はポンプのような働きをしている。と思う。

「その悠樹の心臓を違う身体に移植する気だよ」

う……………ん？

——えっと。何の説明にもなっていないのですが……

今は何の説明をしようとしているのだろうか。

どうして俺の心臓が必要なのか。ということが知りたいのに、未だその不思議が解決に走っている様子は見当たらない。全く持つて見当たらないからこそ、呆然と悠汰を見つめた。

渋い顔になっているのはわかっている。それを戻す気にはならないし、戻してどうにもならないことはわかってる。

「移植してどうするの？」

「ああ。そっか。それがわかんないんだっけ。えっとね？悠樹の心臓には、俺らじゃわかんないような力を持っているんだって。なんていうか……………不老不死……………みたいな？何かが起きたのをきっかけ

として不老になるらしいんだ」

「ってことはその何かが起きたら俺……………それ以来歳を取らないってこと?!」

飛び起きるかのような勢いで怒鳴りつけるなり、ピタリと固まってしまった。

どういふことなのかをゆつくりと理解しようとはしているのだが、頭の中が真っ白で、何も考えられなくなってしまいそうな勢い。だからこそ、ピタリと心臓を納めるように、ゆつくりと呼吸をする。

——焦るな……………今を生きていることを実感するんだ……………

ゆつくりと瞳を閉じて、言われた事をゆつくりと整理をしていく。不老不死。

それは人魚のうろこを食べるとどうにかなると言う話しも、聞かなかったことが無いわけではないからこそ、本当かどうかも気になるし、その前に本当に不老不死なんて言葉を存在させていいものなのかとも思う。

変に現実逃避してしまった頭を現実に戻し、再び深い深呼吸をした。

「そういうことになるな。まあその何かがわかんないから、どんな事が起きてどのくらい悠樹の身体に負担がかかるかわからない。だから俺はこれからずっと悠樹のそばにいてやるからな」

につこり微笑んで、悠汰はそう言ってくれた。だからほっと息を吐いて安心してしまった。本当のところはどうなのかわからない。今こいつを信じていいのかどうかもわからない。けれど、危ない奴から逃げなければならぬということとはわかる。

だから今危ないとわかっているそれを、どうにかしなければなら
ないことくらいわかっている。俺にはきちんと走れる足がある。

「……………けど……………」

けどまだ不安がある。

一応双子だという事を、知らない俺はそれを信じることしかでき
ないのはわかっている。だからこそ、話した事もないこいつを……。

「傷つけるかもしれないぞ？俺…………俺。まだお前のこと知らない
し。だからお前を巻き込むのは……………」

この話は少し非現実的な話だし、まだ狙われている確信だって、
本当のところ全く自覚もないし、そんな行動を見たことも無い。だ
からこそ、こいつがこんなにも真剣で良いのだろうか。

だんだん不安になっている俺の心を差し置いて話を進められては
いたのだが、どこからどう信じ込めばいいのかも解らないからこそ、
こいつをきちんと信じていいのか。これに巻き込ませても良いのだ
ろうかという不安がこみ上げてきてしまうのだ。

クスツと表情を柔らかくし、微笑んでくる悠汰。ゆっくりと視線
を上げて、その表情を不安そうな瞳で見つめてしまう。それにもか
かわらず、優しい瞳で優しい言葉を出してくる。

「俺は悠樹の片割れだから。だからいいんだよ。俺は悠樹を助け
たい」

でも

信じて良いのだろうか。

そんなのかなり現実を狂わしているとは思わないのだろうか。だ
って。心臓を必要とするだなんて事。そんな事ありえないだろう。

——双子…… ってのは信じておこうかな……

少し上目遣いで悠汰の方を見つめる。

優しい瞳の中に、真剣な瞳も混ざっているようなこの目を、疑っている。本当にそれで良いのだろうか。少しでも変装して。軽く化粧なんかもしてみれば、結構人間なんて人に似せる事なんて結構たやすいことかもしれない。

実際。この日本で内臓などを売っているのだろうか。
心臓を取ってどうするのか。

「なんで。なんで君じゃなくて俺だって思うの？ 本当は君かもしれないじゃないか？」

—— そうだよ。結局そこにつながるかも知れないんだ。その何かが起きたわけでもないんだから、まだ悠汰が違う。なんてこと、確信があるって言い切れるの？

ゆつくり現実に戻ってみたら、そんなに焦るものでもなかった。
そんな事にも気付かなかった自分を恨み、再び深く考えそうな頭をゆつくり上げると。少し。少しだけつらそうな瞳がこっちを向いていた。

「…… 無理に信じようとしなくても良い。これから俺も悠樹と同じ暮らしをして、悠樹と同じ高校にも通う」

本当はこれ、子供だけの間で話すようなことではない。
大人から聞けば、少しでも信じるのに、どうして急にこいつはそんなことを言ってきたのだろうか。だって本当は嘘かもしれない。
そんなこと無いかもしれないのに。

俺は軽くため息をついた。

焦る必要なんてどこにもないんだ。何も考えなくていいから、出来れば何か。少し違う場所に放り投げてほしい気分にもなった。

——今までだって、別に狙われた覚えは無いんだ。

布団に手を乗せていた俺は、ギュッと力強く布団を握り締める。騙されているかもしれないんだ。

ギシッと音を鳴らして、俺が立ち上がる。けど、悠汰の瞳は俺のほうに向ったまま。どこにも向かないかのように、しっかりと見つめてきていた。

こわい

この瞳が凄く怖い。

だからすぐに視線を外してしまった。

だって。

信じれるわけが無いんだ。

だから……真実を聞きにいかねばならないんだ。

ゆっくりと階段を降りていく。

けれど、後ろから悠汰がついてくる様子なんて無い。

いやな予感が着たかのように、心臓の奥不覚がドキドキしていて、結構早く階段を降りているのに、凄くスローモーションの映画を見ているように、何もかもが遅くなっている気がしてきた。

凄く遅く。

一番下までつくと、ほつと息を吐いて、リビングの戸を開けると、
ポーンと甘く何か香ばしい匂いが漂ってきた。

「あら悠樹。お帰り。いつの間に帰ってきてたの?? 換気扇回してて気づかなかったごめんね」

なんていつもの母が、大きな少し焦げの入った肉を、皿に盛っているところだ。

何も変わらない家庭。少しばかり今日は豪勢じゃないか?? なんてことも考えた。

「今日は悠樹の誕生日だからねえ」

楽しげに、ルンルン鼻歌を歌いながら言う母の言葉。

「あれ? そうだっけ?」

「そうよー」

そついわれてみれば、日にち的にも今日が誕生日なハズだ。

「なあ。俺に双子っていなかったよな?」

唐突な質問。

けれど、そんなことにも動じずに、母は楽しげに誕生日のことしか頭に無いかのように質問に答えてくる。

「いるわけないじゃない。弟欲しかった? そついことはもつと悠樹が小さい頃に言ってくれなきゃ」

——双子すら居ない??

少し思考は止まり気味。

なんていったって、少し双子の事くらいは信じてやろつと思っていたのに。

——どこからどこまでが……嘘なんだ……

動揺していない自分に驚いた。

どうしてここまで、動揺せずにいられるのかわからない。

さっきまで、言われたときは凄く焦っていて、冷や汗まで感じていたのに、今は嘘をつかれていたというだけ。じゃあさっきの奴は誰だったのか。

そんな言葉すらでなかった。

——あつ……俺。凄く動揺してるんだ……

でない。

聞きたいことが焦っているのか動揺しているのかで出ない。胸をギュッと握り締めるようにして、漸くわかった。

——脳みそがついていけないんだ。

本当の真相・真実の嘘

解った

とそれだけいって、階段を再び上っていく。少し息の切れて、乾きかけた喉になんてなんも気を使わないように、さっさと走って言った。なぜ渴いているかも解らない喉。なぜ切れてしまったのか解らない息。

自分の事がわからなすぎてしまっている今。自分がパニックに陥ってしまっている事くらい、今までの経験上。いや。こんなこと経験したことないけれど、パニックに陥ってしまったときの頭の整理くらいはできていると思っていた。

いや。自分ではきちんとわかっているつもりだった。なのに、全く持って整理できていないし、息だって上がったまま。渴いた喉だって。

ゆっくりとドアノブに手をかけ、回しながら戸を開ける。部屋を開けると少し悲しい目をしている『悠汰』と名乗る誰かが座っていた。

「聞いてきたんだ」

すこし。悲しそうな瞳をしている。そんなのは何度も頭の中に入れているけど、そんな事にも頭になんか入っていない。

「…………双子なんて居ないじゃないか」

目線をずらして、ベッドに力強く座って床を見つめる。

大きく胸を動かすように大きなため息をつき、ひざに肘を乗せて

頬杖をつく。

怒鳴りつけようと思っていた言葉が、凄く弱々しく聞こえてしまっただろう。それもそのはずせつかく信じてやろうということも、こいつは悉く裏切^{うらぐち}っていつてしまったのだ。すべてを失うように、頭の中をグチャグチャにした『悠汰』は見つめてくるだけで、何もしてこなかった。

なにもしゃべらない。

最初の言葉が弱々しくなってしまった分。俺にはもう、それを保とうとしていた糸が切れてしまった。

「なんだよ。俺の真似して何もかも知っているような口調でそういうって……結局俺を馬鹿にして楽しんでいるだけなんだろ?! なんなんだよお前は!! 泥坊とでも叫んでやろうか!!」

かなりの怒鳴り口調でそう怒鳴ってやると、なんでかわからないけど、凄く自分をどん底に陥れているような感じがする。

自分でいった事なのに。相手に言っただはずなのに、凄く自分に言っているような雰囲気が出てくる。じつと睨んでやると、目線を外さずに。けれど、悲しい瞳だけは変わらなかった。

「……叫びたければ叫べば良い。確かに俺は大きなウソをついた。確かに双子ではないが、俺はお前だ」

冷静で、なんにも干渉しないかのような言い草。けれど、それでもヤッパリ言葉の中には決められた言葉が入っているような気がしてくる。

「なに言っただよ!! 少しは現実に戻れバカ!!」

これが下の人に聞こえてもおかしくはない大きな声で怒鳴りつけ

る。

頭がだんだんグチャグチャになって混乱しているせいで、相手の言葉なんかだんだんどうでもよくなってくる。

何か本当のことを言おうとしているけど。

——絶対嘘だ……

なんていつけてしまう。

「じゃあこれから少し現実離れしてしまう方がいいのか？」

少し怒ったような口調で、睨みつけてくるように目が変わり、ビクツと肩が上がる。

威圧

というのだろうか。さっきまで何かを投げつけていた空気を、思いつき返してくるようなこの力強い目つきと、口調。

「なんだよ」

再び弱くなってしまう。震えてしまう。そんな言葉を表に出さないように、ゆっくりと声を出した。

「お前は俺だ。俺はお前だ。さっき言った変な男たちが来るって言っるのはお前だ。これからの話だ。簡単に言えば、俺は未来から来た」

未来。

未来というのは、来ると思われている先の話であって、今起きているものが現実。

簡単に行ってしまった言葉と、この先のことを言われた言葉。すべてを覆したくなるようなこの今に、ゴクリと喉に唾を通す。

「じゃあ。俺が変な男たちにこれから狙われるって言うのかよ！」

「そうだ」

うんとゆっくり頷くそいつに、思いっきり近くにあった枕を投げつけた。

「ふざけんな！何が未来から来ただ！！そんな漫画みたいな言葉に振り回されてたまるかよ！！」

勢いよく立ち上がって、力強く戸を開け、力強く戸を閉める。

ごく当たり前に、普通の人が怒ったら起こる症状。そんなこともわかっていて、こんな事をしてストレス発散をしてはいけないとは思っていても、怒ってしまった自分を抑えることはできない。

今までこんなにも怒ったことはないし、こんなにも感情的になつてことは無い。だからこそ、今の自分が何をしてしまうのか解らない。だから怖かった。怖くて戸を背にしたまま寄りかかる。それ以外は出来なかった。

一歩踏み出す事もできなければ、なぜかわからないけど、親のところにいくことなんてできなかった。

——言えばいいのに……部屋に変なやつがいるって……

ナンデイエナインダロウ

どこか心の奥底で何かを信じてしまっているかのように、口が利けなくなってしまうそうだ。下手に言葉を出して、今まで起きてしまったことをすべて滑らしてしまう。なんかわからないけど、それが怖かった。

恐ろしかったし、何かを信じれといわれたわけではないのに、何か誰にも言っではいけない。心の中にいる違う自分がそう言っている。なんかわからないけど。何かを言っではいけない。

下で歩く音が聞こえる。

リビングの戸を開け、ゆっくりと階段を上ってくる音。だんだん頭の方が見えてくるなり、だんだんと、心臓の鼓動が早くなっている。

ギュツとその胸を押さえつけるように、ギュツと掴む。

「悠樹？どうかしたの？」

母だ。さつきも会ったはずなのに。凄く。すごく久し振りに感じてる。この母さんの声も、母さんの瞳も。母さんという存在すら……。数年前に一度見たか聞いたか。それだけだったかのように、凄く耳慣れていないような声。その心配そうな瞳で見つめてくる。その瞳すらも、久しぶりに見た。凄く。懐かしい。

ゆっくりとした足取りで近づいてくる。

俺は。

ゆっくりと首を横に振る。

それしかできなかった。

「なんでも……ない……」

「誰かと会話してなかった？」

「してない！」

怒鳴りつけた瞬間。ヤバイとさすがに思い、ハッと顔を上げると。悲しそうな瞳。それと驚いたような瞳がかぶつてみえる。もう遅い。何をどうやって訂正しても、きつと頭が狂っているからまともな言葉が出てこない。

ゆっくりと下を見つめ、母の隣を通って階段を降りようとする。

「ごめん」

そうぼそつとつぶやいてそのまま階段を降りて行った。

父も何か心配してきたのか、部屋から顔を出して、心配そうな瞳で俺を見つめていたが、それをあえて見ないように玄関で靴をはき、さっさと家を出て行った。

これ以上何を考えれば良いのだろうか。

悠汰とかいいやがったあいつは、心臓を狙うやつがいるから助けない。そういつていた。けどどうしてこの日本で心臓をとられなきゃいけないのか。どうして心臓なんかが必要なのか。

他人に移植して出来る能力なら、俺にだって能力があるはずなのに、今までそんな能力らしい能力なんて発揮された事なんてなかった。

ごく普通の脳みそで、ごく普通の人よりも下の運動神経をもっている。

そんなにも自慢できることもないし、趣味という趣味もない。特

技だつてないし、これと言った何かが身体にあるというわけではなかった。

あいつが言うその心臓だつて、内側にあるものだし、死なない限り盗まれることもない。別に盗んだって俺は何も価値がないと思っている。そんなに考える事を言われたわけではないと思っっているし、あんなの放つて置けばどうにかなると思っっている。

けど。

けど。

——なんで泥坊なんて思えなかったんだろう

泥坊つて思えば、思いっきり怒鳴つて親を呼んで追い出してもらうことくらい出来たかもしれないのに、何で出来なかったのか。

そう考えると、ドンドン落ち着かない気持ちになってくる。

あいつに心のどつかを奪われて言ったかのように、何かを信じてはいけないと思っっていたなにかを取られた。そんな気分だ。すっかり綺麗に何かを奪い去つて、空になってしまった何かが身体の中にある。

泥坊

身体の何かが盗まれたから。

そつちの面では本当にあいつは泥坊なんだな。なんとなく、それなら納得してしまう自分が悔しい。

わけのわからないことをいわれて、わけのわからない状態にさせて。すべて嘘だった。

けど、結局誘拐紛いな事をされるのは本当だなんていいだして。そして最終的には『お前は俺だ。俺はお前だ』なんていいだしやがって。

——なにが「未来から来た」だ。ならこの先どうなるか言ってみやが……………

『じゃあ。俺が変な男たちにこれから狙われるって言うのかよ!』

そう怒鳴った俺の言葉にあいつは『そうだ』と答えやがった。当たり前だという真剣な瞳で。

そう考えたただけなのに。

胸の鼓動が止まらない。

背筋にはかなりの冷や汗が流れ出てくるし、心臓は早いし。それで何より再び頭がパニックに襲われそうになって来る。

もしそれがほんとうだったら？

——考えたくない!!

頭を抱え込み、その場にしゃがみこんだ。その視界に見えたものは。

黒いベンツ。

黒い男。

サングラスをかけた……………男……………

——うわあゝすごあゝい。本当にこんなに黒いんだあゝ

もちろんその思考は一瞬にしてかき消した。なんていったって、ついさっきそのような話をしていた。

反射的に立ち上がり、一步一步下がって行く。

家からは結構走ったから、今すぐ踵を返して走ったとしても、車でついてこれれば簡単につかまってしまふ距離。けど、この人たちが別に危ない人とは言い切れない。けど。

——あんな事を言われた後は……パニックに陥ってたら疑うって……

ゆっくりとそのサングラスの男は、だんだんと近づいてくる。何の躊躇もなく近づいてくる。

恐怖。

俺はただそれだけの言葉にやられて走ってしまった。

——なんて言っただけで怪しいじゃないかサングラスですべて黒くて……！

はじめてみて「うわぁ」すごーい。本当にこんなに黒いんだあゝ」なんて一瞬感心してしまった自分が凄く悔しい。

走って良いのかわからない。

少し暗くなってきたこの状態で、微かの家の隙間からやられては簡単にやられてしまう。そんなに鍛えているわけもなく、運動神経があるわけでもない。

いざという時のことを考えるなり、急に目の前が余計に暗くなってくる。血の気がサーッと消えていく感覚が流れ出てきた。

急いで俺はその向かった家のほうに走っていく。すると、向こうの方から悠汰が搦いてきたみたいだった。

『走れ！！とりあえず走るんだ！！俺がカバーする』

なんだか俺にしか聞こえないような声で、そう叫んできた。聞こえ方が、凄くクリアで、それしか聞こえてこないような透き通った声だった。こんな声をしていたかと悩んだが、そのとおり走

つていると、俺の隣を通り過ぎ、その男たちのほうに直接向ったのだ。

男たちは、悠汰のことなんか目に見えてないかのように俺に向かって走ってくる。悠汰はそのまましゃがみこみ、野球部がするかのうに思いっきりスライディングして、足を絡ませていくのだ。

軽々とその男たちは簡単に引っかかり、転げ落ちていく。

そのやりとりに疑問を持ってしまった俺は、ピタリと走っている形のまま後ろを振り向く形で見ていた。

『走れ！！』

怒るように怒鳴りつけられ、反射的に足が進んだ。

思いっきり走って、家を見つけるなりだんだん嬉しさに足が止まって行くとき。急に視界がグルリと回った。背中に何か暖かいものの所為で力が抜けた身体は支えられていた。

足には力が入らないし、凄くフラフラしてくる。身体がしっかり固定されていない。首の据わっていない子供みたいに。

『悠樹！！』

後ろから透き通る悠汰の声が聞こえてきたのに。
凄く強い睡魔にやられる。

縄

——悠汰…………お前本当なら本当らしくいえよ……

ちやつかりいつのまにか車に乗せられていることに、目を開けなくても解る。

不定期に揺れる身体とか、音とか。たまに聞こえる太い男の妖しげな声とか。驚くところなら、起こそうとしているのか、悠汰の声が聞こえてきたりとか。起きてって。ずっと叫んでるけど、凄く眠くて、身体も動かしたくないし、今の状況を夢とりたいからこそ余計におきたくなかったし。

実際悠汰の声が煩くて、もうおきてしまおうかと思っても、その時になると男の図太い声が聞こえてきたり。なんだか仲間内で話していることだからボソボソすぎて聞こえないし、悠汰の声でかき消されているし。

——っていうか普通こういう時って悠汰を静かにさせるのが先決じゃないのかな？？

なんてだんだん不思議に思ってくるし。

何でこんなにも野放しにしているのかわからない。

俺の両手は、背中の後ろで何かによって括られてしまつて動きそうもないし。足だって両足きっちり揃えられている。手首や足首なんて、もう痛すぎて痛みが感じなくなつてしまっている。

いつ悠汰以外によって起こされるのかが不思議だが、車が止まりそうな予感もしないし、それにさっきから信号に引っかかっているのか、曲がるとき以外は減速しない。山道にでも上つてるんじゃないかと思うけど、坂になったり上つていたりなんて予感はない。何せ身体がジャンプしたりする程度だから。

運転下手糞だなんていつたら、きっとこの場で殺されそうだ。

本当に運転が下手。というか荒い。凄く。

曲がるときだって思いっきり曲がるし、減速が足りないし、何せジャンプが原則足りなすぎる。

「荒地で運転してるとか??」なんて思ったくらいだし。

目が覚めたのはいつ頃だっただろうか。多分寝て車に乗せられたのか、思いっきりこの位置に放り投げられたときだから、そう何時間も寝ていないと思う。

手首やら足首やら縛ったのだって、きっとその場でだと思う。それで周りの人たちにみられていたらどうなることやら。俺自身的には、見つかつてくれていた方が嬉しいのだろうが、この怪しい奴らにとっては全く持って面倒な事。

だったら車の中でやればいいのと思ったが、本当にその場で結んだのかはわからない。

本当はどこかで降ろされてそこで結ばれたのかもしれないし、ジャンプでおきたのかもしれないし。

——じゃあ結構寝てたのかな？

なんだかいろいろ考えていたらもうどうにでもなれって感じになっ
てしまう。

心臓だっって何か必要だっって言うなら別に取っていけ。いなくなっ
て困る人なんていないと思うし、俺だっって、そんな大事な人がいる
わけでもない。彼女がいるわけでも、変な相手がいるわけでもない。
こんな事だったら死んで悲しんでくる人一人くらいは作っておく
べきだったかな？なんておもうけど、逆にこんな事になって変に悲
しがるのも、自分が苦しいかもしれない。そう考えると、逆に
いなくて良かったなんて思ってしまう。

確か悠汰は未来から来たただかなんだか言っていた。ということは、

俺はその頃には生きているということなのだろうか。それとも、死んでしまったからタイムマシンなどを使って過去に戻ってみてということなのだろうか。

だって。

悠汰の事が見えていないかのように、軽々とあの男たちが倒れて行っただから。

いや。サングラスで見えていなかった。というのは多分ないだろう。なんていったって俺のことを後ろから抱きとめたくらいなんだから。見えていなかったら捕まえることなんて無理だ。

先ずどうやって俺が眠ってしまったたかなんてのは多分一瞬の事だったんだろう。全く持って覚えてない。

何かを飲まされた記憶は無いし、そんな味もしない。しないものなのだとしても、何かしら喉を通ったとか、嗅がされたとか考えるのに、全く持って無反応だった。簡単に言えば、いつの間にか眠ってしまったっていた。見たいな感じだ。

口に何かを付けられたこともないだろう。きつと。

こうなったら悠汰に聞いて見る。といっても、今悠汰が他のやつらに見えていなかったら、ただの俺の独り言だ。

という事はさっき変にこけたのだって、俺の所為だなんていわれたら、それが力となるのだろうか。

それともこの人たちは、その力とかいうやつとは全く持って無関係のものなのだろうか。出来ればそっちの方が嬉しいかもしれない。

一度誘拐というのも受けて見たいと思っていたし、それなりに両親から離れてみたいとは思ってたが、本当に誘拐紛いな。いや。誘拐されるなんて思っても見なかった。本当に両親はこれで探すのか。それとも本当は親戚だったり知り合いだったりして、そんなに探そうとも思わないのか。

——そうだな。俺が逃げたから捕まえただけって言う……案も……考えられなくは無いんだけどなあ……ヤッパリそれにしては乱暴だよな……

いつの間にか冷静に戻ってしまっていた頭は、もうどうでもいいことばかり考えているような気がしてきた。

感じる限り、悠汰は俺にしか見えていないような感じもするし、声だって、特定俺にしか聞こえていないだろう。だからこそ、それで悠汰の存在をばれないようにしなければならぬ。

——利用………してみるか。

今周りがどうなっているのかとか。聞きたいことはどこでもいけそうならば、二人きりになった時とかに聴けるだろう。

それに急に縛り付けて思いつきり殺そうなんて考えないだろうし、それなりに何日間か様子を見たり。

——してくれるとうれしいな……

何せこっちもこっちで作戦会議がしたい。
そして

アヤマリタイ

——なんで？

何で今自分で謝りたいだなんて思ったのだろうか。とりあえず何に謝らなければならぬのだろうか。謝る必要なんかないと思っ
ているのに、なんでか解らないけど、凄くアヤマリタイ気分になった
けど。

なんでかなんてすぐにわかった。

あいつの言葉を信じて今にでも逃げていたりしていれば、こ
うやってつかまっていたりなんかなかったかもしれないんだ。

大人しく家にいたら、それなりに逃げれるチャンスなんてい
っぱあったのに、信じていなかったからこそ、逃げるタイミ
ングを自分で失わせてしまったのだろうか。だからだろうか。
きつと。悠汰を少しでも傷つけたと思う。

「着いたぞ」

ボソツと運転手だろう位置にいる人の声のはっきりとそう
言っていたのが聞こえた。すると、手首についている縄だ
ろう。きつと。その縄を掴まれて思いつき俺を引きずりだ
してくる。

空気が変わった。

少し乾燥していて、涼しい場所になる。車から出され
たときだから、きつと外なのだろう。薄っすらと目を開
けてみると、レンガ色の土。この際土色で良いのだら
うか。とりあえず、少しボソボソしているだろう土が視
線の向こうに見えてきた。それに、周りはずでに暗か
った。時間帯的にはもう8時を回っ
ていてもおかしくは無いの
だろう。

思いつきり担がれているの
だろう。おなかに何か硬い
ものが当たっている、フラ
フラ揺れている。それに
視線が遠いのと、その肩
の持ち主だろう人の足も
みえるし、その後ろに歩
いている黒いスーツの足
も見える。

頭が下になっ
ている所為で、凄く吐き
そう。

揺れるし。不安定だ
し。スツと薄く開いた瞳
を、左右に振ってみ

ると、右側にオドオドと悠汰が着いてきていた。

縛られている様子もないし、存在に気付いているのか気付いていないのかわからない状態だった。ヤッパリ悠汰は見えていないのだろうか。未来からやってきたというくらいだから、見えなくてもなにか納得するし。

軽くため息を吐こうと思ったのだが、その瞬間に凄く吐き気に襲われる。

——頼むから降ろしてくれ

ここでおきたことをどうにか示せば良いのだろうか。それともここで起きてしまったら直球に話が来るか。

ここでまだねていたら、少しどこかに横にさせてくれるのだろうか。そしておきるまで監禁みたいな事？どっちでも良いが、そっちの方が嬉しいかもしれない。見られてたとしても。それがカメラだとしたら運がいい。そのカメラに背中を向けたりして口を見えないようにして、悠汰と話が出来るだろうか。

それとも悠汰の存在を知っているならそんなことも出来ないだろうか。知っているって運が悪いな。けど見えていないかもしれない可能性のほうが高い。

——ううゝ……どうなんだよ……

聞きたくても聞けない。

いつの間にかどこかの建物の中に入っていて、コンクリートの中に、コツコツとする音が聞こえてくる。響いているのだろうか。凄く耳に入ってくる。

ガチャ

止まったかと思えば、どこかのカギが開き、ドアも開いたような音がしてきた。

入っていく中は多分全部コンクリートだろう。何か飾り見たいな絵画があるのも、なにか棚みたいなのやら、テーブル代わりになっていそうなものもある。そして、スツと体勢が低くなり、思いつきり背中から落とされる。

重ねていた手が痛み、うつと顔を渋くさせてしまったことに気付いてしまったのだろうか、誰かの手がソツとオデコに当たった。架かっていた髪をスツと退けられる。

——あれ？優しい……？

意外にも優しく、本当は俺の心臓を狙うんじゃないかと、助けてくれる方。なんて方向に勘違いしてしまったりもしてしまう。なんなのだろうか。

「起きる様子は？」

「手が重なってかつらそうな顔はしましたが起きる様子は無いです」

「薬強すぎたか？」

「いや。そんなに強くは無いと思うんですけど……」

「そうか。まあ。これは……だからな。うん。起きるまでソツとしておこう」

「何時ぐらいにします？」

「そうだな。あと一時間して起きなかつたら起こすか」

「はい」

なんて会話が聞こえてくる。

『これは……だからな』という言葉が気にかかる。これは……なんだったのだろうか。何か言っていたよう何も言わないでアイコンタクトを取ったような。

凄く気になるけれど、もう一度がちゃんとなり、カチャカチャとカギが閉まったような音がするなり、ゆっくりと目を開ける。

「悠汰……？」

「悠樹！？おきてたの？」

「お前が煩いから起きた」

軽くため息混じりにそう言ってやると、視界に悠汰が入ってくる。

「つらい？」

「……ごめんな」

「え？」

「信じなくて……」

「いいよ。それより辛い？大丈夫？？つらそうな顔してるけど」

「なあお前ってあいつらに見えてないの？」

「うん。触ることは出来るけど見えてないよ。靈感があっても見えないと思う」

「ならさここにカメラある？」

「えっ……わかんない」

「探してみて」

「わかった」

薄く開いた瞳は、ゆっくりと閉じてみた。

凄くはき汚していた所為か、凄く頭がグワングワンする。バイキングを20回以上連続で乗ったかのように、頭を定期的に動かしているように、頭が重い。

「んゝ今まで探した事ないけど……無いと思う」

「そっか」

それが解るなり、ゆっくりと身体を動かそうとするが、両手が使えなくて体を起こせない。

「体起こすの？手伝っよ」

そういつなり、肩を掴みゆっくりと起こさせてくれる。

少し硬いベッド。足をぶらりと下ろして、ゆっくりと悠汰を見上げる。

声はどうかわからないけど、顔は本当に俺そっくりだ。

「なあ、お前壁とか通りぬけとか出来ないの？」

「ん……幽霊じゃないしなあ一応」

そっぴいながら、ゆっくりとドアに近づいていく。そして、ソツと手をドアに触れるなり、何の音もせず、ゆっくりと手が消えていく。自分でも驚いたかのような顔をこっちに向けてくるなり、クスクス笑ってくる。

「できるっばいよ」

「……そつか。さっきの奴らは悪い奴？」

「違う。姫倉家。多分あのタイミングで出て行ったから上手く行ったんだと思う。っていうか、俺が転ばせた方が土村家。悪いほうね。多分少し過去が変わったよ」

にっこり笑いながら、俺にそう言ってくる。

「なんていったって俺が誘拐されたのは、家の中。だから家から出なかったからそうなったんだと思う。タイミングが良かったんだよ」

じゃあこれからどうすれば良いのだろうか。

おきたことを知らせた方がいいのか。けれど、いいほうだとしたら、かなり手が荒すぎるような気がする。それが焦っていたからだろうか。焦っていたのなら仕方ないような気がする。

運転が荒かったのも、変な奴らから撒いていたのかもしれないし。

そう考えると、前髪を避けてくれたことが少しばかり納得が着く。
こんな事になるんだったら車でおきたことを知らせていたのに。

「なあ、俺にある力ってなんだと思う？」

「ん〜……それがわかんないんだよねおれにも」

「っていつかお前は何をされてどうやって過去にきたっていうの？」

冷静にしているのはいいけど、悠汰だってそれなりに誘拐されて、それなりに辛い思いを受けているのに、こんなにも暢気でいることがわからない。何があったのか。

少しファンタジックがかかっているこの現実には、どうすれば成功への道につながってくれるのか。今一番有力な情報を得るには、悠汰の一言に頼るしかなかった。

「俺のときは今の俺みたいに導いてくれる人がいなかった。だから。本当は助かりなんかしなかった。一応姫倉家は強いから、預かってはくれたんだけど、学校で……土村家だと思われる奴らにあっちゃってね。それで俺が『やり直したい。昔の俺に言ってやりたい！』っておもったら。気付いたら自分の部屋でさ？下ではなんか母さんがやってるし、話しかけても振り向いてくれない時に、窓から俺が見えて、もしかしてって思って。

で開いてもいいのになかなか開かない俺から開けてやったってわけ」

「じゃあお前悠汰じゃなくて悠樹……だろ？」

「うん。けど自分で自分の名前言うのいやだから悠汰にしてみた」

にっとなつてピースをしてくる。

それなりに辛い運命を背負っていたのに、こんなにも楽しげな感じになれるのだろうか。今の状況を一番理解しているのは悠汰。つまり未来の俺悠樹であつて、しっかりしなきゃいけないのはこの目の前にいる未来の俺悠樹。

つまり悠汰が、未来の悠樹である。それは本当だとんだか信じてしまうのも、きっとこの状況に陥ってしまったからだと思う。

こんな事になったのも、すべては俺が生きているから。だと思う。

「……力がわかんないんだろ？じゃあ………」

——じゃあ。悠汰がその俺の力になつてくれないか？

そんなこと、いえるわけがない。

今ここに悠汰がいることをいいことに使っていることになつてしまふ。そんな事をして、いつか悠汰が傷つくようなことになつてしまふのはいやだ。それに攻撃するにでも、俺の命令があつたりなかったりで、それなりに自分の思いどおりになつていないことがばれたりしたり、悠汰の存在にばれてしまえば、もうそれ以上使うことは出来ない。

向こうから悠汰に触れることが出来るかできないかの問題が気になる。もし、触れるつもりじゃなかったのに触れてしまった場合、掴まれてどういう形をしているのかを調べられたりしてしまえば、戦うにしても、こっちが不利になつてしまふ可能性がある。

というか、その前に俺が悠汰に触れることが出来たりするのだろうか。

ゆつくりと目の前にいる悠汰に触れようと手を伸ばす。何かなんだかわかっていない悠汰は、ジッと俺の目を見つめていた。

触れた悠汰の手は、本当に人のように温かかった。暖かかったか

らだからこそ、俺以外が触れても暖かいことになってしまう。
それがないにしても、悠汰を使って攻撃するには、ぶつかってく
れなきゃ意味がない。

真剣に考えて記憶を遡ってみる。

——そっか……ふれることはできるんだ……だってスライディ
ングしたんだもん

「悠汰って触れることが出来たりできなかったりするの？」

「うん。さっきのドアだって、一応俺土村の方蹴ったし。触れよ
うと思えば触れることが出来るし、触れないようにすれば透明人間
ってことになるんじゃないかな？飛ぶことは出来なかったけど」

「ハハッ……。なら一応ポルターガイストになっちゃうね」

クスクス笑う俺の頭に、ソツと手を乗せて、グリグリと髪の毛を
グシャグシャにしてくる。

「ってあれ？俺いつの間に縄ほどいた？」

「さっき俺が解いたんだよ」

エッヘンとするように、両手を腰に当てて威張ってみせる悠汰に、
クスツと笑ってしまう。何でこんなにも暢気に楽しませてくれるの
だろうかと。

けれど、俺たちはある大事な事には気付いていなかった。

「なら足のもほどいてよ」

「威張るなよー」

ブーブーと頬を膨らませて体勢を低くして解いてくれた。

「けど少し乱暴すぎるよ姫倉さん」

「僕に言っなよーけど本当に姫倉さんはいい人たちだよ」

「へえ」

なんていっていると、解けたと何か嬉しげに言っていた。

——……あれ？なんかいけないような……

漸くここで大事な事がわかってきた。

何で手首を縛られていたのか。それと、何で縛られなければなら
ないのか。それにもう一つ。また一時間ほどしたら来ると言ってい
たような言葉。

「どうしたの？凄く顔色悪い」

「なあ悠汰……俺いけないこと思いついちゃった……」

「なっなに？」

「……これ解いたはいいいけど、両手縛られてたのにどうやって解
いたことにすれば良いの？」

「……………」

自分の力の行くべき方法

2人同時に顔から血の気がザーンと退いていつてしまったような予感がする。

さすがの悠汰でも、縛られてたように縛りなおすのも結構困難だろうし、その間に見つかってしまったえば、凄く曖昧だ。こうなってしまえば開き直るしかないのだろうか。

「マアその時はそのときだろう」

マア良いや。という答えを残したとき、ドアの方から歩く音が聞こえてきた。なんだかも諦めかけたその縄を持って、軽くため息をついた。

「ごめんね？悠樹」

「いいよ悠汰は悪くない」

ボソツと俺がそういうと、ゆつくりと鍵を開ける音がした。声も聞こえるわけじゃないだろうからと、悠汰が言くと、スツと微笑んでいた。

ゆつくりと戸が開く。

跳ね上がるような心臓の鼓動がだんだん早くなってくるのが解る。なんて言っただって。どうしようの巻だから。困る。

縄。の行方が。

開かれる扉を睨みつけるように、していたとき、スツと何か面白い事が反射的に思いついた。

ベッドにあるシーツに軽く包まるようにして、中にもぐりこんでみた。すると、チャッカリ長さがあっていて、手が結ばれているよ

うには見えない。といっても結局いつかは見つかることになるのだからこんなことをしているのは、ただ根性がないというのか、いらぬ苦勞というものだろう。

「悠樹?？」

不思議そうに悠汰が、ドアの方に背を向けている俺に近づいてきて、顔を近づけてくる。

にこつと微笑んでやると、少し呆れたようにため息交じりの微笑で返されてしまった。一応これでも楽しんでいるという事がわかったのだろう。

相手が怖い奴じゃないと思えば、少しくらいこんなことをしても罰がない。と考えたいからこそ、少しした遊び心もいいじゃないか。

「まだ寝ていたのか……」

少し呆れたような図太い声が聞こえてくる。

『あつあの人は姫倉祐司ひめくらゆうじさんだよ』

何か楽しみながらそう言ってくる。

肩にその祐司という人の大きな手が当たり、ゆっくりと身体を仰向けにさせられる。

スーッと言った寝息に、少しため息をついた音が聞こえてきた。これから大事な話があるような口調には聞こえなかったから、別にこれくらい手間取らせていいだろう。

「おきてください悠樹君」

軽く頬をぺちぺちと叩かれる。

「ん……んんっ……」

少し寝返りを打つように、顔をそむかせながら、身体をゆっくりとさっきの方向に動かした。

薄く瞳を開けると、笑いをこらえて腹を抱えている悠汰が目前にいた。それに笑いそうになったのを必死にこらえながら目を閉じた。

ソツと肩をポンポンツと叩かれて、漸くおきたかのように、ゆっくりと瞳を開ける。

「ん……なんですか？祐司さん？」

につこり微笑んでやると、ピタリと固まったような顔になっていた。

それにクスクスツと微笑んでやると、だんだん顔から血の気が退いていくのがわかった。

『ハハハハハハッ』

悠汰もそれが面白かったのか、笑いをこらえることが出来なくて腹を抱えて爆笑しだした。俺も軽くクスツと笑ってやると、少しあわてたような行動で俺の肩を掴んできた。

「どうして俺の名前を??」

「な・い・しょ」

ちよつと楽しむように言っていると、悠樹最高と悠汰が笑いながら言っていた。

つかまれた腕をソツと開放されている手で、ゆっくりと掴んでやると、意外と反応が薄くて、そのまま放されていたが、漸くおかしい事に気づいたらしい。

「縄……いつ解いたんだ?!」

「ええつと。足の縄は祐司さんが来る数秒前で、手はいつの間にか解いてた」

と笑いながら言うと、少ししかめるような顔で、ゆっくりとシーツをめくり上げ、足を見てみると、もうすでに自由になった足をみて、だんだん血の気が退いていった。

クスクス笑う俺の顔を覗きこみながら、真剣な声で言ってくる。

「自分の能力を……コントロールできるんだね?」

「できないよ」

につこり微笑んでそう言ってやるが、全く信じていないように言ってくる。

「ウソをつくんじゃない!縄を解くにしたって自分ではほどこないようにしてあるんだ」

「じゃあ自分じゃない誰かがしたっていう思考にはならないの?」

ちよつとだけかわいこぶるように言ってみたり。

——ああ……こんなことするんじゃないかった

そして今更後悔してみたり。

「マア無理矢理手を抜いたんだけどさ……痛かったあゝ」

ウソをついて自分の手首を軽く擦ってやった。確かに赤くなっていて、軽く腫れているところは腫れてしまっていた。

複雑な顔をする祐司さんに、クスツと微笑んでやった。

「そんな変なものを見るような目で見ないでくれない？俺完璧ぢやんとした人間だし」

「そのことなんだが……」

「なに？」

「朝倉。お前には少し警戒心が無いとは思わないのか？」

少し体を起こしていた俺の体を、自分で仰向けに戻ってみる。軽く悠汰のほうに手をやって近づいて来いというように、悠汰の腕を引つ張る。

祐司と同じく複雑な顔をしたまま、悠汰はゆっくりと口許に自分の耳を近づける。

<ドア閉めてきて……>

ボソツと俺がそういうと、クスツと悠汰は笑ってうんと頷いて、さっさと走っていった。こう考えてみると、悠汰は足音がしない。結構バタバタ走っているように見えるし、俺も走るときは結構バタバタいうほうなのに、全く持って聞こえない。という事はヤッパリ見えないし聞こえない。というのが問題になっているのだ。

悠汰はゆつくりと戸に手をかけて、ギーッと音を鳴らしながら、閉めていく。

自然に閉まるような音に、ハッと祐司はそっちの方を向いた。すると、開けっ放しにしていたはずの扉がきちんと閉まっているではないか。

俺の顔と見合わせながら、不思議そうな顔で再びこっちを見てきた。

「なに？そっちの仲間の人が閉めたんじゃないの？」

ゆつくりと体を起こし、ベッドに足をぶら下げるようにした。そういえば、ここに着てから俺はきちんと歩いて居ない。たつても居ない。薬がどうのこうのっていつていたけど、本当にどうやって嗅がされたり飲まされたりしたのかは、全く持って覚えても居ない。

これは少し失礼なことなのだろうかと思いつつ立ち上がり、靴を履いていない所為か、ひんやりとした床が感じられる。

それでもまだ不思議そうに見てくる祐司の顔を、こっちからも不思議そうな顔をして見つめてみた。

土が散漫しているわけでも、何か汚れているような様子もない床を、ペタペタと音を鳴らしてドアに近づいてみる。後ろからもゆつくりと祐司が近づいてきているのが解る。

祐司が俺の後ろにつくと、俺はゆつくりとドアノブに手を乗せて回してみると、カギが閉まっているわけでもなく、開いていて、軽々と開くドア。

「開くな……どうしてしまったんだ？ヤッパリお前の仕業？」

「あそこから離れてどうやって閉めるのさ。誰かが閉めたに決ま

ってんじゃないのかな？それか風」

ゆっくりと顔を覗かせてみるが、誰かが通った音はしないし、足音もしない。もちろん風が通るような様子は全く持っていないし、ドアを閉めるような微々たる風なんて無理だ。

当たり前な感想だが、静かだった。静かでしんみりとした空気。これからどうすればいいんだろうなんて、先のことは悠汰と後でも話し合えばいい。

開けた扉をゆっくり閉めなおし、振り向いてみるとヤツパリ俺に仕業があるという瞳で見つめられてくる。

——確かに俺ではあるんだけどね？？

未来の俺だから実際は俺じゃないんだよ？といたいのだが、そんなこといつても変な人に思われてしまうが、心臓がどうのこうのという悠汰やお前らの方がおかしいだろと言い返してやりたい。が、まだ祐司の口から心臓がどうのこうのという言葉は、一切出てきていないのだ。だから一応俺が知っているのもおかしい話なのかもしれない。

実際早く話しに入ってくれたほうが、精神的に落ち着くのだが、話してくれる感じもないのなら、コチラから話を振ってみてはどうなのだろうなども考えた。

「で？なんで僕を連れてきたんですか？」

直球にいきいてみると、いきなり俺のことを持ち上げて、運んできたときと同じように方に担ぎあげられる。

「うわっ……ちょこれさっきも思ったけどはきそうになる……」

と言った瞬間に、硬いベッドに思いつきり倒される。

「うわっ……………なんだよ」

『大丈夫？悠樹。祐司さんは乱暴だけど根は良い人だから許してあげて』

悠汰にそういわれてしまえば、本当のことに近いから。だから信じるしかないような気もしてくるが、これだったら全員に会わせてくれればいいのに何でこの人なのだろうか。

「いいか。お前は狙われている身なんだ」

「俺が？」

——心臓じゃないの？

渋い顔で祐司の方を見つめるが、真剣な瞳でじつと見つめられるからこそ、これだから真剣な話しはだいつきらいだ。

しかも、隣では少しなन्दか心配そうな瞳で見ってくる悠汰がいるし。真剣な話しは苦手だつて知っているくせにどうしてそれも真剣な話しに繋げるような瞳をしてくるかな。

——そっか……………悠汰とは違う道を走ってるのか俺……………

悠汰がいてくれたから土村家には引つかからないでいるから、未来を変えてしまっているのだ。だからこんなことは悠汰には予想できていなかった事だろうし、それなりにいろいろあったことがいろいろと変えてしまっているのだろう。

だから逆に心配になっているのだろうか。

「朝倉悠樹。お前は心臓を狙われている」

「どんな力があつて？」

「それはおまえじゃなきゃわからない」

——それが一番困るんだけどなあ——

結局悠汰にも解らないというし、もちろん俺だつてわかっているわけではない。寧ろ全く持つて解っていないのと同じくらいわかっていない。だからこそ、俺は今どうすればいいか解らない。

悠汰を使つたとしても、力を使っている人からはこれはお前の力じゃないとかいわれてしまつては終わりだ。じゃあおまえのその力はなんなのかという問題があるから。

——うう……ヤッパリわかんねえ——

力の出し方さえわかれば、踏ん張るなりなんなりするのにそれすら解らないから聞いているのに。

何の力にもならないじゃないか。

「本人にも使えない力を欲しがつてどうするつもりなんだか」

ため息をつく。

今はそれしか出来ない。出来ないからこそ怖いのかも知れない。けど、今はなんだか夢を見ているようで、凄く現実感がなさ過ぎる。その所為で焦る気持ちも、今狙われているという自覚もない。

姫倉家の誰か一人でもこの力の事を、よく知っていてくれるのならば、それなりにヒントやら特質やら性質やら。力のことを知らな

いからよく細かいことはいいないのだが、知っているのならば教えて欲しい。もし知らないのならば、できればどうやってか調べるなりなんなりしてほしい。

「けど何で俺なの？俺にあるっていう可能性っていうのは100%なの？それどうやってわかったの？それなりに俺ポルターガイスト的なことも身の回りで起きたことは無いし、別に特技っていう特技もないよ？何の自慢もないし。こんな奴の心臓貰ってもマイナスになるだけに感じるんだけど？」

長ったらしくできれば力なんかないって言ってほしくて、求めるように力強く言うものの、じっと見つめるだけで、特にこれと言った反抗も、反応も見せない。表情をあれから変える事もないし、なにかを求めるわけでも訂正するわけでもない。

本当にただジッと見つめて、何かを吐き出させようとしているような瞳で見つめてくる。何も悪さなんてしないような純粹の、透き通った瞳で見つめてくる。

こんなにも純粹な瞳を見たことがなかった。いや純粹なのか透き通っているだけなのか、はっきりと祐司の瞳の中に俺がきちんと住んでいた。

自分の力の行くべき方法（後書き）

作者の王哉です

この話は、本当にゆっくり進む予定なので、いろいろと読むのが面倒になってきたりするかもしれませんが。
良ければ最後までお付き合いお願いいたします。

逃げ道

「うわあゝひろーい」

出来るだけ無表情で、言葉に強弱をつけずに棒読みをする。

あのかたつくるしい部屋から出て、ベッドの下にあった白い毛がフワフワしていて、触った感触も使う感触も気持ち良いスリッパを履いて、廊下を歩いていった。特にあれから会話っぽい会話もしてないし、悠汰が『祐司さん僕ここにいますよー』なんて、見えていないのに祐司の目の前で手をヒラヒラと振っていたりする。

もちろんのこと、祐司は全く持つて反応するどころか、瞳の中にも入っていないくて、逆にホツとした。

もしこれが祐司と悠汰の芝居だとしたら一応入っていてもおかしくない。別に何かを疑っているわけではない。というとうそにはなるが、まだまだ悠汰の事を信用していない事は確かだった。けれど、ここで一番信用しているのは、悔しいけど悠汰。しかいなかった。

いまだって、聞こえているのかいないのかは良くわからないけど、ベラベラ意味のわからないことをしゃべっている。

「今日何曜日？」とか「天気悪くないよね？」とか、「今何時なの？」とか、本当にくだらないことばかりベラベラしゃべっていた。本当にこれが未来の俺なのか。というくらいに。

あんまりそんなにもベラベラ適当なことをしゃべるタイプでは無いとは思いつけど、実際未来から来たとか言っている、それが本当なのかどうかもわからないけど、本当に激似だしそれなりに俺のことも知っている様子だったからだから嘘だろなんていえなかった。

周りは夜の病院のように薄暗くて、しかも周りはコンクリート色だし。というか、まさにコンクリートっていうかんじだ。

たまにドアがあるけど、入る予感を感じられない。なんだか本当

に一定の場所に行こうとしているように。今ここで踵を返して適当に走り回ったらどうなるのだろうか。

なんとなく。本当になんとかなくだけど、入ってきたとは逆の方向にいつていることはわかる。なんていったって運ばれた時に、どう曲がったのかとかこれでもいろいろ観察はしていたから、頑張れば出れるような予感もしないことは無い。

しかも歩いている音が2人分の足音しか聞こえない。

だから余計に不安になる事なんて、誰もがわかつているはずなのに、こんなにもしみみりと返ってくる筈のない悠汰の言葉だけを聞いているのも、凄く悲しくなってくる。

「どうした？」

フツと祐司の声が聞こえてきたとき、うつむいていた顔を上げると、俺と祐司の間にはかなりの距離が合った。

考え込んでいるうちに、足がいつの間にか止まっていたのだろう。

『悠樹？』

悠汰も、ゆつくりとうつむいていた俺の顔を覗きこんでくる。

これですっかりと考えていたことを忘れさせてくれると嬉しいのだが。

「具合が悪いか？」

この開いた距離を、再び戻ってきた祐司が頭をソツと撫でてくる。ゆつくりとその頭を横に振るが、まだ何か心配してくれているようだ。それならそれでいい。

寧ろ、心配して心配してどうにもならなくさせてやりたい。かなり困らせてやりたいという気持ちがある。

余り周りを困らせないタイプだと親から言われ、自分でも結構自覚しているほうだ。自分で言うのもどうかとは思うものの、余りわがままは言わないタイプだったし、周りの言葉で左右されるタイプだったかもしれない。それはそれで結構困り者だとは思うものの、「お前がいたら大変」とか、そんな感じの言葉は聞いたことがなかった。

学校でも、『優秀』という区域に入っていたといっても良いが、勉強面では別に優秀でもなんでもなかった。

けどなんだかこの人の近くだったら、凄く困るようなことを言いたい。

というか、先ほど結構困らせるようなことをしたものの、今は余りそう驚いている要でもないし、それなりにさっきの事をそれなりに理解してくれたり、勝手に解決させてくれているようにも見える。見えるだけで本心は同化なんてわかんない。

「大丈夫……」

撫でてくれている手をつかみ、ソツと頭から離させる。

今までこうやって特別やさしくされた事もないし、それなりにいつも同じようなことばかりが続いていたから、初めて会った人と、こういう風にきちんと向き合ったこともなかった。

恥ずかしい

簡単に言えばそういうことだった。

「そうか？もう少しだから頑張れよ」

何をどう頑張れとっているのだろうか。

踵を返して少し前を歩いている。迷路のようなこの道を迷うこと

なく、着実に向っていくこの男。祐司を、本当に信じていいものなのだろうか、だんだん不安にもなっていく心とともに、信じなければならぬという無抵抗な心も生まれてくる。

悠汰も結構信じきっているようだし、悪そうにも見えない。けれど、少し視点を変えれば凄く悪い人にも見える。悠汰も。

信じてくれとも言われてないし、信じなくてもいいとも言われていない。

できることならば「俺のことを一生を駆けて信じてくれ」というような、決め台詞並に格好つけている言葉はやめてほしいが。

といっても、このまま不安を抱えて、その目的地に行く気にもならない。

適度に距離をつけながら、見失わないようにゆつくりと付いていた。たまに振り向いては心配そうな顔をしてくる。

悠汰もこつちにいてくれればいいのに、向こうについている。

このまま踵を返して、必死に頭の中に叩き込んでいるこの建物のちよつとした構図。というか、来た道を思いっきり走って逃げることで、無理じゃない。必死抜いて走れば、この人を撒くことくらいは出来ない気もしないことは無いし。けど、体力が持つかどうかだ。

このまま進めば、確実に走らなければならぬ距離だつて増える。どうしようかなんて考えているうちに、だんだんと祐司との距離は遠くなっていく。

不安そうに、ゆつくりと悠汰が近づいてきた。反応して俺の足はピタリと止まった。

『本当にどうしたの？悠樹……もしかして……祐司さんこわい？』

<怖くないわけじゃないけど……信じていいのか……>

ボソボソという言葉。

祐司に聞かれてはいけないかもしれない言葉。

『大丈夫だよ』

——そうやって微笑めば俺が信じると思っっているのかこいつは……

確かに歩いている音がしないから、死んでいる。とかそういう系でも結構信じられるかもしれないけど、歩く音は聞こえるし、人間だし。ということを見ると、一番裏切りやすいのは祐司だ。

けれど逆を考えると、どこで裏切るか解らない悠汰の方が、すぐに裏切ることが出来るのに。なのになんでこうやって微笑むのだろうか。

音を鳴らさないように注意しながら歩いているのか、見えていないと信じさせているのかはわからないけど、そんなにも祐司と一緒にいたら、祐司と手を組んでいると考えなくもないのに。ゆっくりと足を一歩下げた。

『……悠樹……？』

考えがなんとなくわかったのか、悠汰がゆっくりと俺に触れてくる。

——信じちゃダメだ

心のどこかの俺がそうやって言ってくれている。

ヤッパリこういうところで信じなきゃいけないのは自分なんだ。

そうとわかったとき。俺はすでに走っていた。

『悠樹！！？』

「悠樹！？待つんだ！！」

必死に追ってくる悠汰と祐司。

どちらかというと、祐司の方が早い。

チヨクチヨク後ろを振り返りながらも、来た道を必死抜いて走る。息が切れていることにも気付かず、体力が続くかどうかなんてことを考えるよりも、いつどこで曲がればいいのか。もしつかまったらどうすればいいのか。

もしこれが裏切りだったら……

今やってしまったこの行動に後悔をしていたらキリがない。

今までだって、こうやって自分で決めて行動をしてきたことはあるけれど、後悔だってそう多いわけではない。それなりに後悔はして来てるし、それで学んだ事だって何ぼかある。

こうしている今だって、後悔してないということは無いけど。

「悠樹！待つんだ！！」

少しだけ息の切れた祐司の声を聞いて、だんだん鳥肌が立ってくる。

今行っているこの俺の行動に、どれだけの人が困るんだろう。誰かが困ってくれるんだろうか。

俺が困ったように。

心臓がどうのこうのといわれるくらいだったら、今すぐにでも心臓を切られて必要のないものにしてしまった方が、姫倉家は楽だし

親だつて楽かもしれない。

狙われるものが居ないのならば、追う必要もない。助ける必要もない。

「悠樹!!」

一人で寝ているだろう俺の部屋に来たことを、祐司に後悔させてやる。一人じゃなかったら、こんなにも必死扱かなくてもいい。

寧ろこんな迷路だったら二手に分かれるなりすれば、違う道でも向っているところにいけるかもしれないのだ。

なのに。

——待ちたくないし……

覚えている限り曲がる。感覚的にはもうそろそろ外に出てもいいくらいだ。と思ったとき、視界の向こう側で少し光が見えた。

——あそこだ

わかった瞬間後ろから勢いのついたものに抱きしめられ、思いっきり後ろに引き寄せられて、足が地についていないことに気付いたとき。俺は反射的におなかに回されている腕を、思いっきり引き剥がそうと必死になった。

「落ちつけ悠樹!どうした」

「やだ……離して……!!」

必死に暴れるが、なかなか放れる感じはしなかった。

『悠樹！！どうしたの？』

全く息の切れていない悠汰が目の前に来る。
元凶はこいつかもしれないのに。

「なんなんだよぉ……俺をどうする気だよ……」

「助けたいんだお前を！！」

息の切れた声。

どうしてここまで必死になって俺を追ってきたのか。本当は信じ切らせた時に心臓を狙う予定だったら？だったら姫倉家だって危ないかもしれない。悠汰はその事を知らないかもしれないのに、信じれなんていうのだろうか。

助けたいといわれたって、姫倉家が助ける必要なんてあるのだろうか。

ただ必要以上に体力を使って、必要以上に考えているだけなのかもしれないのに。

「何の力も無いもん！！ないのにこんなやつ助ける必要なんかいいじゃないか！！何を信じれって言うんだよ！！日本はこの国よりも平和なはずじゃないか！狙われたこともないし、平和で争いのない生活してたんだ！そんなときに急に何が心臓だ！……俺は普通の心臓しか持ってない」

半分は悠汰に言いつけてやった。

「お前は人を素直に信じすぎている」と言いたいかのように。なんも信じられない。

「あるんだ。お前にはちゃんとした力が備わっているんだ」

「何が力だよ！どれが力だよ！俺には何のとりえもないって言うてんだろ！力がないんだ力が……」

「じゃあドアはどうやって閉めた？無理矢理抜く事のできないあの縄からどうやって抜けた？」

「あれは力じゃない！！」

「どうして？どうしてそういえる！」

「解るんだそれは！」

「じゃあ教えろあれはなんだったんだ！！」

身体を離され、力強く向きを変えさせられ、向かい合うようにされる。肩を力強く掴まれて、真剣な瞳で見つめられる。

絶対に悠汰の存在はばれてはいけない。

「けど……あれは違う」

両手で顔を覆い隠し、言ってしまいそうになるその言葉を必死に止めた。止めたとともに、涙が流れ出てきてしまふ。

不可抗力にも流れる涙。

『悠樹……』

「あなたたちを信じられるものなんて……何一つないんだよ……」
酷いことを言っているのは承知の上だ。だからこそそういうしか

なかった。

無理に何かを決め付けて、必死扱いて何かを訴えても、今の自分には何の力もないことくらい解っているから。

「大丈夫だから……」

真剣な瞳の奥に見える優しい瞳。その奥に見える俺の泣き顔。悔しい。

こんな奴にこんなによいように自分が振りまわらなければ鳴らない羽目になっているという事が凄く悔しい。

確かに周りに流されるタイプではあったけど、それなりに自分で決めれることは決めてきていたのに。なのになんだか、一つの選択肢を選ぶ以外にない気がしてくる。

いやだったのに

信じる信じない——『きっと』

こうだから人を信じることはしたくなかった。

いやだった

本当にいやだった。

信じたら最後には、裏切られるしか残っていないと思っていた。

あれからさっきの部屋に戻されて、落ち着くまでそこにいなさいと優しい言葉で言ってくれた。支えてくれるかのように、ソツと頭を撫でてきて。

それでも俺は高校生だ。

そう訴えたかったけど、この空気を壊す必要もないと察してはいた。けど、ヤッパリ何か子ども扱いされている。それもいやじゃないと思った自分。そんな自分がいるからいけないんだ。

硬いベッドの上で膝を立ててすわり、小さくなる。

膝を守るように身体を丸くして、その膝に顔を埋める。隣に心配そうな悠汰がいる。祐司はというと、とりあえず他の人たちと離れてくるからジツとしているんだよと、外から鍵をかけられてしまった。

中から鍵をあけることも搔けることも出来ない。

監禁しているだけではないのだろうか。そう思うのに、なぜかそういえない。

なんだかこれが「おれの為」だなんて考えてしまうのはなんなのだろうか。けど、本当に狙われているのならば、外からしかかけられない鍵は危ないのではないのだろうか。

少しだけ現実を離れたりするかもしれないが、もし狙ってきている土村家が来て、中に油をブチ撒かれ、そこに火を投げ入れられて、外から鍵を閉められたら、俺は逃げ場がない。それこそ死んでしまふ。

ゆっくりと立ち上がって、扉まで行く。

その時に足を乗せたスリッパ。

よくこれであそこまで走ったな。なんて考える。

軽く人を蹴るように足を上げたら、簡単に脱げてしまふこのスリッパで、結構の距離を走ったし、祐司を困らせるくらいの距離は走った。

むこうは靴にしても、こっちはスリッパ。

そこまでがんばった自分に、お疲れさまっと、つぶやいた。

ドアノブを掴むと、ゆっくりと時計回しに回してみたが、半分も回さないうちに、ガチャッと止まってしまふ。

「悠汰……」

『なっ……なに？』

考えている事がわかったかのように、ビクついた口調で反応した悠汰の方を、ゆっくりと振り向くと、不安そうな瞳。その瞳で見つめられる。

顔も体つきも全く同じ。

声はわかんないけど、しゃべり方は今の俺とは違っている。少し甘え口調なのと、思っていることを、言っていていいところまできちんと整理してしゃべれている。

こんなの俺じゃない

何が未来からきただ。

悠汰。お前は俺じゃないし俺はお前じゃない。

同じなのは外面だけ……。

「鍵開けられるだろ？」

『むつ無理だよ！カギが無いと』

「ウソをつくな。カギがなくても開くようになってるだろ？」

きちんと調べておいた。

というか、さっき見た。きちんと普通の家のように、カチャンと回すだけでカギが閉まるようになってるあの仕組み。

これだってそうだ。

だから不安だろう。外からきて襲われかけたにしても、こっちから鍵を開けることは出来ない。だから逃げるにも必死扱いても逃げれるわけがないのに。

言った事が当たっているかのように、ギクリとしたような瞳でこっちを見ていた。

思ったことは顔に出る。

そんなところは俺と同じだ。

思っていることが出てしまうから、ポーカーをやっても、軽々と負けてしまったりしてしまうから。

だから少しそれを狙ってしまったかもしれない。

——ごめんな悠汰……

『悠樹……逃げたいの?』

その質問に、ジツと固まった。

そりゃ向こうのことがわかればこっちのこともばれるかもしれない。
い。

——あれ?

ということは、どうにかすれば俺らの心が通じ合うかもしれない。
テレパシーというのだろうか。

考えている事をお互いに解ればしゃべらなくても、アイコンタクトくらいで済むような予感がする。完璧にそんなことが出来ないかもしれないけど、軽く努力してみる甲斐はあるかもしれない。もしそれが俺の力であるのなら。というかそれはちょっと願望かもしれないけど。

何でか解らないけど、ホツと微笑んでやると、悠汰もニツと微笑む。

ゆつくりとベッドの方に戻り、足をぶら下げるように座る。

「なあ悠汰。俺はお前でお前は俺だっていうのは本当に信じているのか?」

『うん。本当それだけは信じて』

「じゃあさ。お前の心俺にわかんないかな。俺の心。お前にわかんないかな?それだったらこうやって話さなくても祐司さんたちがいてもばれないような気がしない?」

『……それは何か力が無いと無理じゃない？』

「もしそれが俺の力だったら？」

睨み付けるように見つめると、ビクツと肩を上げる悠汰がいる。

『……じゃあ今何食べたい？』

そう質問して、俺の隣にソツと座った。

——母さん特性のハンバーグ

実験して何分かして、ゆっくりと扉が開く音がした。ような気がする。ジツと目を閉じて、悠汰に寄り掛かっていた身体を、ゆっくりと起こしてベッドに横になった。

ジツと目を閉じて、今の悠汰の心の声を聞くかのように、ジツと耳を済ませていた。

ソツと何かが髪をいじる感覚がした。それでも目を開けずに、ジツとしていた。

ジツと。

今何を悠汰が考えているのを探すかのように、ジツとハンバーグを連呼していた。

《悠樹……》

ハッと何か悠汰に呼ばれたように顔を上げると、悠汰もウンウン

と唸りながら目を閉じて考えようとしていた。そして目の前には、祐司が少し驚いたような顔でいた。

そしてそのおくには、スラットして、頭の良さそうで、茶髪の少しかつこよさ目の身長が見た目180センチくらいありそうだった。

《悠樹……のたべたいの……》

再び透き通ったその声が聞こえて、スツと再び目を閉じた。

「悠樹？」

祐司の声が聞こえる。なぜ目を開けたのに起きないんだって思っているのだろう。けれど今はそれどころではない。

スツと真剣に心に悠汰を伝える。

ソツと悠汰のほうに手を自然にスライドさせた。シーツの上を。するとそれに気付いた悠汰はソツと握った。念を伝えるように。

——母特性のハンバーグだよ……

《……悠樹………はん……ばーぐ………母さん特性のハンバーグ！》

——正解だよ悠汰

《えっ………》

『悠樹！！なんか解ったかも！母さん特性のハンバーグ！？しかも正解だよって言った？？』

嬉しそうに、パアツと光り輝いた悠汰の顔を薄めで見つめてやっ

た。

こんな事が本当に出来るんだ。なんとなくそれが嬉しかった。
実験してから数分。

ヤッパリやろうとすれば、俺と悠汰はどこかつながっているんじゃないかって思った。

薄く微笑む。

薄く微笑んでくれる悠汰。

『っていつか考えてたら祐司さんがいることに気づかなかった』

てへっ と言いたげな顔で握った手を離さずに俺の隣にきちんと座りなおした。俺もゆっくりと体を起こしながら握られていない方の手で、頭を搔いた。

きちんと据わりなおし、ゆっくりと顔を上げる。

——向ここのやつ誰？

『えっと……えっと今向ここのやつ誰？って聞いた？んとね？あれは姫倉青磁^{せいじ}さん』

「悠樹大丈夫か？」

祐司はゆっくりと顔を覗きこんでくる。

「うん。大丈夫。それでそっちの人は……せいじ……さん？」

その言葉に、青磁ってひとも、祐司も驚いたように目を大きく見開いて見つめてきた。そんなに見つめられると、違うのかと思う。

ゆっくりと祐司は後ろを向いて、青磁のほうを見る。少し困ったような瞳に変わった青磁の瞳に、少し焦る。何でそんなにも困るような瞳になるんだろう。

ヤッパリ急に名前を当てられたら驚くものなのだろうか。

この瞳を見ていると、最初悠汰と会った時の事を思い出す。

いるはずのない人が今そこにいる。

知らないはずなのに。

凄く知った顔。

いつも朝一番に見る顔なのに、凄く始めましてといたくなるくらい。しかも、その部屋の事を知り尽くしているように。

今はそれに似ていて、

何で俺の名前を知っているんだと見つめられているように、俺にとっては少しの優越感がある。自分が一番何かの力を持っていると言いたげな瞳になりそうなのを、ジッと押さえつけるように、目線をジッと悠汰の方に向かせた。

こうやって困らせるように言うけど、逆に困っているのは俺であって、こんな困るような雰囲気の下のもの俺だ。それなのにすべてを今、悠汰の所為にさせてやろうなんて考えてしまっている俺は、何かどこか卑怯という二文字なのだろうか。

もちろん悠汰もそれにこまっついていて、いろいろ困っているようになっっていた。

「どうしてわかるんですか？」

青磁がしんみりとした瞳で、だんだん近づいてくる。

出来るだけ逃げようと、ベッドの端っこまで行こうと足をベッドの上に乗せたとき、ガシッと肩を掴み、見つめてきた。じっと何かを見据えるように、俺の瞳を確実に掴み取っていた。

少し震える肩に気付いたのか、ゆっくりと離してくれる。

「ごめん怖がらせたな」

そう言つて、肩に乗っていた手を、ゆっくりと頭の上に乗せ、グリグリと撫でてくれる。

微笑んだ笑顔が、スツと落ち着かせてくれる。なんだか癒しの効果を持っているように。

「あつ……こっちこそ驚かせてゴメンナサイ……」

ゆっくりとしたにうつむくと、悠汰がスツと顔を覗きこんできた。素直にそれに驚いて、思いつきりベッドにぶっ倒れてしまった。

「悠樹!？」

—— ゆうふう たあゝおまえー……

両手を思いつきり伸ばして、顔サイドに。ゆっくりと顔を悠汰の方に少しだけ覗かせて、ジッと悠汰を睨みつけると、クスクス笑っているではないか。

《驚いた顔最高!》

—— お前………

《ごめんって。けどヤツパリ声聞こえてるのって良いね安心する》

—— っていうかお前はしゃべるようどうせ聞こえてないんだろ？

大きなため息を吐きながらゆっくりと体を戻すと、祐司と青磁が、勢いよく肩を掴んで驚いたように大きな声を出す。

「どうしたの？具合悪い??」

「なにかあったの？大丈夫?!」

「大丈夫大丈夫!!ゴメンナサイもう少し休んでいいですか?」

焦ってそういうと、ゆっくりと肩を話しながら祐司が軽く言った。

「別にいいけど。それならここの仮部屋じゃなくて、ちゃんとした部屋があるんだ。準備も整ったしこんな埃臭いところじゃない場所に移動しよう?もし疲れてるんだったら俺が負ぶっていくけど」

そう言って俺を持ち上げようとした。その腕から少し離れて自分で行くと言った。

それからが一つの問題だった。

どこをどうしたら玄関というか、先ほどの光のほうにいけるのかを、再び頭の中で構成しなきゃいけないからだ。いざという時のためだけだ。

連れて行かれた場所は、途中リビングのような部屋につながる廊下を通った。凄く普通の家のリビングを20倍ぐらいにした部屋の大きさの場所に、いろんな人がいた。その部屋の扉につながる廊下を通ったときこっちに話しかけてきていたが、疲れているからというように祐司が言って、さっさとその奥にある階段を上らせた。

四人くらい並んでも上れるくらいの広さで、これで照明がもう少し明るくて、壁とかももう少し活氣的にすればお城みたいなのに、どうしてこんなにも薄暗くする必要があるのだろうか。そう考えると、何か隠れるように、祐司達が着ている服も、凄く黒や灰色に近い動きやすそうな服だった。

ヤッパリ変な奴らが集まってきた時に行動しやすそうになのか、そう考えるだけで鳥肌が急に立つものだった。

そう疲れるわけでもない階段を上りきると、また迷路みたいになっていた。

けれど、下よりも部屋があるのか、扉の数が多いし、それなりに自室みたいに扉に何かを架けていたりしていた。しかも床は絨毯じゅうたんのようになっていて、スリッパの音が聞こえにくくなっていた。

祐司が前に。逃げないようになのか、後ろに青磁がついて来ていて、なんだか逆に逃げる事が出来なくなってしまった。

——まあそれなりに筋力とか付けたいな……格闘的なこと習おうかなあゝ

『そうだねえゝ格闘できれば楽しね』

隣を歩いていた悠汰も、それに賛成はしたものの

『けど逃げないほうがいいからね』

と苦笑しながら忠告しながら。

心が聞こえるというのも、結構不便なものに変えてしまったらしい。

祐司がゆっくりと扉を開けた場所は、凄く広くて、照明も今までになかったくらい明るくて、逆に不安になってきた。扉も、他の部

屋よりも少し大きかったし、何かここは特別ですといっているような感じだった。

部屋の中は大きくてキングなみのベッドの大きさと、その周りにはカーテンみたいなのがあった。なんだかお姫様のお部屋みたいにさすがに化粧台みたいな感じのはなかったが。

こんなに大きくていいのかと言うくらいはベランダはなかった。部屋にあわず、小柄な人ならば出れるんじゃないか??というくらいは大きかった。もちろん祐司や青磁みたいに背の高い人には先ず無理だろう。

この中で現すならば、俺くらいだろうか。この窓を通れるのは。

「基本的な生活用品は一応置いてあります。クローゼットの中にも服もありますし、スリッパがお嫌ならば靴もあります。こちらに」

そういつて開けた場所は、扉のすぐ横側にある取っ手みたいなものを、クイツと回して下に開けると、靴が何個か板の上に乗っかっていて、その板子と動いてきた。

なんだかカラクリ象みたいな感じがして、カメラやらでどこから監視されていそうだ。

「ねえ、この部屋ってカメラとかで監視されてたりしないよね？」

じつと真剣な瞳で見つめてやると、コクリと頷いてくれる。

「大丈夫です。一応そういうのはお嫌だと思われましたので他のものを準備しました。これです」

そう言って指差したものは、何かのスイッチだった。

けれど、押す場所はカバーでちょっとした反動で押さされないようにしていた。それを親指で外すと押せるという事なのだろうか。

けれど、それを持っていてどうなるのだろうか。

「これはむやみに外でも出さないで下さいね。もし部屋で何者かに襲われたら即座にこれを押してください」

真剣な瞳で握られたそのスイッチを、じつくりとガン見する。
白くて、持ち運びが良さ気かといわれると、少し反応に困るよう
なくらいの大きさだ。

円柱で、本当に小さい。手のひらサイズ。スイッチの部分は淡い
赤色が光っていた。

「これ電池とか切れないのかな……？」

「一応大丈夫だと思います。1週間ごと一応という事で変えさせて
もらいます。もしなにかあればさっき変なやつらがいたあのホー
ルに来て下さいね」

「変な奴らは酷いだろ」

クスクスとドアのところで青磁が笑っているのに、俺もクスクス
笑ってやると、少し驚いたような瞳で見つめられた。

「なっ……なに？」

「いっいや……ここに着てからはじめてちゃんと笑ってくれたな
って」

「あれ？そうだったけ？」

確かに今まで何かを企むような瞳くらいしかしてなかったかもし

れないけど、そういわれるとこれ以上笑ってやらないぞっていう気持ちになるのは何かがあるのだろうか。

『ヤッパリ悠樹は笑ってるのが一番だよ』

——……悠汰も俺じゃなかった？

『けど自分じゃわかんないじゃん？俺って結構かつこよかったのかな？こうみると。自分がいやだったら悠樹のことみつめられないもんね』

なんていいながら俺の頬に触れて、オデコ同士を合わせてきた。俺は将来こんな奴になってしまふのだろうか。だんだん不安になってきたのは、問題なのだろうか。

ゆっくりと青磁の近くに行って、靴のところを開けてしゃがんでどれがいいかといういろいろ見つめていた。

「この建物（？）の中では全部靴とかスリッパじゃないとダメなの？」

「………どういう意味ですか？」

「いや。せっかく絨毯なのに勿体無いなあゝって。マアいいんだけどさ？あっこれにしよう」

手に取った靴は運動するには最高そうで、なおかつ何かカッコイイ。

軽くはいてみても、知っていたかのようにサイズがいい感じだった。

た。

「……なんでサイズわかるの？」

「それはいろいろ調べさせてもらいましたから」

——その前に俺を連れて行けよ

なんて突っ込んだけど、どうせそれでも逃げてたんだろうなんて思ったが、これで本当に悠汰が見えていて、芝居を扱かっていたらどう使用なんてまだ考えていたりもした。

だって、何せまだ狙われたのは一度しかないし、何で薬を盛る必要があったのだおろうかと言う所だった。それで信じるなんて無理な話したが、再び思ってみると、信じるなんていわれたっけ？という事になった。

結局信じれとは言われてない。

助けたいんだとかはいっていたが、信じれなんていわれてないし、この人たちも心臓を狙っていないという事は無いんだ。

結局信じさせて警戒心をなくしたところで殺すんだ。

きつと

そう

きつと。

信じる信じない—『きつと』(後書き)

この一話は

ちよつとばかり早めに進展させて見ました

信じる信じない——『絶対』

あれから一人になった。いや。二人になった俺らは、部屋に何があるのかを壁の一つ一つを見逃さないようにいろいろ見てから、疲れた身体をやわらかいスプリングの効いたベッドに渡されたスイッチを放り投げ、ボケーツと身体を任せていた。

ゆっくりしてから気付いたのだが、結構俺の心はユラユラと揺らいでいて、しっかりとしたことを決めていなかったような気がする。一瞬信じたり、絶対信じないとか。いろいろ言っているわりに、心のどこかでは結構信じていたり、頼っていたりする。

人間というのは大体そんなものなんだろうななんて考えたりもした。

眠れるくらい疲れているわけでもないし、さっき言いだけ寝たような気もする。

横になっているのに全く持って睡魔がやってこないのだ。

靴を再びはきなおし、ゆっくりと入ってきた時の少し重めの扉を開けた。

『悠樹?! また逃げるの?』

不安そうな声に、俺はフツと微笑んでこたえた。

「探検。大丈夫逃げないよ」

——逃げても絶対につかまる予感するし

『ならいいんだけど』

こっそりするかのように、顔だけ出して周りを見回した。
こんなんだったら、敵も味方も見分けがつかないうえに、誰かが
近寄ってきても絶対に気付かないと思う。

出来るだけ壁に沿って周りを注意深く見ている。何か忘れてきて
いるような気もしないこともなくて、だんだん心のどこかがドキド
キ言う。このドキドキ間は好きだ。なんだか安心するというか、今
から何かを探検するんだ。っていう強い心になれる。

忘れたものは仕方がない。

今はそうやってプラス思考に考えるしかなかった。

現実にもどれと思っけていても、この現実が今の現実であって、夢
だったらいつか覚めてくれるだろうとおもつ。夢だったらもつと派
手なことをしているのだが、もし夢だったらって思うと、必要以上
に暴れそうで怖い。

現実は覚めようとしていても、それが今だと考えるしかない。
だが現実というのは余りすきでもないかもしれないけど。

少しだけ足を引きずるかのようにあるく。

ザーツと足を軽く上げる一瞬だけ音になる。絨毯。少しふわふわ
していて、こんなところを靴で歩いて良いのかと思うが、一応祐司
も青磁も歩いていたからいいと勝手に思い込む。

ペタペタ触れるその壁は、全く熱がないコンクリートを触ってい
るように、本当につめたい。冷たいからこそ何かゾワゾワとした何
かがある。

「懐中電灯が欲しい……」

『なんで?』

「くらい」

『まあまあ』

和ますように、苦笑しながら言う悠汰も、周りをキョロキョロ見回しながら歩いている。

「隠しカメラとかヤッパリつけてるのかな??」

『うん。あるよ』

当たり前じゃんというように、きっぱりと言った悠汰の方をゆっくりと振り向いた。

ヤッパリここの事を知り尽くしているのかなと少し不安になりながらも、なに?というように口を動かした悠汰をじっくり見る。

「どこに……」

少し小声でそういうと、ゆっくりと悠汰は腕を上げて人差し指を何か一点に向けて指していた。

その先は、回れ右をしてすぐその曲がり角の天井の隅にある赤い光。じっくりそれを見つめると、確かに黒いカメラみたいなのがあった。

なぜカメラは赤い光があるのだろうか。

敵にカメラの位置を押しているようなもののに。と、漫画を読んでいるときとかに良く思っていたのを思い出した。

絶対敵だったならそれから隠れるようにする。なのに。何でこんなにも解りやすく?

目線を外してはあと大きくため息をついた。

もう一度顔だけを悠汰の方を見ると、何か嬉しそうにっこり笑

っていた。どうしてこいつはここまで幸せなのだろうかと、今更悩んだところで仕方がない。

——ああ……なんか悠汰が未来の俺じゃなくてもなんだか別にいい気がしてきた……

『ええー！？なんで！？』

——だって俺そんなにっこり笑えないって絶対……逆に他の誰かって言われた方が納得いく……まあべつにいいけどさ悠汰は悠汰ってことで

『俺も多分悠樹くらいの歳だったらそう思ってたな』

——だろ？

顔を進行方向に戻し、ゆっくりと再び足を動かした。

壁に沿って足を動かす。

一応ここは来た道だったはずだが、曲がった先に階段があった。

上る方と下る方。

一応玄関の方に行くなら下る方。なんて考える前に足が勝手に階段を下りていた。

本当に何度見ても広いと思う。

この階段は絶対に広い。

壁に沿って歩いていたら、凄く右側に余裕があるのだ。壁に手をつけているのは左手だから、凄く小さく感じてくる。自分が。

何でこんなにも広くしたのだろうかという疑問があるが、余り考えないようにした方がよいのだろうかとも思ってしまう。大人の考

えるところは良くわからない。

へんなところにお金をかけるし。

特にこの建物なんて得にそうだ。少し向こう側を見て、見上げてみると使われていないシャンデリアがあった。なんだかパーティーのホールに見えるが、視線を進行方向に戻すと、普通の廊下だし。こんなところにシャンデリアなんて取り付けてどうするのだろうか。それだったらもう少しこの建物内を明るくして欲しい。

何度目か解らないため息をつき、足を再び動かした。

少し向こう側からは、ドアの向こうから光る光が漏れている。特にこれといって宴会しているような声はしてこないが、出来るだけそっちを見ないように。光を浴びないように、ドアではない方の壁にぺったり歩いて行った。

ガチャ

ゆっくりと扉が開く音がしたが、あえて気にせずに前だけを見ている俺に、後ろから声がする。

「悠樹？どうした？」

少し早足で近づいてくる祐司。後ろからお供するようについてくる感覚が、凄く何かの皇子様気分だったが、雰囲気は雰囲気だからどうもいえない。

あえて振り向かず、まっすぐ前を見据えてゆっくりとした足取りは変えない。

「悠樹！！」

肩をグイッと引つ張られて、無理矢理向かい合わされる。さっきもこんなことをされたような予感もする。

「どうしたんだ？」

「えっ……と……散歩。どんなのあるか知りたいし」

「そう……か？一緒に行こう。なにかあつたら危ない」

そう言つて手を握つてくる。

バシッ！！

反射的思いつきり手を離して、二・三步下がった。掴まれていた手を逆の手で掴み、胸元に持つていく。

自分で震えているのがわかった。けれど、視線の向こう側で祐司が驚いた目をしているのも解つてしまふ。何か自分がいけないことをしてしまったかのような、何かの罪悪感が身体のどこからか出てくる。

「あの……ごめんなさい……えっと……多分大丈夫だから……一人で行つて良い？」

「でもなにかあつたら」

「どうしたの？」

他の人たちも、ゾロゾロその扉から出てきた。どちらかというと、扉に近いのは俺のほうで、反射的に一步步後ろに下がつて行つた。このまま行つたら降りてきた階段にぶつかる。といっても、距離はまだまだあるのだが、再びあの階段を登る気にはならない。出来ればこのまま前進させて欲しいのだが。

「悠樹が散歩っていうか探検かな？したいって言ったから何かあったらあれだからって一緒に行こうと思ったんだけど」

少し残念そうに言う祐司に、へえと他の人たちは疎らに納得するような声を出した後、視線がこっちに向いてくる。

逆に走り出しにくいし、目の前を歩くわけにも行かないし。

だんだんいろんな何かに対しての罪悪感が、胸の中からこみ上げてくる。

「だって……なんとなくこの建物内だったら安全になって……思ってた……」

出来るだけいいわけみたいなことをいつてみたりもするが、いろんな人に囲まれるように見下ろされている。

身長的に、皆して高い。

余り身長に変わりが無いのが結構恐ろしいくらいにむかついてくる。相手が高いと、こっちからは見上げるしか出来ないし、向こうは見下ろすしかないから。

こんな俺でもそんなに身長が低いということでもないのだが。

「でもいつ現れるかわかんないしね。一応いろんなところに監視カメラつけてるけど」

少し困ったように、メガネをかけてパソコンが友達のような人がため息混じりに言う。

カメラをつけていたって、あの大きな案内された部屋に一人で居ればそれなりに勝手に誘拐されても仕方がないような気がするのだが。それは俺だけなのだろうか。

「大丈夫……これでも走るのは得意だから（嘘だけど……）」

アハハハア〜と軽く笑って見せて嘘っぱちをつく。なんて言っ
たって俺は運動が大の苦手の分野に入ってもおかしくない。

祐司を撒くかのように走ったあの時だって、無意識に走っていた
し。結局つかまったけど。

「けど向こうも結構鍛えてると思うよ？」

「大丈夫です……そんなに長い間歩きませんからすぐに戻ってきます」

本当は休みたいからあの部屋に案内されたような気もするのだが、
ここでこんな煮物人数に会ってしまうと。

とりあえず今話している人の名前くらいでもわかっておきたい気
もする。

——あの人だれ？

『真治さんだよ』

——真治ね……

結局この人たち全員を覚えられる脳みそは無いことくらい、俺自身
わかっている。

「ん……ヤッパリ長い間じゃなくても祐司ついていたら？も
しあれだったら俺もついてくけど人数多いのもいやだろうし」

なんて仕切るように真治が言う。

どうしてそこまで心配性なのだろうか。確かに狙われてるから年がら年中ピツタリついている人一人くらい居てもおかしくは無いだろうけど、あんなにも部屋で一人にされていたら、この建物の中はどこも安全なのだろうと勝手に勘違いしてしまうではないか。

「ちゃんとスイッチは渡したんだよね？」

「……………あつー!!」

思い出した。さっき忘れていたような気がしたのは、スイッチだ。ベッドの上に放り投げたまま、そのままにしてあるから、すっかり忘れていた。

結局一番自分が見に危険を覚えていないだけだった。

なんだか凄く周りの人たちに罪悪感があつたのは、これだったのだろうか。少し違う気もするが、結局は罪悪感を覚えてしまうのだろう。

「なんか忘れてると思ったたらベッドに放り投げたままだった……
ありがと真治さん」

踵を返して、さっさと階段の方に走っていくと、思いっきり誰かに抱きとめられた。後ろから。

力的に祐司ではないことは確実だった。

今口がポロリと真治さんと言ってしまったから真治さんかとおもったけど、距離的にこんなにすぐにつかまえることができないとおもう。

「どうして真治の名前がわかったんだ。一応自己紹介はまだなはずだが？」

上を見上げたら、その抱きしめてきているやつの顔が見える。
ちやらちやらしていて、そこらへんの女をナンパしているような
男。ネックレスやら、ピアスやら、指輪やらがたくさんついている。
少し背中に鳥肌が立ったのか、冷たい冷気が通ったような。

『勝治さんだよ』

——なんでみんな「ジ」ってのがつくんだ？名前に……

『さあ？……そこまでは知らないけど……』

「ごめん……なさい??」

これは謝るべきの物なのか不安になってくるが、おなかの部分を
回っている勝治の腕の力は全く持って緩む予感はいなかった。

「言うんだ!!どうして名前を知っているんだ!祐司の時だって
そうだったらしいじゃないか」

かなり怒鳴りつけてくるその声は、凄く耳元過ぎて、頭にキーン
ときてしまう。周りの人求めてくれればいいのに、確かにというよ
うに納得するのか、不思議と思っているのか、腕を組んでじっと睨
みつけてくるし。

こんなにもピリピリされると、逆に言うのもいいにくい。
っていうか、絶対に言っても信じてくれないし、信じてくれなく
てもいいからとりあえず離してくれ。

離したら逃げるだろう？

といわれたら、うんと大きく縦に首を振ってあげるから。

「ううゝ……言いたくない……っていうか吐く……苦しいよ勝治

さん？」

——もうここまでできたら自棄だ自棄！！

『悠樹。その思考楽しいわ』

とかいいながらクスクス笑っている悠汰の方をぎろりと睨み付けたいのは山々なのだが、その方向には違う人がいるから、絶対に変な目で見られる。

ピタリと勝治の手も止まり、かなり驚いているような瞳で見つめられる。

——っというか助けてよー悠汰……

このしんみりとした空気をやっていけなくなり、軽くため息をつきながら、上げていた頭を、前に向かせて疲れた首を掴んで擦る。軽く凝ったように肩が少し重い。

『どうやってたすけようか？』

本当に困っているような瞳で見つめてくる悠汰に、少しだけ同情した。

確かにもしこれが逆の立場ならば、俺だってどうしようもない。

ゆっくりと力がゆるんでいく勝治の腕から、するりと身体を柔らかく使って抜け出した。何歩か先を歩いてゆっくりと振り向く。

ピリピリしたちよつと痛目の空気に、動かして止めた足が、本当に凍り付いてしまいそうなくらい冷たい瞳で見られている。

本当は守られるべき人間では無い気がしてきた俺は、ゆっくりと向き直って階段を上っていく。

きつとさっきのかたまりの人たちは、ヘナヘナと座り込むか、何かを話し合っているか。ほかの事は考えられない。

本当に見えないところまで行くと、少し早足になっていた足を止めて、ホツと息をついた。

後ろから悠汰もゆつくりとついてきていた。少し心配そうな瞳で俺を見つめていた。少し悠汰には悪いことをしてしまったかな？という心配も出てきてしまう。

「ごめんな悠汰……」

『え？俺？』

「うん……なんか……悪かったかな？つて……つていうか別に俺にばつかりいなくてもいいぞ？祐司さんたちと一緒にいてもいいし」

『……じゃあちよつと行ってくるね。何話してたか後で教えるよ』

苦笑しながらゆつくりと踵を返していく。

これで本当に一人になった。薄暗い中、たった一人残された。どこに向かうかなんて思いつかない。とりあえずここ以外の階段を探すしかなかった。

一応それが本当の目的だから、余り変わったことがおきたわけでもない。

探検

小さい頃。本当に小さい頃は、探検するのが嫌いだった。

新しいことをして失敗して。それで笑われるのが怖かったから。

基本的に怖がりだったかもしれない。いつも周りに笑われているよ

うな気がして、隅っこの方でみんなの行動についていくのが精一杯で。

目立つのが怖くて。

遠足の時だって、群れから外れないように、先生と一緒にいたり、友達の後ろについていたり。絶対に一人ってことはなかったけど、精神的には一人だった。

特定の友達だって出来なかったし、一緒に手を繋いでくれた覚えもない。

それでしたのだろうか。少しだけ握手をされたり手をつながれたりするのが少し怖くて。だから出来るだけ人と一定の距離を測ってた。

けど、高校にきたらなんだかそんなのどうでもよくて、みんなの意見に賛成していて、それでもヤツパリ特定の友達はいなかった。友達はいたのに。

小さい頃から確かに友達の1人や2人はいたのに、結局最後まで一緒にいたりとかは無い。かもしれない。

いまだって、結局行けば？って言っただけで悠汰は行った。

自分から言い出したことなのに、少し悲しくて、本当に独りぼっちになってしまった。

目の前は薄暗くて、どこまで続いているのか解らない廊下。

壁に沿って歩いているのも、きつと昔からの癖になるのだろうか。誰も居ないから今は「誰か」を作ることになっているのかもしれない。それが壁。壁があればなんだかどこかにはつながっているような予感がするから。

外見だけの友達たちに今の状況を伝えたら「気持ち悪い」とか「変なの」とかで、逆に笑いものになっていそうだ。

結局こっちが主導権を握れるわけではない。

何でこんなにも自分は何かに弱いのだろうかという不安はある。あるのになにか強くなれない自分が悔しい。

1人だから余計に。
それが普通だから。

だから今まで部屋にいたにしても1人だった。逆にそれが安心していたし、なんか解らないけど人居たくないって思う空間だった。

こういうとき。

昔の俺だったら、今すぐにも人に会いたいつて思うのに、今の俺は全く持って会いたいだなんて思わない。寧ろ、今は1人しておいてくれ。という感じかもしれない。

あれかもしれない。

信じて良いのかいけないのかわかんない人だから、逆に一緒に居たくないのかも知れない。

家は自分が大体知っているから1人でいても問題はなかったし、学校の遠足とかだつて、先生が決めていくところだから、先生に付いていったほうが信用できるとか。そんなことを考えていたからこそ、何も疑わずに人と一緒にいたのだろう。

なのにどうして今は、こんなにも人を信じようなんてしていないのだろうか。

時間が経つにつれて、どんどん絶対信じてはいけないだなんて思ってしまう。

そんなにも悪い人に見えないし、ああやって捕まえた時に心臓を狙っていてもおかしくは無いのに。

冷静になれば、全然良い人につながっているのに、どうしてここまであの人たちを疑っているのか、自分のことなのに、他人の事のように全く理解が出来ない。

心のどこかで、人を信じてはいけませんと何か説教をされているように……。

居るはずのない者

時間帯的には、もうそろそろ睡眠時間だ。いや。もう絶対に次の日になっていることは確実なのに、全く持って睡魔が襲ってこない。頭が辛いだの、瞼が重いだの。いつもは文句垂れながらベッドの中に入っているのに、今は昼間のように、目がパッチリしていて、何をどうしても寝れないような感じだ。

今歩いている場所に、窓がないからどのくらい暗くなっていて、どのくらいの位置にあるのかとか。太陽が昇っていてもきつと時間帯が狂っているような予感がする。

しかも。

悔しいことに、今いる場所が解らない。

迷子

という事になるのだろうか。

けど、全く持って焦りというものが感じられない。

逆に迷っていて何かが落ち着いているかのように、自分を何かで納得させている。

「ここどこだ?」

暗いから余計に解らない。少しでももっと明るくしてくれればいいのに。

自分の部屋は、一応じっくり目に焼き付けたから、扉を見ただけでこれかな??というものはあるのに。

こんなときに後ろから狙われたりしたら、もちろんん普通でも抵抗も何も出来るわけがない。

適当に曲がつたりしている所為か、近づいていると勘付いていても、全く持ってそんな気がしない。

——やべっどうしよう……

てきとうに来た道を戻るにも、来た道がわからない。どこでどうやって曲がつたのかも、どこをどう行けば階段なのかも、全く持ってわからない。

今覚えている道のりは、あの広間みたいに広いところから出入り口らしき場所くらい。階段から自分の部屋すらも覚えていない。

基本的に覚えるのは苦手だったのに。

グウウウウ……

鳴った先はおなか。

ゆっくりとそのおなかを擦りながら壁に寄りかかり、ズリズリと座り込んでいく。

——こう考えてみたら俺……晩飯食ってない……

「腹減ったよー……」

というか、出来ればここで睡魔が着てくれたほうが心的に嬉しかった。

ボタンキューと倒れてしまえば、異変に気付いて誰かが迎えに来てくれそうな予感がしたから。けれど、違う予感ならしてしまいたいま、かなり鳥肌が身体を覆う。

顔色は悪くなり、それにより血の気がザーツと下がっていったような気がする。いや。だから顔色が悪くなったんだろが、今は微妙にそんなことを考えていられる余裕が無い。

今回は薄暗い光の中。

凄く古い病院だと思ってみれば、そう思えないこともないかもしれない。いや。運よく古病院に似ているのは廊下だけでよかったとも思ふべきところかもしれないが。

薄暗い

古い病院

イコール幽霊

一瞬それを考えてしまったからこそ、かなりの血の気が退いてしまった。なんて言っただって、出ないとは言いい切れない空気だから。

何で今までそれに気付かなかったのだろうか。

それなりに今まで部屋で独りホラー映画は見たものの、靈感は無いし、映画は少なからずとも映画。本当にあつた話だけは避けて借りていたから、現実と照らし合わせたことは無いが、こんなにも安定しない場所でそれを思い出してしまった今、確かに現実でもありえるかもなんて思ってしまう。

いつだったかに、自分では死んだとは自覚していない幽霊が、病院をさ迷い続けて幽霊に会ってしまうという話を見た。

そのとき、薄暗い病院で一人歩いていたとき、その幽霊が急に後ろから不気味な助成の声がしたとき。

「なにをやっているの？」

凄く透き通った声が聞こえてきたが、映画では、もうチョツと不気味で、凄くガラガラが入っていて、おばあちゃんのような声だった。それで振り向いてみたら、かなり顔色が白くてガリガリのおばさんだったような気がする。

けれど、今の声は凄くリアルティーがあつた。

何だったのだろうか、ゆっくりと怖い廊下を見回そうと思った

とき、ふと電気が見えた。懐中電灯のようなもので薄くこつちを当てていた。

今考えていたことが考えていた事過ぎて、顔を見ることが出来ない。というか、かなり冷や汗が身体の所々にあるのが自分でもわかった。

しかも手も冷たくなってしまい、身体が震えている。

ゆっくりと顔を上げると、ショートヘアーの綺麗な女の人だった。ホツと大きくため息をついて、力の入っていた肩の力を、スツと抜いて脱力した。

「えっ？どうしたの？！悠樹君……だよね？」

そういつて、その女の人は急いで近づいてくる。ソツと俺の肩を掴んで、顔を見上げさせようとするが、再び顔を上げる力はなかった。

「えっ……あつ迷った……しおなかすいた……」

「そっか。おいで部屋まで連れて行ってあげるよ」

そう言つてゆっくりと手を差し伸べてくれる。その手をつかもうかどうか。

もしこれで死の世界に連れて行かれたりなんかしちゃったりしちやったら……と考えると、だんだん目の前が真っ暗に覆われてくる。座っているのにどうしたんだろうか。
凄く。

柔らかい。

何か柔らかいものの上になっところがつている。少しバウンドが効いていて、だんだん眠気に襲っていくような何かがあった。

やっと睡魔が着てくれたかと思ったとき、何か違うものを気付いてしまった。何かいけないもの。

多分ここは自室。だと思っうのだが。

——俺……どうやってここまで来たっけ？

ふと思ったその疑問に、俺はゆっくりと瞼を開ける。

周りは少し薄暗いつてだけで、あの廊下よりは全然明るかった。

それに気付いてゆっくりと睡魔に襲われかけている瞼をこすりながら体を腕で起こした。

見回しただけでここはあの自室だってことは理解できた。その中に、ドンとベッドがあつて、その上にチョコンと座っている。

最後に会った人はあの女の人だが、ここで初めて女の人を見たような気がする。それに、少し細めだったし、よく考えてみれば、ここまで運んできたのだろうか。それもそれで凄いななんて思いながら、ゆっくりと最初に渡されたあのスイッチを探した。

ベッドの隣にあるベッドと同じくらいの高さの棚に、小さな電気がある。そのスイッチのしたあたりに、あのお助けスイッチがあつた。ゆっくりとそれを握る。

それとともに、再び大きな雷のような音が、お腹のところから鳴り響いていった。

「おなか減った……」

少し目も覚めたし、もう一度下に降りようかと、絨毯の上にある靴を履いてそのスイッチをきちんとポケットに入れて、ドアまで近づいていこうとしたとき、再びいやな予感がする。

——もしあの女の人がおばけだったら……？

画面を通してみる分ならそんなにも怖くは無いのだが、直で見ってしまったかと思ったとき、再び大きなめまいが起きそうな予感がした。が、一度見てしまったものは仕方がない。それに、その女の人（出来るだけ人と考える）が助けてくれたおかげで、部屋に戻れた。出来るだけそうプラス思考でいくと、なんだか女の人の件はどうでもよくなってきた。

われに戻ってドアノブを回し、再びあの階段まで向かった。

ゆっくりと階段を降りていくと、リビングのような部屋のところからは、もうすでに電気は付いていなかった。

少し不安になって早足で近寄り、中を覗いてみると、騒ぎ疲れたかのようにぐったりとソファに身体を任せている人たちや、きちんと椅子に座って腕を組み、眠っているものもいた。　　どうしてここで寝ているんだなんて考えながらも、起こしてはいけないと、手をかけたドアノブから手を離れた。

その場から離れ要とした時、中のほうからゆっくりと悠汰が顔を出してきた。

『いたあどこにいたんだよぉく探したぞー』

——ごめん。っていうか話した？

『話し？できるわけないだろぉく』

なんてプウツと膨れてしまった。

——どうしたの？この人たちはぐったりしてるけど

『一応ここで寝起きして、見張りの人と交代できるようにって、それだったらここがいいんだってさ。というか、単に階段上るのめんどいんだってさー』

——全員寝てたら意味無いじゃん

『それがまた仮眠のように眠りが浅いんだよ？少し物音鳴らしただけでピクツと起きちゃうもん』

なんて、少し残念そうにしていた。

確かにそれだったら、何かあった時にすぐに反応は出来るものの、監視カメラを見ている人とかはいるのだろうか。

いや。交替っていつていたし、見張りとか言っていたからそれなりに何かいるのだろうか。もしかしたら玄関のところにだれか居たりするのかもしれない。

——おなか減った……

『あつ帰ってきてからなんも食べてないもんね……今丁度三時く

らいだしもうすぐで朝だから皆おきると思うけど……もしあれだったらもってこようか？それとも自分で持ってくる？』

——悠汰…… お前が持ってきたところを誰かに見られたら100%幽霊の仕業になるぞ？

『たしかにー』

なんてケラケラ笑っていたが、これでおきないから本当にこいつの声は聞こえていないのだろう。

ゆっくりと踵を返そうとしたが、一応と思い、ゆっくりと最初に連れて行かれたあの硬いベッドがある場所に行こうと思い、ゆっくりと足を動かした。

『どこいくの？』

——あの最初行った部屋

『場所わかる？』

——多分探検プラスで行くよ

少し嬉しかった。

今までずっと独りだったとき、悠汰がきて。最初は少しうざかったけど、逆に居なくなったら居なくなっただ、独りという事を思い知らされる。

だから今はホッと安心していて、なんだか「悠汰」という存在が欠かせないものになりそうな予感がした。

——なあ、お前ショートヘアの女の人知らない？

『女？なんで？』

——さつき迷った時に女の人が出て……それで部屋に連れて行ってもらったんだよね

『……』

今まで困っていた事を聞くと、青ざめた顔で悠汰は俺を見つめてきた。足元待っていた。何かと振り向いてみる。

——悠汰？

『ここ……珍しく女の人生まれなかったんだよ……だから女の人はいるはずが無い』

「えっ……」

だんだんつられてきたわけでは無いのに血の気が退いていくかのよう、だんだん目の前がぐらついてくる。

人ではないのならば幽霊だろうか。確かに触れた。肩だけかもしれないけど、確かに掴まれたから幽霊では無いような気もしないことは無いのに、この薄暗さがきてか、だんだんいやな方向へ進んでいった。

——ここの人たちって兄弟みたいだけどさ？母親とかって……

『いないよ。末っ子が産まれてから死んだから』

じゃあ母親の生霊？生霊じゃなくても、霊かもしれないという心

がある。

『んゝ幽霊……？もしくは誰かが侵入したのかな……？俺のときはいろいろあったからかなり嚴重に周りにボディーガードみたいに一緒に居てくれたからなあ』

——幽霊………だったらやだなあゝ

『こわい？』

——画面越しじゃないから怖いかもしれない……

ふらつく足を止めるように、ゆっくりと壁に手をつけて身体を支える。

だって。怖いものは怖いじゃないか。

『そうだ。ひとついいことおしえてあげる。さっきの寝てるって言ったけどなんか作戦ある見たいよ？悠樹の力が知りたいからここにきてなんかしていくかどうかって』

——そういうこと早く言えよなに？どっかでみてるの？それ

『監視室中央部でみる』

——場所教えて

『いくの？』

——うん

怖いからと話を变えてくれたのか、そう言つて俺の前を悠汰が歩き出した。

別にそれが嘘でも別にいい。探検にもなるし、それなりにたのすうだ。適当にその道を覚えるが、別に帰り迷つたとしても悠汰がいる指導にでもなるとも考えていたから、適当に周りを見回す程度で歩き回つた。

なんだか本当にお姫様が居たかのように、壁には所々絵画があつた。暗くてよく見えはしなかったのだが、それなりに綺麗だった。

なのはどうしてこんなにも廊下を暗くしているのかがいまだに理解が出来なかった。何か作戦としてあるのか、それ以上の何かがあるのか。それも悠汰に聞いたかつたが、後に解つてくるだろう。とおもい、聞かずにいる。

あれから暫く適当な話をしながら悠汰とてくてく歩いているが、ヤツパリ足音は俺しかない。

二階に上る階段から絨毯だから、一階には絨毯が敷かれて居ない。

『この扉だよ』

——んじゃ失礼しまあす

ノックをしないでゆっくりドアノブに触れようとした時、勢いよくその扉は開かれた。中は結構明るいのだが、すぐ目の前に人が立

ち、影が出来てそう明るくも無いような気がしてくる。

見下ろしてきているのは、先ほどの勝治さんだった。かなりの勢いで睨みつけられるその目つきは、化物を見るような瞳だった。

ヤッパリ来る時のも見えていたのだろうか。

ならば、話している時に止まった振り向いたあれも見られていたとしたら、かなり怪しい。しかも反射的に「え？」なんていつてしまったし、急に顔色悪くした事で、悠汰の存在を知らないやつは「七面相を独りで楽しんでいる」という事になってしまう。べつに7面相でも6でもいいのだが。

「どうしてここが？」

開けた扉に寄りかかるように身体を任せている勝治は、ヤッパリ見下ろしている。化物を見ているような瞳では無いが、凄く怒っているのか眉間にシワがひどかった。

ナンパしていそうな面だから余計に怖かったりもする。けれど、よくよく考えればこれが真治じゃなくてよかったとも思う。あの瞳は本当に怖い。ぱっと見は余り怖くないのだが、あの手の奴に睨みつけられるのはいやかもしれない。

変わりに勝治は、路地裏にでも引っ張り込ませて思いっきりカツアゲしそうだ。

「探検していました」

「ほんとうか？」

確かに本当ではあるが、道案内の悠汰がいますから。なんていえないだろう。

少し目線をずらして中のほうを見ると、かなりモニターの数がある。そしてくるくる回る椅子に座っているのは、2人ほど。しかも

運が悪かったのか、祐司と真治がいた。どうして名前を知っている人だけなのだろうか。それとも何かを狙った？

ここで一応聞いて見る価値はあるかもしれない。けれど、聞いてまたへんな問題になったら考えると、少しばかり億劫になる。

「探検してたのは本当……」

けど、言わなくても監視カメラで見られているんだったら解っているはずなのに、どうして何も疑問に思わないんだろうか。確かにあの時にも赤く光る監視カメラがあった。なのに。なのにどうして気付かないのだろうか。

もし本当に幽霊だとして、運んだら運んだで「浮いてる」とかそういう反応してくれてもいいのに。それとも取り付かれていたのだろうか。それだったら少しばかり納得はするものの、それまでに適当に話したような気がするのに。声は入っていないのだろうか。なんだか逆に怖くなってきた。

——ホラー映画なんて見るもんじゃねえな……

『なに？ホラー映画で似たようなこと起きちゃったの？』

「違うんだけどサー……」

うつむいて手をオデコに当てながら、ほとんど口の中で言っただけのような言葉を、もごもと言った。それを聞き取られたような雰囲気は無い。

——俺……霊感ないよね？

『俺は無いから多分無いと思うけど……』

「じゃあどうしてここがわかったんだ？」

急に話を戻されて、何の話だったかと一瞬頭をゴチャゴチャにされた気分だ。

「えつと……学校から帰ってきてから何一つ食べてないからお腹空いたなあ……っておもって」

「はあ……ならどうして中に入って誰かを起こさなかった？」

ため息混じりに言われた。

多分疲れているのだろう。なんて言っただって寝ている様子なんて無い。疲れさせているのは自分なのかと考えると、確かにそう思わなくもないのだが、それだったら俺を預け入れさせなければいいのにとか、監禁状態にさせればいいのにとか。

いろいろと方法を思いつくものの、どれもいい方法ではないものばかりだ。

「……皆疲れてるみたいだから起こすのも悪いかな？……」

「だけどこここまで来た理由にはならないな。やたらここの事に詳しいみたいだが？名前を知っていたり」

——それは協力者が居るから……俺ヤツパリ大人しく部屋に居た方がよかったのかな？

『けどお腹減ったなら仕方なくない？』

——だよなー？

「部屋。戻ります」

そう言つて踵を返そうとした時、力強く腕をつかまれて、なぜか中に連行されてしまふ。ズリズリと引きずるように。

「えっ？なに？」

「こつちに食べ物がある」

怒り調子の口調に、どうやって礼を言おうか迷うではないか。

開いている勝治の椅子だろう椅子に乱暴に座らされ、勝治は奥のほうに行き、何かを物色するかのように、ビニール袋を擦る音が聞こえる。

「悪いな乱暴で。根はいい奴だから許してやれ」

何を責める事もなく、クスクス笑いながら祐司が隣でいつていた。別にまだそんなにも乱暴では無いから許すも何もない。乱暴な人は本当に乱暴だから。

「こんなに暗くてどこに誰が居るとか本当にわかるの？それにここがどこだかつて言うのわかるの？」

ジッと黙っているのも何かいやで、大きなモニターに囲まれているのをいいことに、適当に質問を投げつけてみた。

「ここに何年も居ればわかるよ」

「迷子とか迷ったりとかしないの？」

「小さい頃はよく迷ってた」

「っていうか、普通の家とかないの？小さい頃からずっとここ？逃げ出そうとか思わなかったの？」

「役目を知っていたから」

「役目？」

フツと言った祐司のことばに、何か引つかる。

「お前を守るってこと。ちゃんと身体も鍛えてたし」

「えっ……小さい頃ってなんか年齢差あつて祐司さんの小さい頃には俺まだ生まれてないような気がしてきた」

「うん。けど生まれてくることは解ってたから」

「どうして？」

「さあね？なんかいやなことが起きるっていうオヤジが凄く警戒してたみたいだぞ？オヤジの勘は外れたことが無い」

「……」

全くもって質問の答えになつて居ないような気がする。
じゃあ心臓を狙ってるってやつらの事までわかつていたのだろうか。

「ほらっこれ喰え」

勝治がイラつきモードでそういいながら渡してきたのは、パンだった。食パンではない食べやすく柔らかいもの。あまりパンとかに興味が無いから種類とかは全くもってわからない。

袋から取り出してパクツと口に含む。

凄く弾力のあるそのパンは、ゆっくりと破けて口の中に入っていく。噛む感覚も凄く柔らかくて何か落ち着く。

喉をするり通って、量の割りに結構お腹に来る。これだったら一個丸まるではなく半分で十分だ。甘いし、それなりに味が濃い。

「で？どうして名前を知っている？」

「ここって女の人は居ないの？」

聞かれたことには答えずに、逆に質問をする。それにすこしぴきりと来たのが解る。眉間のしわが増えたから。勝治の。
クスクス笑う悠汰。

——悠汰はお腹減らないのか？

『うん大丈夫！減るような気もしないし』

——そっか。

「残念ながらむさ苦しい男どもだけだよ」

捨てつけるような怒鳴り口調の勝治。落ち着けと隣で祐司が押さえつけようとしているが、勝治の怒りだけは全くもって収まるような予感はない。

勝治から目線をこっちに持つてくる祐司。

「どうして女の話しに？」

「いつ……いやあゝべつに。男ばかりなのかなあゝって思つて」

目線を外してパンを口に銜える。

「口説こうとしたのか？ バカじゃねえの？ まだ1回しかなかったから自覚無いのか！ お前は狙われているんだ」

——じゃあ何で女の人が……？

勝治のいかれ口調は全く持つて耳にいれずに、考え込む。

『ヤッパリ聞いてみたほうがいいよ』

心配そうに言う悠汰。だが、ここでいっても確かにあそこにカメラはあった。確かにこんなにいっぱいモニターがあれば、一瞬くらいだったらわかんないかもしれないけど、確かに俺は女の人にあつた。

髪は少し暗くても茶だつてことはわかつた。茶色で綺麗に揃つたショート。身長はそれなりにあつて、モデルのように細かつた。動きやすそうな7分のズボン。裾がきゅっと締めることが出来る紐のやつだ。

——ん……いや。それなりに疲れてたから見間違ひかもしれないしきつかけがあつたらそういえばーってしらばつくれた顔で言つて見る。皆疲れてるみたいだし

けれど、確かに1回しかあっていない。だからこそ危ないって言う自覚が無い。なんて言ったってボディガードみたいにしつこく一緒にいる人だって居ないし、そんなに心配しているような顔つきじゃないのも確か。だけど、このモニター室とあの部屋を見てしまった以上、皆も結構がんばってくれているという事だけはハッキリしている。

そんなことをいったら、ただの同情になってしまいかもしれないけど、同情になっても仕方がないような気がする。だって。凄く他人事のような気がするから。

自覚が無いんじゃないって、自覚するようなことになっていないからだ。

——そういえばこのカメラって悠汰うつるかな？

『えっ？わかんない。ならちょっとすぐそのカメラに写ってこようか？』

——うん頼む

『OK』

そういうと、扉をすり抜けて廊下のほうへ言った。

『あつた。多分普通だったら写るようにピースしてるから探してみてー』

——わかった……

「ねえこのカメラって番号とかないの？ここのカメラは1とか2とか3とか」

「ある。カメラの下に番号が書いてあって、向こうのカメラから下にだんだん1〜だよ」

そういつて、ドアに近い方で、今向いている壁のモニターを指した。そっちから1。ということは、カメラについているのなら数えていけば良いのだろうか。

——悠汰。そのカメラ何番って書いてある？

『ええつと……23』

「番号言ったらすぐにわかったりするの？」

「まあ、主な部屋はわかるけど」

「へえ〜……」

なら今23はどれ？と聞いても不思議とまたいろいろ言われるだけだ。俺は一つ一つ数えていくことにした。

どれもほとんど暗くて、カメラに写っている真ん中しか見えない。縦に一列八個カメラのモニターがある。

23は一番下。

——悠汰いまちゃんという？

『うん。ど真ん中でピースしてるけど』

——見えない……

『そつかあゝなら俺は見えてないんだなみんなに』

——ばいね

「これって音声とかは聞こえないんですか？」

「そこまで発達してないなあゝ」

少し不安そうに祐司が言った。

まあ、聞こえていないのならは適当に悠汰と話していても聞こえないのだろうか。けれど、どこでどうやって着いてくられているかまったくもってわからないということだ。
もし聞かれたら悠汰の事を1から説明しないといけない羽目になるのだろう。

「そつか。じゃあ部屋戻りますね」

「ついていくよ」

「大丈夫ですよ」

「けど迷ったら……」

「その時はそのときそこで寝てやる」

なんて笑いながらパンを袋に戻し、それを手にドアのところまで行った。

「じゃ失礼しました」

職員室から出ていくようなのでそう言ってやる。なんとなくそれがいっものような気がするのだ。余り職員室に行かなくても、なんとなくそんな気がする。ただそれだけ。

本当にずっとピースしている悠汰に行こうというと、ニッと微笑んで隣を歩いていった。本当に歩いている音すら聞こえない。なんだから浮いているかのように。

道案内をされながらも、俺はあの大きな部屋でたった一人になった。

このまま寝るのもなんだかいやだった。だから適当にクローゼットを開いて、寝やすい格好のものを探して着替え、さつさと布団の中に戻って行き、渡されていたスイッチをベッドライトのところに立てておいておいた。

皆みたいに上手く薄い眠りに入ることなんて出来ないから、ぐっすり眠ってやるつもりだ。

パンはベッドライトの台の下にある何かを入れれる空間にソツとおいておいた。お腹が空いたら食べようと思うのだが、これからは何かきちんと朝昼晩ご飯をくれるような気がして別に必要がないような気もしないことは無いのだが。

ゆっくりと……ゆっくりと俺は眠りの中に入っていた。

居るはずの者

真っ暗な世界。

俺はその中にチヨコンと独り立っていた。

特に叫ぶ言葉が無いし、助けを呼べるほどの人が居なかったから、ただボーッと周りを見回していた。なんだかここに來た事があるような世界。

こんなところに來た事なんてまず無いのに、何の恐れもないし逃げたいという気持ちにもならない。助けを呼べるほどの人が居ないのではなく、助けを呼ぶ必要がないからなのかもしれない。

何でかは解らないけどホッと安心するような何かがあるし、周りを見回しても何も無いってことが、逆に嬉しかった。

なんでわかる

そうきかれたときに、困った自分の焦った心。凄く新鮮で、何かずっとそのままの気持ちでいたいとも思った。なんでかはわからないが、基本的に何の自覚もしないほうなのかもしれない。

確かに一度襲われかけている。だけど、あの時助けてくれたという安心感があつたのかもしれない。もう一度襲われたらなんとなく学習かもしれないけど、一度の経験だけじゃ解らない。

寧ろ一度目が怖いものなのかもしれないけど、怖すぎて何が起きているのが解らないのかもしれない。

今まで誘拐なんてなかったし、そんな雰囲気だつて無い。

特に親から離れたいと思ったこともないし、だからといって親に何も言わないで夜遅くに帰ったことは無い。

ここに來た事だつて親は知っているのだろうか？別に知っていても知らなくてもいい。そんな気持ちがあるから。あんまり心配性でもないのかもしれない。

逆に。

新鮮だから。

それだけなのかもしれない。

だからいま、ここに一人残されていても、何も危害を喰らっていないわけでは無いから安心していられる。

真っ暗でも襲われなければ何も怖くない。

襲われるかもなんて考えなければ、なんも怖くない。寧ろ落ち着く。

後ろ向きな考えばかりするから怖いことがおきるだけで、なんとなくそんな事もあるだろうな程度に考えておけば、何かあった気に適当に反応したり、それなりに対処できたりする。

怖がつてばかりいたら、いざとそうなってしまった時に逆に対処できない。

だからといって全くもって怖がらないのはダメかもしれない。逆にいざという事がおきないと、次このようなことが起きたら、次が怖くなるから。

出来るだけプラス思考で行く。それが俺だったのかもしれない。

昔の俺は、もう少し後ろ向きだったような気もしないことは無いのだが。

真っ暗な世界が、いきなり真っ白になった。

そんな事全くもって考えて居なかったから、かなり焦って周りを見回そうと目をきちんと見開いたとき。

ハッと現実に戻った。

目の前にはカーテンがある。あの少し太くて重そうなカーテンがこのベッドを囲っている。別に使っているわけでは無いから、上のほうを膨らませながら真ん中より少し下のほうで、太い布で一つに括られていた。

周りは明るくて、窓の奥から入ってくる光が凄く新鮮で、はじめてみたといつていいほどの光に感じてくる。

「覚めたか？」

「えっ」

声をしたほうはクローゼットの方だった。
そこには勝治がいた。

椅子を用意してきたのか、椅子に座って足を組み腕をも組んでいる様子を、かなり驚いた瞳で見ていると、大きなため息を吐かれる。

「いつから……？」

「お前が部屋に戻ってきてから。ずっと後ろついてたし」

「なん……で？」

「一応ここは広いからないざという時にお前を探すので精一杯になりそうだからな」

何で怒っているのだろうか。そんなにも何か怒らせるようなことをした覚えは、今のところなくもない。けれど、あるだろうといわれてしまえば、確かにあるかもとおもう。

基本的にキレキヤラに見えるせいで、それが普通に見えてしまうのはいけないことにも感じるのだが、そう見せている勝治が悪い。

かも。

祐司さんがよかったな。けど、そんな事を言っただけでわがままに付き合わせることもダメだって事はわかってるのだが、ヤツパリいろいろと怒られるくらいだったならやさしい人がいい。

——ゆーた？

そういえば先ほどから悠汰の姿を見かけない。逆にそっちに胸騒ぎを覚えてしまう。ベッドから足をたらし、靴を履いてゆつくりと床を踏む。

ふわふわとした絨毯を踏むのは、まだ少しばかり抵抗がある。

しゃがみこんで、ベッドの下もちゃんと探してみる。勝治がいると「悠汰ー」と小さい声でも出せないのが、結構悲しいものがある。

「何か探しているのか？」

ゆつくりと立ち上がり、俺の隣にソツとしゃがみこんだ。

「ちよつとね」

「それよりもこれをきちんともっている」

そう言っただけで頭に硬いもので叩きつけてくる。

「いたっ……」

スイッチは一応硬いから頭をバンバン叩かれるのはさすがに痛い。叩かれるそこを擦りながらプウッと頬を膨らませた。

ベッドの下には居ない。

ネコじゃないんだからいるはずがないような気もしないのだが、

なんだかまた一人にされたようで凄く心細かった。

スイッチを受け取り、適当にクローゼットを開けてみたりなんかはするものの、いる様子は無かった。いる気配も全くしない。

挙動不審だったのか、勝治はベッドに腰をかけて、じつとこつちを見据えていた。そんなに見られたらやりたいことも出来ないし、着替える事もできない。別にどこか出かけるわけではなさそうだからこのままの服でも良いのだが。適当にいじると、ゆっくりとそのクローゼットを閉める。

他にはどこにも入り込めそうなものはなかった。あるとしたら。まど。

身体を細めて、慎重に行けば出れそうな細さだ。身長的には丁度良い。いや。余裕があるくらいだ。普通に勝治や祐司も通れそうだが、横幅が無理だろう。

少し細い。風を通すくらいだから。運よく頑張れば出れそうな予感がする。

窓に手を触れてその窓を開けて、ジツと外を見た。

外は木に囲まれていて、これだったら木を上って移動すれば、門番が居たとしても簡単に出入りできそうな気がする。ここは二階だが、まだ上に階があるらしく、なんだか侵入も楽のように見える。ゆっくりと外に手を出そうとしたとき

「おい」

ビクツと肩が上がる。

後ろから思いっきり怒鳴りつけるように勝治の声がしたのだ。ゆっくりと首を後ろに向かせると、「怒鳴りつけるように」ではなく、怒鳴りつけたのだろう。再び眉間にシワが寄せてあった。

身体ごと勝治の方に向かせ、一歩退く。

「なっ……なに？」

「外には出るなよ？」

「出れるわけ無いだろこんな細いの！」

いや。見られていないところでは頑張りたいなとは思っていたが、悠汰が居ない時にへんなことをして戻れなくなったら面倒な事だ。簡単に言えばベランダに出たのはいいけど、仲に入れなくなったりとか。

いやな方向を考えるとしたら、ベランダに出た時にへんなやつに捕まって、身動きが出来ないまま再び変なところに連れて行かれるのだけは、避けたいかもしれない。悠汰が居れば、それなりにフォローしてくれるような感じもあるのだが。

一応という事でスイッチは受け取ったからどうにかなるような気もするのだが、こんなにも広いんだったら携帯電話の一つも持たせてくれればいいものを。

今は悠汰を先に探すべきなのだろうか。窓を開けっ放しにしたまま勝治の隣を走って通り抜け、ドアをさっさと開けて廊下に出た。なんだかもう壁を沿って行かなくてもいいような気がして、廊下のど真ん中を堂々と歩く。

朝だからか、何時かはわからないが、少しばかり廊下も窓から入っている日光によって照らされている。といっても、窓は本当に奥のほうにあつて、少ししか入っていないのは悲しいもの。

何かを探すように廊下を走りとおし、階段をさっさと降りていく。

——悠汰！！

とりあえず反応して欲しくて、俺はキョロキョロ見回しながら走

っていると、向こう側から祐司が歩いてきていた。

「どうした？そんなに焦って」

「えっ……あっ……いやなんでもないよ。ここ広いからのんびり歩いてたら全部まわれないような気がして」

アハハハア〜と頭を掻きながらそういうと、凄く不思議そうな顔をされる。何かへんなことを言ってしまっただろうかと少し不安になる。

頭に乗せていた手をゆっくりと戻し、俺も不思議な顔をしてやった。

「勝治は？」

「えっ？あつ。おいてきたっていうのかな？こういう場合……」

「全く。余り独りで歩き回らないでくれ。で？どっちに向かうつもりだ？」

「祐司さんが来るの？」

「だめか？」

「いいよべつに」

探検混じりに悠汰を探す事にすればいい。

小走りに走るのは少し疲れたからと、いつものペースであのリビングみたいな場所に向かった。

ゆっくりと戸を開けると、まだ皆して眠りの中に居た。

「暫くそつとしておいてやれ」

と祐司に言われてうんとゆつくり頷いたはいいけど、この中に悠汰が居ないことは無いのだ。いるといつてもいいくらいだ。

けれど、見回す限りは居ない。適当に呼びかけはしてみたが、何も反応が無かった。

祐司がいるからそう不安にならなくても良いのだろうが、なんだか悠汰が居ないと俺が俺でなくなりそうだった。

踵を返して廊下に戻った。そして、最初の部屋に行こうと昨日。いや時間帶的に今日かもしれないが、自分で言っていたのを思い出してゆつくりとそつちに足を運んだ。

一歩半くらい。ほぼ隣を祐司が歩いている。

コツコツつとした響が、凄く緊張の糸をくすぐってくる。いや。

くすぐるというか増長させているような気がする。

ここで女の人の話をするべきか、違う話をするべきか。靴の音だけを聞いているのは凄く冷や汗を増幅させる。

本当に何かを探検しているように。

覚えている道のりを着たのは良いが、どの扉だったのかをすっかり忘れてしまった。

「ここは？なに？」

一番に目のついた、扉に所々血痕なのか、サビなのか。どちらかというと血痕の方が色的に近い。ドアノブや、ドアの上のほうにある曇りガラスにも所々ついている。

内側から。というより、外側から何かを触った時に出来たかのような後。

「ここは……なんだっけ？」

「ヤッパリこんなにいっぱいあると覚えてないものなの？」

「まあな。いっぱい部屋ありすぎて使っていない部屋の方が多い」

祐司はため息混じりにそういいながら、ゆっくりと俺の前に立ち、ドアノブを先頭きつて開けた。すると、中は最初連れて行かれたあの硬いベッドがある部屋と、少し形が変わったかな??位で、そう大きく変わっているものはなかった。

あのベッドといい、小さいな棚といい。特にこれといった変わったものがあるわけでもないとおもい、ゆっくりと中に入っていた。ドアのところに立っていた祐司も、少し気になったのか、ゆっくりと中に入っていく。

ボタン!!

勢いよく後ろから音がした。ドアが力強く閉まるような音。急いで後ろを振り向くと、驚いている祐司と、その向こうには意味もなく閉められたような扉。

「閉めた……?」

恐る恐る祐司に聞いてみると、ゆっくりと首を横に振っていた。それとともに思考は固まった。何で勝手に扉が閉まるのだろうか。

あの時悠汰にやってもらったときは訳が違う。あの時は命令だったにしても、今はその当の悠汰が居ない。扉との間に祐司がいて不意に俺がやることは出来ないし、祐司もかなりびっくりしている様子。ということは、何者かがいきなり閉めたのだろうか。

けど、足音もなかったし、特に奥のほうから人が来ていることもなかった。後ろから人が来ていたら?とおもつと、確かにそれは

ありえないかもしれないが、その際足音はどうなるのだろうか。

祐司も結構神経質かのように、後ろを向いたりいろいろ警戒はしていたから、そう簡単には近づけないはずだ。

ソツと祐司の裾をつかんで背中に隠れるように、キョロキョロ見回しながら近づいた。

けれど、中に人が居る様子はなく、中に監視カメラがあるような予感はない。どうしてこういうところに監視カメラが無いんだと、結構疑問にはなる。

「何でここには監視カメラが無いの？」

「使う時に設置するから使わないときは設置していないんだ」

「……こんなところ入るんじゃないかった……早く出よ」

祐司の背中を押して扉に近づかせる。自分であのドアノブを回す勇気が無い。何事も無かったら回していたかもしれないけど、ここまで不可思議なことが起きてしまったらどうにも出来ない。

いざとなったらあのスイッチがポケットに入っている。

確認のために、入れたはずのポケットに手をつ込むが、確かに硬いものが入っている。けれど、何かの衝動で閉まってしまったのなら、開くはずだ。多分。

祐司の手がドアノブに触れ、時計回しに回したとき、途中でガチャッという音がする。この音はどこかで聞いたことがある。確か、カギが閉まっている時に、ドアを開けようとしたら、こうなってしまう。ということは理解していた。が、今それが起きてしまうことは全くもって考慮していなかった。

何度がバンバンとドアノブを回したまま、叩くようにしてみたが、全く開く様子は無い。

——悠汰!! 助けて悠汰!!

祐司から一・二歩下がり、周りを見回す。

——どうしてこういうときに限っていないんだ……

『悠樹!! どうしたの?』

向こうも俺を探していたかのように、悠汰が、ベッドのある頭く
らいのところの壁から、するりと心配そうに焦った感じに出てきた。

素直にそれに安堵^{あんど}し、ゆっくりとひざを曲げ、ヘタリと座り込ん
でしまった。

「悠樹? どうした? 具合が悪いか?」

「あつ……いやなんでも……ない」

祐司が俺の腕をつかみ、ゆっくりと立ち上がらせようとしている
が、安心しすぎて全く足に力が入らなかった。

祐司の腕を借りて、立ち上がろうとするが足に上手く力が入らな
かった。けど、少しふらつくが立てないことも無い。

——悠汰。なんかドアがいきなり閉まってかぎかけられたみたい
なんだ……外に誰か居る?

『ちよつと待ってて』

ドアをするりと抜けたとき、俺は変わりに扉に近づいて軽くドア
ノブを回してみた。なんとなく、さっきの恐れは無い。

ハアと大きくため息を吐いて、何かに気合をこめるように手に集中した。

『いないとおもっ。鍵開けるよ?』

——うん頼む

軽く頷いたと同時に、カチャツとカギが開く音がする。
ホッと息をはき、ゆっくりと扉を開けた。

「開いた……」

「……何をしたんだ?」

後ろでは驚いているような祐司。確かに今まで何をどうしても開かなかった扉が、何もしないでチャツカリ鍵まで開いたのだ。驚かないわけでもない。

薄くフツと微笑んで視線を外して廊下に出た。

精神的には、これは心霊現象としか考えられなさ過ぎて、怖かった。足が軽く震えて、これ以上先に進めないような気がして。

——悠汰。どこにいったの?探してたんだよ

『あの監視室中央部でボケーツとしてた。あそこ結構落ち着くんだよ?』

——……まあいいけどさ

「悠樹。どういうことだ?」

「わかんないよ。俺が聞きたいくらいだよ」

てきとうにそうやって言い訳したものの、閉まったわけまではわからない。閉まったものがわかれば適当に何かいえるのに。

「けどどうしてしまったのが不安なんだけど」

キツと睨みつけるように祐司を見ると、何か一步退いたような気がするが、特に気にしないで部屋に戻る道を戻った。

俺にだってわかんないんだ。閉まった理由も。俺がこんなことを出来る理由も。それが一つでも解決できればいいんだ。できれば。出来ればどうして心臓なんかを取りたいのか。

心臓がほしいんだったら他のやつのもいいはずなんだ。特に能力も無いこんな血の循環しか出来ない心臓なんて、ただのマイナスになるかもしれないし、他人にとってはただ邪魔なだけだ。けど自分にとってはとても大切で、これが無いと生きていけないものの一つだし。

なのにどうしてそんなにも他人のものがほしがるのか。本当に欲しいものなのか。そんなのもほしがっているのかどうか解らない。

「部屋に戻るね」

そう言って駆け出そうとしたとき、前のほうから人影が見え、一歩踏み出した足がピタリと固まった。前に出していた方に体重を乗せていたが、反射的に後ろに体重をかけた。

「祐司。客だ……悠樹。お前はこいつらと部屋に入ってる」

真剣な顔でいつてきたのは勝治だった。後ろには5人ほど真治とともに、いろんな顔した男の人が居た。急に俺を取り巻くかのよう

に周りにつき、真治に手を退かれてさつさと階段の方に連れて行かれた。

客だといっているが、どうして客が着たからと急にこんなにもガードが固くなる必要は無いような気がする。それとも客が客なのだろうか。

皆して昨日の楽しそうな顔が無い。真剣な瞳で、さつさと俺を部屋に連れて行くとする。

「あつちよっなんでそんなに急いでるの？」

「いいから。もしあれだったら姫様抱っこでもしてややろうか？」

意外にも、にやりと微笑んでいるのに、鋭い目つきをしてくる。

「いやだ……」

——客って誰だろう

『……土村家』

——敵がこっちにくるのか？！

『多分……隙を狙って悠樹をだとおもっ』

——だからこんなにも嚴重なの？

引つ張られながらも、こけるいきおいで階段を上りおえると、歩くスピードが上がっていく。

部屋の前に着くと、勢いよくあけて一番に入れて、他の人たちのも中に入ってくる。チャッカリ真治は鍵を閉め、中に入ってくる。

「誰が来てるの？」

「……土村家だ」

「心臓を狙っているって言う？」

「そうだ。だから暫くはこの部屋に居てくれ」

「危ないの？」

「あたりまえだ」

肩を押して回れ右を無理矢理してベッドに押し倒された。

「ギヤツなにすんだよ」

「大人しくしなさそうだから」

なんていいながらベッドに腰を下ろす。他の人たちは適当にそのベッドの周りを囲むように足っていたり座っていたりしている。

大人しくしなさそうだからじゃなくて、ただここが一番守りやすい位置だっただけではないのだろうか。素直じゃないんだか回りくどいのか、これが素なのか良くわからない真治。

パソコンと向っていきそうな顔だったから、ずっと監査室にいるのかと思ったが、これで何かあっても腕力とかは、信用出来そうも無い。

急に俺が黙ると、しんみりとした空気が広がります。

隣には悠汰が大きなあくびをしながら座っていた。

——眠いなら寝てていいよ？

『んっ……何かあつたら起こして』

ヤッパリ人間なのだ。

悠汰が眠くなる事は普通に考えていなかった。別に今は何をすることも無いから別にいいのだが、話す相手もやることも何も無い。静かな時間が長つたらしく続いていく。

音

ずっと静かになると思っていた。が、急に下のほうから銃声やらなんやらというんな音がいろいろと鳴り響く。何が起きているのかと、反射的に悠汰も体を起こし、周りを見回していた。

何が起きているのかと、靴をきちんとはき、立ち上がるうとする
と、真治が思いっきり肩を押して再びベッドに座らされる。皆して
立ち上がり、俺をベッドの中心に追いやる。

靴を脱いでいないから、清潔感としてベッドに足をやることは精神的に無理だ。

『様子見てこようか?』

——ダメ……ここに居て……

ゆっくりと俺は悠汰の手を触れる。

——怖い

この部屋のすぐそこで、いろんなところをぶつけるような音が鳴り響いているのだ。銃声はなくなつたものの、なんだかこの部屋の事を知り尽くしているように、確実に近づいてきていた。

ゆっくりではなく、まっすぐに歩くスピードと同じくらいに。
出来るだけ悠汰に近づいて、身体を小さくする。

バン!!

勢いよく扉が開いた。

その扉に居たのは、ショートヘアで、どこかで見たことのあるような人。にやりと微笑んだとき、誰かがわかった。

「あつ……あなた……」

「悠樹君お久し振り」

につこりと微笑む人。震える自分。

真治は驚いたような瞳で見つめていた。

コツコツというよりも、絨毯の上を歩く靴の音は、しんみりとしていてボソっという感じに近かった。

「悠樹！！逃げる！！」

ドアのところから急いで走ってきた勝治と祐司が、その女の人を止めるように銃を構えていた。けれど、俺の体は何かに凍りついたかのように固まってしまって、思考すらも動いていない。

この前にも会った人。

あの時は助けるかのように話をかけてきてくれて、確かに部屋につれてきてくれた。あの時本当は連れて行ったほうがこんなにも面倒なことにならなかっただろうに、どうしてあの時助けたのか。そんなことを考えていたはずなのに、なかなかあたまがまわらない。何かに取り付かれたかのように、身体がピタリと固まってしまった。

今自分がどのような表情をしているのか解らない。目の前に一緒に来ていた男の人たちが、ざあつと並ぶように立っている。真治はベッドの上をまたぐように後ろ側に行き、後ろから俺の腕をつかむ。

『悠樹立って！！逃げるよ』

悠汰も、必死に腕をつかんで動かそうとするが、ボーっとしているのか唖然としているのか、自分でもわからない。解らないからその女の人の瞳が怖い。

すべてを見据えて、解りつくしたような瞳。

勝ち誇ったような瞳。

「ねえ悠樹？久し振り。私のところに来ない？忘れたなんていないよね？こんなに寂れたようなところじゃなくて、もうチョッと裕福にして上げれるわよ？豪華な食事に。どうせ今日の朝ごはんだけって頂いてないでしょ？？ね？」

「悠樹逃げろ！！」

祐司が怒鳴り散らしている。逃げなきゃいけないのは頭ではきちんとわかってる。ただ。足が全く動かない。

「ちよつと待て。お前いつ悠樹に会ったって言うんだ！！」

勝治が思いつきり怒鳴る。それにフツと鼻で笑うように笑い飛ばし、女はスパッと昨日といった。

「昨日の夜。この子が迷っているところを助けてあげたのよ。本当はさっきなんか言われるかと思っただけ、知らなかったなんてね。悠樹……あなた偉いわね。言わなかったんだ」

えばる様に見下ろしてくるその女性に、俺は漸く足が動いた。ゆっくりと前に。

「悠樹！行っちゃダメだって」

思いつきり後ろから真治に抱き上げられる。一瞬にして、窓の方にまで下がつていく。

『悠樹？俺に命令して！！』

——え……

『いいからあの女一発殴るから「はあくいしばれ」とでもいって！！早く』

そういつて、さっさと女の目の前にまで立ちはだかるようにたた。

にやりと微笑み、ゆっくりと口を動かした。

「そのくそ女！！歯あ食い縛れ！！」

「悠樹??」

周りのやつらは何が行われるのかと、あつちを見たりこつちをみたりだ。悠汰はにっこり笑って思いつきり女の事を殴り飛ばした。急な事過ぎて回りはキョトンとしている。

どうせ外にもこいつらの手のものは居るだろう。けれど、ここに居るのはこの女だけ。にっこり笑って俺は真治の方を向きなおす。

「勝った」

ピースをして力の弱まっている真治の腕から開放されるように、さっさと祐司たちのほうに向かう。いや。祐司ではなくその転げた女の人から、5歩くらい下がったところから見下ろすように見つめる。

何がおきたのかわかっていないその女性は、殴られた頬に触れ、ゆっくりとこっちに視線をずらした。

本当はここで捕まえてやりたいのだろうが、頭が多少パニックっているのだろう。なんていったって、軽く遠隔操作みたいなことをしているのと同じことだろう。

「あなた今何をしたの!？」

かすれた声で、しゃべるのも痛そうな唇で、そう叫んできた。

何をしたかといえば、殴る以外、何もいえない。悠汰は何か勝ち誇ったように、エッヘンとして女性の目の前に立った。

「何したんだろうねえ」。心霊現象じゃない??」

につこりと微笑むように、俺も見下ろしてやった。

本当に何か勝てたような気がするが、これで終わりではないことくらいわかっている。なんて言っただって、その女性の腰の部分には、拳銃が装備されている。それにゆっくりと指をかけることくらい解っていた。

それに気づいた周りの男たちは、力強く倒れている女性を取り押さえるように肩を掴むやつと、手足を抑えるやつ。などで男の集団に囲まれていた。

軽がると縄なのか何かで掴まれている女性を見ると、何か嬉しくなってクスツと笑ってしまった。それよりも先に、悠汰が声を上げて笑い叫んでいた。きっとそれにつられたのだろう。だんだんクスクスと笑ってしまう。

女性を立たせると、さつさと後ろで腕をつかんだのか、そのまま連行して部屋を出て行った。それを見送る勝治と祐司。ゆっくりと近づいてきた真治。三人して俺たちのほうを向いていた。

本当にさっきのを心霊現象と思ってくれととても嬉しいのだが、

よく考えてみれば、これをどうやって説明しようかだ。それを考えただけで、笑いは吹き飛び、だんだんと血の気が退いていくような気がした。ソツとその手を祐司がつかむ。

「今の。何が起きたんだ」

真剣な瞳でもあり、何か前の誰かと同じ化物を見るような瞳。

なんだかもう、それになれた感じた。なんて言っただけで最初の印象が最初の印象で、名前を知っているなりドアが閉まったり。

なんだかもう全体的に全部が心霊現象に思えてきてもいいくらいなのに、今更本当のことを言うのもいいかもしれないけど、言わないのも面白そうだ。といっても、この理由を何か言わなきゃいけないことくらいは理解している。

何にしようと考えていると、なんだか三人して睨みつけてくる。

「えつとおゝ……………ええゝつと」

目線を外して、この作戦を考えた悠汰の方を見る。が、知らん振りをするように、悠汰まで目線をずらしてきた。

ずるいとおもったが、確かに賛成して言うことを言ったのは俺だし、ドアを開けるように命令したのも俺だ。最初の方は確かに俺だけど、今のは違う。

「だから心霊現象じゃないの? ……」

恐々とそう言ってみるが、呆れるというよりも、何かに怒ったような瞳をされる。ヤッパリ起こっているのだろうか。けれど、確かにあの女の人と言っていることは当たっている。

朝ごはん。貰ってない。

なんか拉致られたあとに、プチ監禁。その上チャッカリ餌を与え

られない犬みたいな状況だ。飯くらいくれても良いのとは確かに思うし、外に出たい。けど、今日のこと狂ったやつらがいるということは理解した。

これが俺の力だと言ったたら別にいいけど、こんなの俺ではなく悠汰だ。俺は悠汰であって悠汰は俺である、けれど精神的には悠汰は俺ではない。

このことをどのように説明することも出来ない。

一歩下がると、真治が腕をつかむ。その力は思った以上の力があるし、俺を抱き上げるくらい力を持っていることは、本当に意外すぎて、少しばかり恐怖を覚える。

『このさい思いつきり、大きなことしてみたりしたらどうしましょ？』

なんて凄く他人事のように言ってくる悠汰に、大きなため息を向けてやりたかったが、そのため息を真治達に聞かせるわけには行かなかった。

今のこの力のことよりも、今は先ずどうしてあの時扉が閉まったのか。と、どうして鍵の閉めたこの扉がいきなりあんなにも軽々と開いてしまったのか。この二点については触れてくれないのかと疑問に思う。

——お願いだからことを大きくしない方が身のため……………なあ、もし皆が言っている俺の力って言うのが、悠汰のことだったらどうする？

『……………どうだろう……………違う……………』とは言い切れないかもしれないけど、少なからずとも違う力があるような気がするんだよね僕には』

——そっか……………じゃあまだ様子を見たほうがいいよね

とは自分に言い聞かせるように言ったものの、不安なことには間違えなかった。なんていったって、本当のことを言ったとしても、これからのこともある。

それにこれが俺の力だなんていったところで、他に力が芽生えてしまったら、結局は言わなければならない。けれど、どっちにしたらいつかは悠汰のことを言わなくてはならないことにならなくもないのだ。

まだ土村家がこの家全体を囲っているのならば、それをどうにかなければならないのに、こんな事一つのためにこんなにも、しみりしなくてもいいのではないのだろうか。なんて思うのは、少しばかりいけないことなのだろうか。

だんだん自分での思考が出来てくると、かなり他人事のような言いようになってしまう。

こんなのはいけない。そうは思うものの、ヤッパリ何かぴんこないものがある。

グウウウウツ……

ヤッパリ考えるには、お腹に何か蓄えたい。

お腹に手をやって、擦りながらも、ベッドの隣にある小さな台の下においておいたパンに手をつけ、袋から取り出しパクツと口に含めた。

「なんで俺が朝ごはん貰ってないこと知ってたんだろうあの人……」

「その前に昨日この建物の中に入ってきていたとはな」

祐司が腕を組みながら黙々と考え出した。それに対して、ハツと

真治も勝治も、悩みこんでいた祐司も、監査室で言った言葉を思い出したみたいに、俺の顔を見てきた。

何でむいてきたのかわからなかった俺は、目線を三人に合わせるようにキョロキョロ見回しながら、パンを銜え、なに？という瞳で見てやった。

「お前！何であの時きちんと言わなかった！」

勝治が顔色変えて、思いつきり怒鳴りつけてきた。

だってあんなにもからかうように言われたら、言い返す気にもならないじゃないか。それにそんな事なんか気にもしていないようすだったから、適当に流してしまつて、言われるまで気づかなかった。なんてことは言わないでおこう。

勢いよく肩を掴み、睨みつける。

「あの時きちんと言つておけばこのようなことは起きなかったかもしれないんだぞ？！」

「だって敵がチャッカリ中に入つてるなんて思わないじゃん！！それに一応助けてくれたようなもんだし……」

最後の方はボソボソツと口の中で消えて言つたような気がする。

なんだか今まで怒つてくるのは勝治のような気もするのだが、絶対このことについては、すみませんの一言をいわなければならぬ気がしてきた。

本当は女性のことを言おうとは思っていたのだが、困っていた。言おうかどうか本当に迷っていた。言つた時に言つたあの「口説こうとしたのか？バカじゃねえの？」という一言で、さっぱり言う気がしなくなっていた。

なかなか言わない俺の肩を掴んでいた手に、グツと力が入る。

「イツ……たっ……」

『大丈夫？悠樹……』

——痛いけど……うん

『勝治さんは素直な子には優しいよ』

凄く他人事だ。

「う……うめんなや……い……」

素直にそういうと、少し複雑そうな顔をされていた。

夢と自分

僕だよ

返して

僕の力

返せ

真っ暗な世界。

前は独りだったのに、目の前に俺がいる。

「悠汰？」

『違うよ？俺だよ』

「俺？」

『そう。俺。ねえ、返してよ。どうせ使えないんだったら返してよ』

「ちよつとまてよ」

『なに？まつてどうするの？……………わかったよ後もう少しだけだからね？』

あれから一週間。

何もなく普通にご飯などをいただけるようになった。本当のこころを聞くと、そこまで手がからなかったらしく、ご飯は俺が作ることになった。

暗闇の夢を見た朝、凄くボーっとして何が起きたのか、どんな夢だったのかを考え。それからずっと夢の事ばかり思い出して、グルグルそればかり回っている。

力を返せといったその自分は、凄く自分のすべてを知っている口ぶりだった。このことを悠汰は知っているのか知って居ないのかは、良くわからないが、何を考えているのかもさっぱりわからなくなってしまったのだ。

リビングと呼ぶようになったその部屋のソファで、のんびりボーッと何かを見つめていた。

リビングだからなのか、俺が入るからなのか、皆して椅子に座ったりソファに座ったりと、確実に俺の四方八方に固まっていた。

後ろを見ても男。前を見ても男。右を見ても。左を見ても。全員男。女ツ気一つ無い建物。

どこにも出かける様子は無いし、どこかに行こうとも思えなくなってしまった。

なんだか今の状態だと、別に夢で見た自分に力を上げてもいいような気がしてきてならない。

ふわあゝつああゝ……

大きな欠伸をすると、隣にいた勝治が、ゆっくりとこっちを見つめてきて、眠いのか？と一言言ってきた。うんと声に出さずに頷くと、自分の肩を叩いて、寄りかかっていいぞといってくれた。

こう言うとき普通部屋に戻るのかなんていうもんじゃないのだろうか。どうしてここで寝させようとするのか。それとただ歩くのも億劫だと思っているのだろうか。

別にどうでもいいけど。

首を横に振って、靴を脱ぎ、ソファに足を乗せて小さくなるように体育すわりというのだろうか。膝を立ててその膝を抱え込む。そして、その膝の上に顎を乗せて小さくため息を吐いた。

今のため息は「暇だな」ではなく「女ツ気無いな」のため息だ。

むさ苦しい。

凄くむさ苦しい。

夜。

夢を見るのが少し怖かった。なんかいけないものを見てしまいそうで。それと、もう一人の自分を見るのが怖かった。

口調的には今の俺と同じようなしゃべり方だったから、悠汰では無いような気もしないこともないのだ。確信は無いが、なんとなく悠汰じゃないような気がする。

「眠れないのか？」

勝治がソツとカーテンを開けてベッドの空間の中に入ってくる。ソツと前髪をずらしてきて、優しくオデコに手を当ててきた。少しひんやりとしていて気持ちがいい。

「眠いのに寝れない」

甘えるような口調になってしまっているのにも気付いている。平和すぎて逆に怖かったり。

「ホットミルクでもつくろうか？」

その優しさには、首を横に振った。

「いい。けど。手。気持ちいいからそのままにしてて……だめ？」

「わかった。ちょっと待ってる椅子持つてくる」

さすがに立ったままでは辛いのはわかっていた。ゆっくりとカーテンから外に出て、カタツという音を鳴らして椅子を持ってきた。ゆっくりとベッドの隣に置くと、珍しく優しく瞳で微笑んでくれる。そしてさっきやってくれたように手をオデコに乗せてくれた。心配してくれたのか、ソツと悠汰も俺の頬を触ってくれた。熱は無いねと軽く笑ってくれたことに、ソツと微笑んで見つめた。

目線が勝治が居ないほうの方向だったからか、少し不思議そうな

瞳で見られたから、勝治の方向を向いてソツと微笑んでみた。

悠汰はゆつくりと布団に入らないで隣で寝ていた。

キング並の大きさだからもう一人くらい入りそうだった。

『勝治にも入ってもらえば？』

——こらこらそれは……精神的に無理かな。悠汰はいいよ

『ばあか。布団が人の大きさをモツコリしてたらおかしいだろ』

——同感

そういつてやると、ゆつくりと疲れていたのか眠りに入ってしまった悠汰とともに、俺もソツと夢の中に入ってしまった。

ねえ

いつになったら返してくれるの??

お願い

一日くらいでいいから

お前には力を操る事はできない

——やめて……苦しい……

首を絞められているかのように、かなり首の辺りに熱を感じる。反射的に息が苦しく、胸や肩が大きく上下に動かしてしまう。声は聞こえるのに今どこに自分が居て誰がいるのかわからない。目の前は真っ白にちかく、真っ暗に近かった。

「……き……ゆ……悠樹——！」

勢いよく力強い声に、目が覚めた。目は覚めたけど、まだ少し意識は朦朧もうちやうとしていて、まだ首を絞められているように息苦しかった。ぼやけて薄く、暗かったが、近くにたくさんの人が居て明るい事はなんとなくわかった。

「あっ……はあっ……ひあはあはあっ……っはあはあはあ……ゆ……うた……悠汰あ……」

『悠樹？！どうしたの？！悠樹——！』

「つら……くる……しい……つら……い……助け……て……」

「悠樹——！しっかりするんだ」

力強い勝治の声と、祐司の声。悠汰はなんとも無いらしいが、凄く自分が乗っ取られそうだった。今すぐにも皆を傷つけてしまいそうで、胸が苦しい。

「みんな……なあ……にげって……」

はあはあと苦しい胸を握り締め、ゆっくりとそういった。が、皆は逃げるどころか、心配そうな瞳が刺さってきていた。

じゃまだ

どけろ

からだ
器をよこせ

渡すんだ！！

その声とともに俺の意識は遠退いていった。
逃げろという言葉とともに。

覚醒

苦しさはなくなった。

「悠樹」が握っていた胸を放し、ゆつくりと状態を起こした。

「悠樹！！大丈夫か？？逃げろって何のこ……と……」

動ける。それとともに目の前にいたこの祐司。記憶の中での祐司の首を絞めている。力も入る。

いける。大丈夫だ。

ぎりぎりとうり響くその首を絞める力。

「悠樹！！放すんだ！！」

握り締めている腕を勝治。勝治が軽く叩いてくる。俺の視界に入ってきて、「悠樹」と呼ぶ。

この器は確かに「悠樹」かもしれないが。今の俺には名前がない。からだあえて「悠樹」を演じるのもいいかもしれない。

けれど。

「悠樹」に知っていて「俺」に知らない何かがある。何か忘れているのか。見えていないのか。どっちか解らない何かがある。

『悠樹！！その手を放すんだ！！』

「うわあっ……」

どこからか聞こえてきたその声に、反射的に手を放してしまった。周りを見回してもその声の主だと思えるやつは居ない。

「誰だ……今の声は誰だ」

『僕だよ悠樹！！見えてないの？』

「誰だ貴様は……」

急いで見回しても、誰も居ない。人入るけどその声の主は居ない。首を絞めていた祐司は、漸く放してもらえた開放感に、肩を上下して呼吸をしていた。苦しかったかのように、絞められていた首に手を添えて。

「悠樹！！どうしたんだ！！」

真治。真治が俺の肩を掴み、思いつきり動かしてくる。

邪魔臭い

逆の手で、思いつきりそいつの首を絞める。そして、祐司を締めていたほうの右手でも、ソツと触れ、ゆっくりと力を入れていく。

「あつ………がつ………ゆ………き」

「悠樹！！どうしたんだ放せ！！」

勝治が必死に仲間を助けようとしていた。助けるかのように、首を絞めている俺の腕を握り締めてくる。

「悠樹？？だれそれ」

クスツと笑って、力を加える。

『やめるんだ悠樹!!どうしたんだよ!!』

その声に反応してしまうこの器。^{かた}反射的に力を抜いてしまい、そのまま頭を抱え込む。

「誰だ……貴様は誰なんだ……」

ソツと冷たい手が、俺のその腕をつかんできたかのように、腕の一部が手の形でひんやりとしてくる。

「うわっやだ……いる。そこにへんなのが……見えない変なのが……」

『悠樹!!??見えないの??』

悠汰……逃げて……皆……

「悠樹」が勝手に何かをしゃべっている。何か誰かに話しかけるように頭のどこかで声がしてくる。

『悠樹??今のは悠樹?』

なんか……変なやつに乗っ取られてる気分……悠汰お願いだから皆を逃がして……殺しちゃうよ

「だまれ!!貴様は誰なんだ」

『お前こそ誰なんだ!!』

その見えない何か、「悠樹」に向ってではなく、何か直接俺に言ってきた。その言葉に反論したいが、その声に皆走らないような口ぶりだ。

反射的に靴を履いてみんなの中から出て行った。

「悠樹!!」

勝治や祐司が「悠樹」の名前を呼ぶ。

「貴様ら全員殺してやる……」

「目の色が違う……………乗っ取られてるのか??」

何かを推測するように、苦しそうな顔をしている真治が、ジッとこっちを見てきている。乗っ取られているのではない。乗ってっているのだ。ちがう。返し貰ったのだ。

俺の器を^{からだ}

やめて!!

苦しい。なんだろう。つぎは俺が苦しい。何か。昔の自分が…
…違う。悠樹だ。悠樹が俺を……。

胸を押さえつけ、苦しい事を示すように座り込む。

はあっはあつと息は激しく苦しくなり、小刻みに身体を動かしてしまふ。

『悠樹!!お願いだから悠樹を返せ!!』

返して……傷つかせるくらいだったら俺似返せ……この人たちを傷つけるな!!

「悠樹」が怒鳴ってる。俺を。お前の俺を殺そうと。いや。ちがう。何か違う何かがある。

「悠樹!!」

祐司だって勝治だって。真治だってその他の名前の知らないやつらだって、「俺」ではなく「悠樹」を知りたがってる。「悠樹」だけを助きたいかのように。

「俺」を助けるんじゃないのかお前らは。

「おま……えら……は……はあっはあっだめ……だ……悠樹……まだ出てきちゃ……だめ……だこれは……俺の……器……なんだか……はあっ……はあっ……うっ……」

「お前は誰だ??」

もっ目の前が見えないや。

「ん……」

まぶしい光を浴びてゐることは解つた。凄くまぶしい。この建物の中じゃ凄く珍しい光だった。

軽く瞼の上に手をやって光をさえぎりながら、ゆっくりと目を開いてみた。見る限りじゃ回りに心配そうな瞳の勝治や祐司。それに真治がいた。

さっきまでの何かの乱動は夢だったのだろうか。けれど、寝る前まではこんなにも人はいなかった。それに寝ているのに何でこんなにも明るいのだ。

「まぶしいよ……」

「悠樹……大丈夫か？」

「いや……大丈夫とかそういう問題以前にまぶしい……」

ゴソゴソと布団を書き上げようとするが、布団が見当たらない。いや。なんかおかしい。その所為で、眠かった目はさっぱり綺麗に開放され、かけていたはずの布団が、身体の下にあることに気付く。少し思考を停止して、どうしてこうなっているのかを疑問のようにじつと布団を見つめる。

「あれ？俺布団被って寝てなかったっけ……？」

再び身体を上に向かせて状態を起こし、周りを見回した。祐司と真治。勝治は寝る前まであやす様にいたからいいとして、どうして勝治も真治もいるのだろうか。

「祐司と……真治さんいつのまにきたの？あれ？……俺記憶飛んでる？？いや。寝てたもんな。飛ぶよね……あれ？」

全く持つて現状がわかっていないことに、何か悠汰までも皆も大きなため息を疲れた。

——俺なんかしたー？！

もちろんなにかしたことを、一部始終すべてを勝治から聞いたのは、俺のパニックが収まったときだった。

逃走

「俺……ころそうと？」

一部始終を教えてもらった俺は、人を殺しかけていたという事に、かなりのショックを受けていた。顔から血の気は退き、だんだんと自分が怖くなっていく。

またこんなことが起きないというわけでもないのだ。ここに俺が居る限り、この人たちは安全では無いかもしれない。そう考えると、ここに居ると人にとってはマイナスになってしまう。

こんな自分を守る必要なんかないんだ。

震える手。震える心。震える何か自分の……

「俺……もう……ここに居ちゃ危ないよ……」

「悠樹？」

今にでも逃げ出しそうに、一步退いた足に、祐司がガシツと腕をつかんできた。

「やだ……またあいつが出てきたら……」

すぐ後ろは扉。

腕をふり払い、ドアを開けて一目散に逃げ出した。後ろからは力強い声で、悠樹！と名前を呼んでいるのが解った。けれど、いつか自分は「悠樹」じゃなくなる。それが今は怖くて、あの人たちを傷つけたくなくて。

だから逃げた。

俺がここに居なければ、大体の人は助かるんじゃないのだろうか。

なんとなくそう感じていたのは、どこかが助けを呼んでいるのだろうか。

急いで悠汰も後ろからついてくる。

『悠樹？！どうしたの？』

「ダメなんだ……あいつを止められる自信がない……またあの人たちを傷つけないもん」

走る息切れに少し堪えながらも、覚えていると思われる玄関を探した。後ろから追ってくる足音は、かなり響き渡る一階では、どこに誰が居るとかの問題ではなく、どのように来るかが解ってしまう。疎らに走ってくる足音に恐れながらも、光が見えてくる。そこに向かつて思いっきり飛び出すと、広い草原。いや荒地のような感じだった。ひるまずに走っていると、前のほうに居るもん坂田と思われる二人に声をかけられる。

「悠樹？どうして外に！！どうかしたのか！？」

少し焦ったような声で近づいてきて、肩をつかまれそうになったのを上手く避けながら、門の外に飛び出した。

「悠樹！！ダメだ！！どうしたんだ急に！！」

漸く追いついた祐司達が、門のところで立ち止まり、数十歩前に居る俺に怒鳴りつけるように叫んでくる。無理に距離を縮める様子は無いらしく、振り向いて一歩下がった。

「だって……怖いんだもん……」

信じていいのかも解らない。
次。

告ぎこの前みたいなのが起きたとき、どうすれば良いのかが解らないし、前以上のことをしてしまうかもしれない。それが怖い。
一応ご飯も食べさせてもらっているし、守られているというあれがあるから、変に手を出させられたくない。
抑えられる自信なんてあるわけが無い。

「……もう抑えられないかも知れないんだよ……？」

「いいから……こっちに來るんだ」

怒鳴りつけるように言う勝治の言葉に恐怖を覚え、反射的に道路を走っていく。建物があるだろう方向に。後ろから追ってくる男たちを恐れながらも、思いつきり全速力でこの直線を走っていく。
走することに自信がないというのに、どうしてこんなにも走らなければならぬのだろうか。そう思った矢先だった。

苦さびれたビルの横河から車が急に俺の目の前に飛び出し、キキーツとブレーキがかかってきた。反射的に止まらなかった俺は、車のトランク部分にバタリと身体を倒してしまった。

「急に出てくるのは反則……」

ぶつかっただお腹から少し食べてものが戻ってきそうで一瞬困る。
けれど、今箱の車の持ち主を知らなければならぬのだが、車から出てきたのは見たことも無いサングラスの男だった。

一瞬鳥肌が立った。

見たことも無い嘘だ。

これに似たやつならあったことがある。姫倉家に誘拐される前に襲ってくる時の黒ずくめがこんな感じだったのを一瞬にして思い

出してしまった。

「えっ……やだ……」

車が出てきた方向に走って逃げようと思った瞬間、思いっきりお腹の部分に腕を回され、軽々とつかまってしまった。するとともに、違うところからも車が来て、後ろから追ってきた祐司達まで逃げられないように囲ってしまう。

車から出てきて、周りを取り囲むように銃やらなんやらと構えられてきた。

両手を上に上げられ、二つ合わされ思いっきり身体が浮く。ぶら下がる感じで、凄く腕の付け根に悲鳴が来る。

「イタッ……やだ……助け……」

自然と涙目になってくる。尻目に凄く内側から水滴が集まってくる感じがした。今にでもジリジリとかいって、びりびり破れてしまいそうなの。なんだか五日こんな感じを受けたような受けなかったかのようなの。

『動くんじゃないよ下手して動くとその子を打つわよ』

赤いレーザーみたいなのが、俺のオデコの方に当たっている気がする。少しばかりそのところが暖かい。

ヒツッと少し引きつった薄い声を出し、ピタリと俺が固まってしまっていた。悠汰も、それなりに緊張している顔つきをしていた。何かを決めたかのように、ゴクリと喉につばを通したのか、そんな音が聞こえてきた。

ゆっくりと歩く。

『動くんじゃないよ』という言葉はかなり無視しているが、見え

ていないのならば意味が無い。といわれてみたら確かにそうかもしれないと、少し納得がいく。

何をするかと、目の端で悠汰を追っていると、スッと目の前に立って、リーダーが当てられている前に立ちはだかるように、凜々しい顔つきで立った。

——ゆ……悠汰？？

『俺。多分銃も大丈夫だと思っただよね……』

——でっでも！！大丈夫だとしても痛いには痛いだろ？？

『今まで何を触っても痛いと思わなかった。包丁の刃をギュツと握った……けど、何か尖ったものを触れているってだけで、痛いとも思わないし血だって出ないんだ！だから……だから「不必要な俺」じゃなくて「悠樹を守る俺」になりたいんだ！！』

ゆつくりと振り向き、見つめてきた瞳は、覚悟をきちんともち、自分に自信のある笑みを浮かべていた。

なんでだろうか。

逃げようと思っていた心がどこから消え去って言ったかのように、「悠汰が居ればどうにかなる」だなんて、少しばかり甘えてしまいそうな思考が、心のどこかによぎっていた。

自分の力で何かをしないといけないんだ。そう思っている、いつかは何かの壁にぶつかってしまう。そんなことくらい解ってる。解ってるからこそ、悠汰を信じようと思っている。

『だから悠樹……悠樹も逃げないで戦おうよ……俺が絶対一緒に居てやるから。それでも逃げたいって言うんだったら俺もついていくから』

——うん……悠汰。俺戦うよ。せつかく悠汰が未来から助けに来てくれたんだから無下には出来ない

決めた。漸く決めれた。

今まで少し拘っていたことがやつと開放された。

姫倉家なんか信じなくてもいいんだ。けど、悠汰を信じればいいんだ。裏切ったら俺から悠汰を恨んでやる。そう心に決めて、キツと銃を構えている敵をにらみつけた。

『ふん。今更強がってどうしようって言うんだい？』

濁るその女性の強気の言葉。きちんとその言葉を頭に叩き込ませ、ゆつくりと息を吸った。今出来ることをしたい。ただそれだけだ。

どうしよう。

ちがう。

どうにかするんだ。

「俺を殺して良いの？やつぱり心臓だから死んだものじゃないと必要ないのか……？けどね？俺お前らの勝手で死ぬ気もないから。俺には強い味方居るしね」

にやりと微笑んでやった。いや。微笑むというのかは良くわからないが、何か勝ち誇った気持ちになれたのだ。

少し驚いたような顔で悠汰が振り向いてくる。スツと微笑んでやると、強気な顔で微笑み返してくれた。凄く嬉しそうな顔でにっこりと。微笑むのではなくにっこりと笑った。

『死ぬかもしれないのにどうしてそんなにも強気で居られるんだ。今から死ぬのに』

カチャツときちんと構えなおすように、ジッと俺を狙ってくる。

「やめろ！！お前ら悠樹の心臓を狙ってどうするんだ！！悠樹の心臓は悠樹のものだ！！」

勝治は、必死に説得をしようと急に怒鳴りつけてきた。が、勝治よりも少し前のほうで構えている女性が、ジッと構えている。全くもって振り向くつもりは無いらしい。

女性の後ろに力強く男が二人立っていて、いつでも銃殺できるようになっていた。

「撃てるもんだったら撃ってみやがれ糞女！！」

にやりと微笑んで思いつきり怒鳴りつけた。

「悠樹！！挑発は寄せ！！」

祐司が注意するようにそう怒鳴りつけるが、女性は思いつきり狙ってくる。

バンツ！！

今の俺にはそんな音に聞こえた。

けれど、弾は俺に当たらずにからんと言つ音を鳴らしてコンクリ

―トに落ちて行つた。

『なッ！！』

もちろんみんなの皆して、思いつきり驚いているような顔をしている。もちろんそうだろう。

協力してくれた悠汰は、ゆっくりと振り向いて、大きなピースをこっちに向けてきた。なんだかうれしくて、クスツと笑ってしまった。なんだか。ホツとする。

『そうか。もう力を使いならしている様子だな』

「力??知らないねそんなの!!俺には力なんてもんはない!!言つただろ??俺には力強い味方が居るつてよ!!」

『何を強がっている!』

女性は再び銃口をこっちに向けてくる。その銃口まで悠汰が近寄つていく。何をするのかと思い、じつと見つめていた。その見つめた先に、ジツと悠汰は、その銃口を捕まえ、グイツと力強くその銃を取り上げる。

『なッ 貴様何をした!!!』

もちろんそれに対しては俺にもその意図がつかめない。こっちらは悠汰がもっているかわかっているが、周りから見たら、浮いている。ということになるのだろうか。

カチャツと静かにならし、ゆっくりと狙いの銃口をその女性にピタリとくつつける。

狙いの矛先が変わった。

ソツと片方の悠汰の手が、女性の首の後ろを通し、下手に大きく動かないように固定させるように力強く掴んだ。

『なっ……なにかつめたいものが私の……首を……』

「撃たれたくなかつたらもうこの手を離すんだ!」

力強く怒鳴りつけると、ゆっくりと後ろの男派手を離してきた。少しばかり高い位置から飛び降りるように、スツとしゃがみこんでつかまれたところをゆっくりと擦った。

もちあがられているとき。

何度も思った。どうして今回のようなときに限って取り憑かなかったのだろうか。わけのわからない変なやつ。いや。きつとあれが本当の正体かもしれない。解らない。わからないけど、心音が聞こえてしまうかのような大きな鼓動。上がった心拍数。たぶん。本当に多分なのだが、あれは皆がいう『心臓』なのかもしれない。

だからこそ、こういうときに役に立って欲しかった。調節できない力。自分でコントロールのつかない力。理解の出来て居ない力。だからこそ、莫大な力を持っている気がする。

『悠樹!早く走れ!!』

悠汰が振り向いて、力強くそう怒鳴りつけてきた。『おう』と心の中で渴を入れるように叫び、祐司達の元へと走って行った……。

平凡な一日だったのに

矛先が変わった銃を握り締めていた悠汰は、その銃を持って近づいてきて、ソツと俺に渡してきた。けれど、これでここに居る土村家を殺すわけには行かない。

ここで俺が殺してしまえば、犯罪者になってしまう。それでは全くもって意味が無かった。いや。寧ろ、警察に捕まって漫画によくあるようなあんな牢屋に閉じ込められる。逃げるためならそれもある案かもしれない。

けれど、逃げる必要はなくなった。

いつか姫倉家に裏切られるかもしれない。捨てられるかもしれない。殺されそうになるかもしれない。それならそれで別にいいさ。力強い味方が、本当にすぐ近くに居てくれたせいで、逆に気付かなかったが、漸く気付いた。

もともとの俺。悠樹として育ってきていたが、ある出来事で過去に戻ってきたという悠汰。悠汰が一番の力になる。力になりすぎて困る事は無い。

利用をするような方法になっってしまうかもしれないけど、それは多分悠汰も百も承知かもしれない。それに、俺よりも、俺の力のことを少しでも知っているかもしれない。知らなくても、ずっと一緒にいてくれる。そういつてくれているような気がして、なんだかほっとしてしまった。

もし。

もしだが、そんな悠汰に裏切られるような事になってしまったら、俺はその場で死のうとおもう。

相手が祐司たちで無ければ、祐司たちに助けを求めるかも知れない。

けど。

出来ればその思考を、いつも助けしてくれた変わりに助け出したい。

なと思う。

その時になれば、キツと俺も本心のものに取り憑かれると思われ
る。いや。本心で助けたい。

そう決めた今、誰にもこの思考を、大きく曲げることは出来ない
だろう。細かく何かの方向に向かわせる事はできても、絶対に主旨
は変わらない。そう心に決め付けた。

「悠樹」

逃げ出し失敗から二日がたった。

暢気に勝治とランプで燃えていたとき、部屋の隅のほうにいる
祐司が、何かを思い出したように声をかけてきた。

「ん？」

「少し聞きたいのだが……」

「なに？」

「ユウタってだれだ？」

唐突な質問。

しかも、かなり真剣な瞳で見つめてくる。それを思い出したかの
ように、勝治もじっと俺を見つめてくる。

今までは、ランプで負けるなり、もう一回とか、忘れていたか
のように楽しんでいたのに、今になってそんなにも真剣な空気にさ
れてしまった。

「……えっ？なんで？」

「お前が暴れたとき。ユウタって呼んでた。誰かの事を。それにその暴れたやつがなんか聞こえるって」

『あつそういえば…』

悠汰は、何か知っていたかのような口ぶりだった。

——どういうこと？

『暴れた時、逃げろって』

——ええ～……

どうしようか。

ここで言ってしまうえば、今まで頑張ってきたこともパアになる。けれど、ここでなんのこと？といっても、またなにかフツとした時にいわなければならぬ。そんな時に嘘だったのかという問題になるのは少しいやかもしれない。

けれど、このことを言って本当かどうかを信じてくれるかどうかだ。

「……………言っても……言っても信じてくれないから」

「いいからいえ。信じるのはこっちだ。信じるも信じないもこっちの事だ。いいからすべて言え」

逃げないように、ガシツと腕を勝治につかまれた。どうしてさっきまで楽しんでいたのに、こんなにも真剣でしんみりとした話しになってしまっているのだろうか。

悠汰も少し困っているような視線になってしまっている。こんな時に何の前触れも無く聞いてきたのは、狙っていたのか狙っていなかったのか、不意打ちは作戦会議みたいに、悠汰と離せなくなる。少しでもつじつまの合う嘘を。

けれど、ここで嘘を言ってもヤツパリ意味が無いのだろうか。

『悠樹……すべて言っちゃってよ。俺はなんも構わないから』

俺の手をとんと叩きながら、ソツと顔を覗きこんでくる。叩いてきたその悠汰の手を、ソツとつかみ、軽く遊んで見る。

「ここ。俺のここにちゃんと居るんだよ悠汰が。本当は名前悠樹だけだね」

最後の方は軽くクスクス笑いながら、ソツと悠汰の腕を軽くなぞっていく。

「本当は悠樹？」

「そつ。何で俺が祐司の名前解ったと思う??……悠汰が教えてくれたの。未来の俺。二度目の今を悠樹は悠汰として俺を助けてくれるんだよ」

「いつから？」

「んーここにつれてこられる日学校から帰ったら居た。信じる？」

「ここまで現実の名前とかわかれてたらな。信じないわけには行かないだろ」

スツと微笑むその微笑みは、悲しいとは見られなかった。どちらかというと、何かが解って嬉しいというようなすつきりとした微笑になっていた。

ずっとここに居てくれて、ずっと俺を守ってくれていた。

「んであの扉開けたのも悠汰だよ」

「結局お前の仕業だったのか……」

「すみませーん」

軽く微笑んで言った。
なんだか嬉しかった。

こんなにも簡単に、早く言ってしまうなんて、全然思っても見なかった。もう少しでも後で、どういうことなんだと怒鳴りつけられそうになる。そんな想像ばかりをしていた。

だから嬉しかった。

すべてを吐き出せて、今までつまっていたものが、綺麗にすっきりとなってしまうた。だから、フツと微笑んでありがとうといったみた。

なにが？という顔をしていたが、嬉しそうな俺を見てフツと微笑んでくれた。

「なあ、今度どっかでかけたいな買い物！」

「ばあか。また襲われたらどうするんだ」

勝治がコッソリとオデコを叩いて、体を後ろに倒すような力で押してくる。

「その時は守ってくれるんだろ??」

「プツ……他人事のように」

祐司はクスクス笑いながらそんなことをいつてくれる。怒られると一瞬おもったが、こんなことを言ってみるのもいいかもしれない。

「まっ守ってやらないことも無いけどなあ。いざって時には悠汰ってやつにも手伝ってもらうかな」

「ハハッそれもいいかもな」

なんて勝治も笑っていた。

これですべてが終わってくれば良かったのだ。あの発作みたいなことも起きない。もうあんなやつらにも襲われない。そんなことがおきてくれば、人生がすべて終わったような気にもなるのだ。

けれど、こんなところでジッとしているのもいやだし、親のほうも少しばかり気になる。学校は全く持つて気にすることも無い。

外に出て、普通の人として紛れて、普通の買い物をしたい。

追われてることも襲われる事も、すべて記憶から消し去って買い物がしたい。そして、銃などの事をなしで、あんなやつらに誘拐されてみるのもこれまた楽しいかもしれない。とおもったけど、こんなことになるのならばもういやだ。

「で? いかないの?」

少し首をかしげながらスツと祐司の方を見つめてみた。すると、ゆっくりと祐司は勝治の方を見て、ゆっくりとした口ぶりで言った。

「いかないの?」

「……俺は今誰にまわせばいい？」

「ええ〜うんって言葉をくれればいいよ」

「じゃあ……うんかないよ」

「ひどい」

くすくす笑う二人に、思いつきりギャーツと飛びつく。

「なにお前らだけで楽しんでるんだよ〜」

ドアの向こう側から真治他たくさんの男たちがゾロゾロと入ってきた。

「真治さん！！お願いがあるんだよー」

立ち上がって、さっさと真治のところに、ピトツとくつついて話しかける。

何が？という顔でじっと見つめてくる。それにスツと息を吸って言った。

「外にお買い

「ダメ」

「……まだ最後まで言っていないのにー」

うそ泣きプラスしつく真治をつかんでいた裾を、引っ張ったり

押したり、軽く甘えてみるけど、この頑固そうな口は開きそうも無かった。

他の人にも少し甘えてみたが、焦るだけでうんと首を縦に振ることは誰一人としてしてはくれなかった。他の方法を考えたが、特に甘えた事の無い俺には全くもって思いつかない。

ううと唸りながら、ベッドに足を乗せ、ポロリと靴を脱がせてベッドの中にゾロゾロと入って言った。

「あれ？トランプ？」

真治がテーブルの上に広がっているものに気付いたらしく、元々俺が座っていた椅子に腰を下ろし、ガサガサとトランプを集めていた。

やるか？と寝る体勢に入っている俺の近くで、再びトランプを再開しようとしているのだ。別に疲れているわけでもない、ただ暗くていつも寝る時間帯というだけだから、べつんまだ騒いでいても平気だ。

寧ろ、基本的に煩くても眠れないわけじゃないから、別に何の問題があるわけでもなかった。

次の日なのだろうか。

暫くして、真っ暗になっていた。あのまま寝たのかと、薄めで感じながらもゆっくりと体を起こすと、ベッドの隣には勝治が腕を組みながら椅子の背もたれに寄りかかり、いつものように寝ていた。勝治が閉めたのだろうか、ベッドのカーテンも閉められていた。

周りが見えないため、足を下に降ろし、靴をきちんと履いてテーブルの方を見た。

きちんとトランプは閉まっていて、椅子に座って眠っていた。

眠りが浅いから少しの音で気付いてしまうという悠汰の言葉を覚えていたから、隣で寝ていた悠汰をも起こさないように、ゆっくりと部屋から出て行く。

もう歩きなれた道。

柔らかい絨毯と、冷たい壁。暫く触っていない壁だけど、見るからに冷たいと解る。

「トイレ」

そう。本当は二度寝をしたかったけど、体を軽く起こした瞬間と入れに行きたくなり、ここまで来た。

トイレは凄く暗くて、逆に怖かった。電気を即座につけて、さつさと用を済ました。

トイレからでると、再び暗い中を歩かなければならないことになってしまっていた。それに少しため息を漏らしてしまう。

さつきまでが暖かった所為か、凄く寒く感じる。さつさと部屋に戻ろうと思ったとき、なぜかお腹の虫が鳴きだした。しかも、一度聞いてしまうと、再びなりそうなくらいお腹がすいてしまう。

本当は起きたら必ず俺を起こせ。いつも勝治に言われていたのだが、それも何度も中まで入ってこないだろうと、起こさずに来てしまったのだ。

今のところは別に何も問題は無い。

早足で階段を降りていき、いつも固まっているはずのリビングのところには、誰一人として眠っている人は居なかった。

棚の辺りからゴソゴソとパンを探り出す。確かあるはずなのだ。いつもここから数を数えながらも無くなる前に祐司に買ってきてもらっているのだ。

何かあつたらすぐに逃げ出せるようにと、開けておいた扉から足音がした。スツと振り向くと、部屋全体が暗い所為で誰なのかわからなかった。

——誰？！

ピタリと体を固まらせて、ゆっくりとできるだけ端の方に進んで言った。

「悠樹？」

どこかで聞きなれたような声。といっても、多分名前を余り呼ばない人だ。一日回りにほとんど居るのは真治と勝治と祐司くらいだ。けれど、この中で一度利いたことあるような声で、ホツと安堵を落とした。

「びつくりさせないでよ……」

だんだんにハッキリする顔形に、だんだん力抜けていく。ヘタリと床に座ってしまう前に、腕をグイッとつかまれてきちんと立たせるかのように、肩もつかんでくれた。

「ごめんごめん。監査室に居て見えたから……。トイレだろ？一人であんまり動こうとするな。どうした？お腹でもすいたか？」

「うん。お腹が泣いた。空いたぞって」

「そっか」

少し高めの棚から、少し小さめのパンを取り出してくれた。

「ほらっこんくらいにしておけ」

「はあい」

ガサガサと袋から取り出し、パクツと口に含みながら、ソファに近づいていく。

「あんまりゆっくりしてると勝治が目を覚ました時にまたガミガミ煩くなるぞ」

「ん〜」

本当に小さいから、スツと手の中から綺麗に消えていった。ゴミ箱にポイツと捨てるとハイといってリビングを出て行った。

周りを起こさないように、できるだけ静かに中を歩いていく。

部屋に着くと、ドアを開けるなり、お休みといって一緒に来てくれた人は監査室に戻っていつてしまった。

ゆっくりと優しく閉め、カーテンを開けてベッドの中に入っていると、その音でおきてしまったのか、ピクリと勝治の方は動いた。

「悠樹……?」

目の前にいるはずの俺がいないからか、少し焦ったような声がしていた。

「ここにいるよー」

大きな声を出す前に、俺が後ろから声をかけてやった。

「悠樹！お前どこに」

「トイレ。それだけに起こすのもいやだなんて思って」

「バカッそれだけでも起こせ！！」

「静かに。おきちゃうよ？みんな。それに大丈夫だって途中で監査室に居た人に見つかったし」

ゴソゴソと布団の中に再び戻ると、布団の中はすでに冷たくなっ
てしまっていた。

「朝になったらきちんと説教だな」

「寝起きの癖に威勢が強いよ……」

『んゝ…………悠樹？』

「あつごめん悠汰まで起こしちゃった？」

『起きちゃった』

目を擦りながらもごめんちゃんなんて、俺が言わないようなことをチャッカリ言ってしまう。何があつてそんな事を言うような自分
になってしまったのだろうか。

「んじゃ再びオヤスミイ」

なんていう不思議と自然な一日だった。といっても夜だけだが。
なんだかこれだけでも幸せだった。いや。これ以上のことがおき

ても幸せだと思っけれど、逆にこれが一番幸せかもしれない。

何事もなく、皆で楽しく。

が いい の だ が、外にも見回りの人や、見張りの人。監査室にいる人たちのことを考えると、幸せも何も消え去ってしまいそうな気もしてくる。

できればその人たちも混ざって、ワーワー楽しみたかった。

けれど、ふと考えてみれば、再び不思議なことを思い出した。

一度迷ってでてきたあの女の人は、意外にも警備がきちんとしていた事。矛盾しているような気もしないことは無いのだ。どうやってあの見張り好みまわりの人たちの中で入り、見つけることが出来たのだろうか。

あの時はまだ警備が薄かったというのだろうか。

それを考えるたびに、気付けば知らないやつに誘拐されているんじゃないかと、たまに夜が怖くなったりもする。

殺す

スツと頭の中にその言葉が出てきた。

俺の言葉のようで違うような声。その声を聴いた瞬間、薄っすらと眠りかけた目は、再びパツチリと覚めてしまった。

胸の心拍数が早く、鼓動が外にまで聞こえてきてしまいそうなくらい、大きくなっている。一度感じたことのある暑さ。

首ではなく、胸を締め付けられるような苦しさ。唸る事も出来ず、金縛りにあったかのように、ピタリと固まってしまったからだ。その身体を無理して動かし、腕を胸に近づかせて、ギュッと心臓を握るように胸を握り締める。

「はあ……はあ……くるし……」

悠……樹？

「悠樹？　どうかしたのか？」

「またあいつが……でてる……やだ……たすけっ……はぁはぁ
あはぁはぁはぁはぁ」

「悠樹！！しっかりするんだ！！」

『悠樹！！』

奥のほうからガタガタツと椅子を動かす音がする。キツと他の人たちまで起こしてしまったのだらう。カーテンを軽く開けて祐司も入ってきた。

「悠樹！！」

「やだ……も……しにた……」

返せ……

苦しみが急にぱつと消えた。それとともに目の前は真っ暗だけど、くらくらししている様子は無い。何か、真っ暗な世界に放り投げられたようなものだ。

あの夢のときと同じような真っ暗な世界。

返して？

スツと後ろから自分の声が聞こえてくる。反射的に振り向くと、ジツと上目遣いで見つめられているのが解る。

死んでいるような瞳。それでも何か力強い目つき。一步退くと、足の力が急に減ってく。ガクツと方が落ち、何かから落ちそうなのを、必死に掴むかのように、前に体重を返した。

気をつけて？その後ろは奈落のそこに通じてるから下がらないほうがいいよ？

にっこり微笑んで、地面にへばりついている俺を思いつきり見下ろしていた。

目の前が自分だからこそ怖い。俺なんかがこんな顔ができるんだなんて考えると、自分でもいつか仕出かしちゃうんじゃないかのように。

すごいよね。君にはあつてあの未来の俺……悠汰にはないやつがあるんだよ？

「悠汰……にはないやつ？」

俺だよ

につこり微笑んだまま、グイツと自分の親指を、力強く自分に向けていた。

確かにこんな事に悠汰がなったとはいっていなかったし、こんなのも初めてだといっていた。ということは、悠汰とは違う人生を送っていることになる。

一番初め。

姫倉ではなく土村の方に誘拐されたという悠汰。

土村から悠汰のおかげで逃げ出せた俺。

ヤッパリそこに違いがあるのだろうか。

悠汰にも居ると思った？いないよ？いるわけないじゃん。確かにあいつは未来の俺だけど俺とは違う未来を気付いてきていた。解る？

「……じゃあ何でお前が居るんだよ……」

なんで？そんなのお前は知らなくていいだよ？そこから落ちてくれれば良いのだ。そしたら俺がちゃんと演じてあげるから

「やだお前なんかによらえてどうする」

そんな拒んでも仕方がないのに………すべて………すべて俺に任せろよ

——どうして……？どうしてそんなにつらそうな声をするんだ……

そんな事もいえなくなるくらいに体力は落ち、だんだんと奈落に落ちていないはずなのに目の前が本当に真っ暗になってきてしまう。

夢の中に落ちるように。違うところに落ちてしまう。
どう拒んでも、心はだんだんと暗闇に落ちていってしまった。

もう少し……

すべてを手に入れた

最後に聞いた言葉はそれだった。

「んっ……………」

スツと目を覚ますと、一度見覚えのある場所だった。

赤めの太いカーテンが周りに囲んでいて、ヤッパリ周りには男ばかりが囲んでいる。どうしてここまで「悠樹」に過保護なのだろうか。皆して臍^{ひいき}盾^{かた}なのでは無いだろうか。

本当は「俺」が「悠樹」なのに。どうしてあいつを臍^{ひいき}盾^{かた}するのだろうか。そんなに「俺」はいらない？「悠樹」が居ればそれでいいのか？

どうせお前らだって「心臓」いや。「俺」を必要としているのに。

「悠樹……………！」

少し嬉しそうな顔で、「俺」の方を見てくる。ソツと肩に手を当ててきて、その手が少し震えていた。何が嬉しかったのだろうか。

「大丈夫か？身体はつらくないか？」

この前はここで暴れて失敗した。もう「あいつ」は出てこないから「俺」が変わりに「悠樹」を演じてみせる。そして隙を狙って殺してみせる。

絶対に。

絶対にこの身体は「俺」のものとして扱ってみせる。

「うん……ごめんもう大丈夫だよ？」

柔らかいベッドに腕を乗せて、ゆっくりと上半身を起こして、左側に居る祐司をじっと見つめてみた。

こいつが一番「悠樹」を甘やかしていたやつ。それであって、右側に居る勝治は、全体的に厳しくて、力強い目つき。

「何時間寝てた??」

「大体三日だ」

「三日!??」

さすがに驚いた。そんなにも長い間「あいつ」とああだこうだいいまくっていたのだろうか。凄く短い間に感じていたのに、何をそんなに戸惑っていただろうか。

あえて言うならあれは多くて一時間だろう。三日も争っていたとは思えない。この殻だが疲れきっていたということなのだろうか。

「そっか。ごめん心配かけて」

「けどどうしたんだ?急に」

「わかんない……胸が苦しくなって……。けど今はもう大丈夫だよ」

にっこりと笑ってできるだけ自然のような口調で。周りを見回すと、まだ心配そうな顔つきは戻らなかった。けれど、それでいい。もっと心配してもっと嚴重になるんだ。もっと。

特にこれといった作戦なんかは思いつかない。これからどう使用なんかは全く持って考えていないけど、とりあえずこいつらをいつか殺さなければならぬ。理由なんか知らない。身体の本能がそうこたえているだけ。

「俺」の本能がまさにこの心臓の本能だという事。この心臓こそが今起こらなければならぬことなのだ。

——けどどうやって？

こいつ……悠樹……じゃない

悠汰には解っていた。

何かがあつたら一番に悠汰に笑いかけるはずの悠樹が、「悠汰」という存在を全く持って知らないかのような感じた。

悠樹……

周りを見回して、どうにかして何かを知らせたかった。勝治だけでも、祐司だけにでも、「悠汰」という存在を知っている人に、

今の「悠樹」は「悠樹」ではないことを、はっきりと伝えたかった。人にふれることはできる。出来るから違う方法でもいいから、何か物理的でも、積極的にでもどうでもいいから教えようと必死に何か物を探した。

人に触れるということは、反射的に何かを伝えることが出来ない。

紙……

紙に書いて、その場所に祐司でも勝治でも真治でも、連れてきて読ませれば良いのだ。けれど、紙はあってもペンが無い。

意外と不自由だな……

できるだけ早く、できるだけ確実に知らせるには、かなり不自由な場所だった。

勉強する必要が無いから、筆記用具がない。普通何かを書くためとして何か一つでもあるはずなのに。

どうして皆信じてしまうのだろうか。

今の悠汰には、不安でいっぱいになるところだった。こんなにも態度が違うのに。今までの口調と少し違うところがあるのに。どうして気付いてくれないのだろうか。

今の「悠樹」が企んでいる事は、なんとなく前回のあれでわかっているのに。どうしてみんな疑問に思ってくれないのだろうか。それを考えるだけで、悠汰の心はモヤモヤしてしまっていた。

勝治と真治と悠樹たち。祐司以外は、お腹がすいたからと部屋を出て行った。部屋には、悠汰と、シーツを綺麗にしたり、昨日の片付けなどをする祐司だけが残っていた。

チャンスかも……

ベッドの上に居た悠汰は、祐司がシーツを動かしたとき、に鍾と
してなってしまったのか、ゆっくりと降りるとき、ずっと祐司の手
が止まった。

顔を上げて、目線を悠汰に向けたかと思うと、キョロキョロ周り
を見回していた。

「悠汰……だっけか？いるのか？……気の所為か……」

気の所為として、シーツをたたんで持ち上げようとしたシーツの
上に反射的に上って座った。重みがグンと来て、一瞬上がりかけた
祐司の腕は、再びバウンドの効くベッドの上に戻ってしまった。

「いるのか……」

漸く気付いてくれたらしく、悠汰は勢い欲祐司の方に手を当てた。

「え？」

『悠樹を助けて!!』

思いつき怒鳴りつけたのに、全く持つて聞こえたような感じは
してくれなかった。聞こえてくれたのなら嬉しかったのに、全く
聞こえてくれたような気配はしない。

周りを見回してどこに居るのかと見回していた。けれど、目の前
にいるというのはなんとなくわかってくれたのか、ソツと自分の肩
に手を当てるのかと思ったら、その悠汰の手をソツとつかみ、その
まま触れたものをなぞっていく。

腕を上り、肩に行き、フツと首元まで到達した。

「居たのかお前。ちゃんと。見えないって不思議だな……何か話せ

たりするのかな？……ちょっとまってる。ここに居るよ？じゃねえと絶対に見つからない気がする。何かペンと紙持ってくるから」

漸く解ってくれたかのように、ソツと手を放させると、急いで悠樹の部屋を出て行った。

どこまで行くのかはわからないが、なんとなくここを離れたら後でかなり怒られるような事になるのは、今までの経験上なんとなくだがわかっていた。

特に祐司だから、おしとやかな人ほど怒ると怖い。

寧ろ勝治に怒ってくれた方が、こういう人だってわかっているから、逆に怖くない気もするのだ。だから人間大人しい人ほど味方に付けるだ。

特に祐司は物分りが良かったりもするし、短期では無いから、相談するにはもってこいのタイプだ。それに、世話を焼くのが好きみたいで、軽く乱暴を振るってもしつけのうちだとたまに性格が変わる。

一番いい例が、初めて祐司と悠樹が会話をした時だろう。かなり乱暴のように扱っていたが、今ではこんなにも甘やかすんじゃないかというような口回しだ。

再びガチャリと扉が開くと、早足で祐司が近寄ってきた。

重ねたシーツの上に乗ってる悠汰を探すかのように、ソツと手を伸ばしてきた。その手に、ゆっくりと指を絡めて行くと、ホツと息を吐くように優しい微笑と、ため息がこぼれていた。

「これに字かけるか？……ここじゃ無理だろう？こっちに」

軽く腕を一・二回引つ張ってその場から離れるように示し、昨日にトランプを広げていたテーブルの元へと連れて行った。

ゆっくりと椅子に座ると、紙をテーブルの上に乗せ、ペンを渡さ

れた。

これを悠汰がもつたら、きっと浮いていることになるのだろう。想像しただけでも心霊現象に見えていやだ。

久々に持つペンが、凄く硬く感じられる。今まで別に何を持つこともなかったから余計に硬く感じてしまう。

少し震える手を支えながら、ゆっくりとテーブルに向かい、紙と格闘を続けた。

書き終えて、祐司に渡すと、目を流すだけで読めるくらいの短文であった所為で、すぐに顔色は変わっていった。

「これ……本当なのか？」

紙を再び悠汰の元に戻し、なにか書くように指定される。本当と
いう二文字を出すと、段と力強く立ち上がった。

「嘘に決まってるんだろ？」と怒鳴りつけて部屋から出て行くかと思っ
たら。

「チクショウ……悠汰。お前も来い。紙ならいっぱいあるから……
ペンは俺が持っていこう」

立ち上がりながら、太いメモ帳を持ち上げ、ペンをくれと手を出
されたから、ソツとその手の上にペンを落とした。

来いと言って、部屋を出て行った。急いで悠汰も後ろから付いて
いった。

急いで階段を駆け下り、リビングの方に行くと、悠樹達が何か楽し
みながら騒いでいた。その中に血相を変えてズンズン中に入って

いく祐司に、周りの人たちはだんだん静まっていく。
それに気付いた勝治達が祐司の前になつてきた。

「どうした？祐司」

「うるさい」

勝治の腕をつかんでできるだけ悠樹から離し、真治も勝治の方に放り投げてできるだけ悠樹の周りに人を来させないようにした。

「祐司？どうした？」

悠樹が何気なく笑顔で早期居てきていた。祐司は悠樹の胸倉を掴み、思いっきり身体ごと上げていく。

「うつ……なっ……」

苦しそくに唸る悠樹。

「おいバカ祐司！！」

勝治達が近づいて止めようとするのを、思いっきり悠汰が後ろ襟を掴み、ゴメンネと心の底から誤りながら、思いっきり後ろに倒した。真治にも同じことをして、その祐司の行為をとめないようにする。

「テメエは誰だ！！悠樹をどうしやがったんだよ！！」

血相を変えて、思いっきり怒鳴りつける祐司に、勝治と真治とその他は何が起きているのかと、ポカーンとみているしかいられなか

った。

祐司がやっていることに間違えは少ない事は、周りのみんなも知っている。知っているからこそ、どうすればいいのか困ってしまうのがいけないところかもしれない。簡単に言えば、判断力が無いのだ。

その判断力を補ってきているのは、真治のはずなのだが、真治にもなんとも言いにくい顔をしてしまっているのを、悠汰には解っていた。たしか悠汰の話をした時には、真治も勝治もいたはずだ。いや、真治は居たかどうかはわからないが、勝治はいた。けれど、ここで何か物を動かせば逆に困りどころの二の舞だ。

「悠樹をどうしたって……俺は……悠樹……だよ？わからない……の？どうしちゃっ……たの？祐司……こそ」

「なら貴様は悠汰を知っているか？」

「ゆ……うた……？」

「わからないだろうな」

「そっか」

ポンと手を打ったのは、真治ではなく勝治の方だった。勝治はあの時信じているのか信じていないのかわからないような顔つきで、見つめていたから悠汰という存在を忘れていたのかもしれない。

そうと解れば、簡単な事に話が進んでくれればいい話だ。

けれど、一つだけ問題があった。それが本当の「悠樹」ではなくとも、「悠樹」である事は間違えないから、そのまま首を絞めていたら間違えなく死にってしまう。多分上手く力調整はしていようと、長くは無理だろう。それに、どうやって本物の「悠樹」と取

り戻すかだ。そう考えていったら、一つではなく、たくさんの問題が引きずり込んできてしまう。

どうやって「悠樹」を元に戻すか。

「悠汰の存在を今すぐにいえない上体だったら仕方が無い……モシカシテあの……暴れたときのあいつなのか？」

漸く答えに近づいてきた勝治。そうだと祐司は勝治に言うと、活字も力強い目つきで近づいていく。

「悠汰！！こいつに話しかけるんだ」

『悠樹……目を覚ますんだ』

祐司のその一声に、悠汰も心を決めた。唯一自分が一番悠樹を知っているから今の「悠樹」をどうにかする事ができないわけでもないのだ。それに、運よくなのか姿は見えていないみたいだし、存在もわかりきっていない状況みたいだ。

そうなってしまうている今、一番の手になるのが悠汰なのかもしれない。

「うああ！！何なんだこの声は！！」

力を離れた祐司の下で、頭を抱え込みながら「悠樹」はしゃがみこんだ。声は聞こえているのに姿は見えていないのか。

「脳に……脳に直接……声が」

『悠樹！！お願いだから負けないで！！悠樹いー！！』

「やめろー!!」

思いつきり怒鳴りながら、周りのものをもってとりあえずいろんなところに投げ飛ばしていく。それに当たらないように、皆は「悠樹」から離れていくが、悠汰は全く持つてその場を動かない。ぶつかる心配もないし、ぶつかっても痛くは無い。

ぶつかる心配は無い……？

何かわかってきた気がしてきていた。何か。何か上手く行くような何かがあるはずだ。

『悠樹!!』

反射的に暴れている「悠樹」を抱きしめる。すると、叫びながら悠汰を離そうとするものの、全く持つて離れる手ごたえが無いらしい。

悠汰はまけなかった。心の中で「悠樹」を呼び覚まさせるように、力強く抱きしめて、耳元でずっと「悠樹」という名前を呼び続ける。

「もう……もう悠樹は居ない!!俺が奈落の底に落としたんだ!!俺が……俺が本当の悠樹なんだ!!だから俺は違う!新しい悠樹さ!皆がほしがっている「心臓」だ!!俺が本当なんだ!!悠樹は俺なんだ!!」

『悠樹は悠樹のものだ!!お前なんかにやるもんか!!悠樹!!』

叫んだ……

叫びに叫んだ。

心に響かせるような大きな声で。心の中で叫び続けた。

誰……？

俺を呼ぶ、大きな声が聞こえてきた。それに気付いて、スツと真つ暗なところに目を開けているのか解らないくらい真つ暗なところに、体を起こした。

起こしたような気がするだけで、本当に起こしているのかはわからない。どっちが上でどっちが下か。けれど、なんとなく懐かしい声が必要な声で呼んでくれている。

いつも俺を支えてくれていて、文句も言わない。口答えもしなさすぎて、逆にこっちが困っていた。何かしたいことや、してほしい

ことがあれば言ってくればいいのに。そう思っていたのに、なん
でかはわからないけど、にっこり笑ってずっと一緒にいてくれた。
心臓のことだって、いろいろと面倒なのに、ちゃんと説明してく
れたのに、逃げてしまったのに。裏切っているようなことを何度も
した。なのに、優しくかった。そんな人が一緒にいてくれた気がする。
人じゃなかったかもしれないけど、自分にしか見えていなくて、
独り占めしているようになんか気分が上がっていた。
それだけだったのに、何でかな。

名前が思い出せないや。

だれだっけ？と考えるだけ考えて、何か見捨てるかのように全く
思い出せない。姿かたちも思い出せない俺は、ヤッパリ裏切ってし
まったのだろうか。

けれど、何でかわからないけど心臓の記憶はある。
心臓を盗まれると大変で。だけど、何がどう大変なのかわからな
かった。死ぬとも言われてないし、一緒に居てくれた人も、自分た
ちを信じるなんていってなかった。

あれ？一緒に居た人って

まだ居るのだろうか。

まだこの懐かしい声以外にも、自分には違う人たちが居ただろう
か。

俺……誰だっけ？

今まで何かを掴んでいたような気のするその手を、じっと見つめ
る。なんだか死んでいるような手をじっと見つめていると、だんだ
ん気が遠くなってきた。それを食い止めるかのように、グッと力を

入れて手を握る。

大好きだったあの声は、力強く直接俺に伝わってくる。だんだん近づいてくるような。奥のほうからだんだん近づいてくる。

誰……？

「俺だよ……悠樹……」

……誰……

「わからないの？」

目の前には見慣れた顔。見慣れた声。懐かしい顔ぶり。すごく今すぐ抱きしめてあげたいほど、懐かしかった。

けれど、胸のどこかでそれを食い止めていた。何かを示すかのように、心の何かが伝え合っているかのように。

誰……？懐かしい感じのするあなたは誰？

「懐かしいんだ。嬉しいな。心のどこかではちゃんと解ってるじゃん……そんな話は後だ。あなたは自分を探して。自分を取り返して……心臓はあなたのもものだから。逃がしたりしちゃダメだよ？逃げ道は作っちゃダメ。心臓の逃げ道は悠樹しかいないんだ。だから、悠樹自身その道を崩して。だから……おいで？悠樹は一人じゃないんだよ？」

ソツと差し伸べてくれるその手を、俺はつかんでも良いのだろうか。昔の俺だったらどうしていただろうか。けれど、そんな事よりも本能が先に動いていた。手を。

ゆっくりと掴んでいた。

エピソード 心臓の心

返して……俺のからだ……俺の……

貴様……どうやってあそこから這い登ったんだ!!

邪魔しないで……俺の人生

邪魔をしているのはお前だ!!これは俺の体なんだ……

違う

ちがくない!!……この身体はもう俺の体なんだ……返せ?これは
元々俺の体なんだ

それは……その身体は俺のものだ!俺と悠汰のものなんだ!!

違う……それは違う……悠汰なんてものはいないんだ

居るんだ!!俺のちかくで一緒に戦ってくれてたんだ!!お前なん
かいなくなっちまえ……!!

それっきり。何も返ってこなくなってしまった。

真っ暗で。それで尚且つ何かを感じていられた。なにか。懐かし
いぬくもりが気持ちよかった。ソツと頭を撫でて、優しく和ますよ
うな暖かくて大きな手。

きつと今、目を覚ましても真っ白で何も見えない気がする。けれど、今すぐにその人たちを、助け出したかった。

そんな心配をさておいて、ソツと目を開けても、ヤッパリ何も見えなかった。今まで疲れていたものが、ドンと目の前に押し寄せられているかのように、真っ白で、何も考えなくていいよといってくれるような、囁きこそが、耳に綺麗に入ってきていた。

たったそれだけ。

たったそれだけの囁きでも、凄く心が休めていた。今ここに居る事が、心の気休めで、すべての救いの手を差し伸べてくれている場所。

なんとなくそう思えるのは、少しでも俺が前向きになってきた証拠なのかもしれない。

できるだけ多くのものを受け入れることの出来る人になり、心身ともに少しずつ大人に近づいていてくれているような成長。

自分ではわからなくとも、解ろうとすれば、わかりたいという一心でわかっていっているような気持ち。

なんとなく。なんとなくどうしてここに俺が生まれてきたのかは、全く持つてわからなかった。人間は、何か意味を持つて生まれてくる。そんな言葉は大半嘘だろう。だって、『心臓』なんてものを目当てにされるだけのために、俺は実際生まれてきてしまったんだ。

世界の邪魔者として扱われても仕方が無いくらいのもんだ。どうすれば良いのだろう。なんとなく、心のどこかでは「心臓」は守れだの、殺せだの。わけのわからない言葉が回ってくるのに。心の奥底では、わからないと言う声も多少聞こえてくる。

暖かく、ぬくもりのある手が、優しく頭をまだ包み込んでくれている。

きつと助けてくれているのだろう。

精神的に。何かを支えてくれるぐらい、大きな手が今、頭の上に乗っかっていてくれている。少しばかりそれが心の支えとなっている。

確認したい。

目を開けてありがとうといたい。言いたいの、口が上手く動かない。いや。それ以前に、瞼が全く開いてくれる様子を見せてはくれない。何かを邪魔するかのように、もっと休んでいると、優しい声もする。

再び夢の中に入ってしまったいそうなくらい、ウトウトとしてしまう。

いまは充分に休んでおいて

再び優しい声が、ソツと包み込んでくれている感じがする。暖かくて、なんだかホツと安心して。そう考えると、俺の周りには温かい人ばかりが居るのかもしれない。

微妙につかれきっている何かを休ませるように、すべてのものを一時休戦とさせてみた。それで良いのだ。

今はそれでも構わないのだ。

そう心に決め付けた。

真っ黒ではなく、真っ白な世界への階段を、無意識に歩いていった。

階段を上り始めて、漸く扉が見えてきた。

おしゃれにステンドガラスのように、扉に微かに残っているガラス。赤く染めるガラス。綺麗に整っていて、なぜか凄く白のように感じられた。

その扉を開けるとともに、スツと今までの疲れが消え去り、ソツ

と包み込んでしまうように何かに覆いかぶさるような暖かいものに入っていた。

腕を瀬いっぱい伸ばして、何かにぶつかってそれを抱え込むように抱きしめた。

「うわっ!!」

——うわ？

抱きかかえていたものを見るように、力いっぱいの腕をゆるゆると弱らせて、パチツときちんと目を見開くと、そこにはかなり焦っている祐司がいた。

どうして目の前に祐司がいるのかもわからずに、渋い顔で見つめてみた。すると、祐司の後ろの方から勝治が顔をヒュツとだしてきて、いきなりパアツと明るくなった顔つきになった。

滅多に見ない勝治の光り輝く笑顔が、急に近づいてきてガバツと祐司ごと抱きしめてきた。反射的に肩をビクつかせて、声にならな
い何かを叫んでいた。

「漸く目が覚めましたか」

『悠樹!!』

勝治の向こう側からは、目が赤くなってしまっている悠汰がいて、悠汰までも、俺を抱きしめてきた。

余り体重は感じなかったが、勝治と祐司の重みで、少しばかり唸る羽目になってしまった。すると、確か悠汰の前に声が聞こえてきたと。少しばかり周りを見回してみると、ハアと大きなため息を
ついている真治が立ち上がっていた。

「悠樹でいいんですよね？」

「ん？えっどういうこと？っていうか俺？あれ？」

「いまいち状況を読み取れて居ない状態ですね」

呆れたようなため息をつきながら、真治は勝治の座っていた椅子に腰をドンと下ろした。メガネを力チャツと上げ、腕を組みながらじっと見つめてくる。

「君は乗っ取られていたんですよ？その後急にぶっ倒れたかと思えば丸々一ヶ月ほどお眠り状態でしたからね」

「お眠り状態？……確かになんか疲れは取れてるけど」

「悠汰くんでしたっけ？助けてくれた一声は悠汰くんでしたよ。悠樹が違う悠樹だという事を祐司に伝えて必死に祐司が怒鳴り散らしていましたからね」

薄く微笑んだ真治の微笑み。その微笑みは、ここに着てからきつとはじめてみた微笑みだと思う。ずっと何か精神的に追われていて、それに気付かなかっただけかもしれないけど、なんだかスッキリしたようなしていないようなだ。

けれど、ヤツパリ嬉しかった。

人の笑顔は結構好きかも知れない。

奥にまだ人がいたのか、だんだん人が集まってきて、よかったなーとか、よかったよかったと、いろいろと歓声を上げていた。

知らないうちに心臓がどうのこうのというやつに乗っ取られてしまい、たぶん悠汰の小枝と思われるその声に気付いて、何か会話をして。それで、その心臓だとか言うそいつに消えれみたいなことを

言って。

とりあえずいろいろと皆が見ていないところで、決闘をしていたような気がする。

すべての話を聞いたとき、凄く嬉しかった。助けてくれたという事がすごく嬉しかった。

「ゴメンネ……祐司さん……ごめんね？」

「何でお前が謝る？俺たちも少し無理をさせていたかもしれないな」

「違う……本当は祐司さんたちのこと信じてなかったんだ……信じられなくていわれてないから信じていいのか信じちゃダメなのかわからなくて……」

なんだかどこかスッキリしていくかのように、だんだん涙が頬から零れ落ちていく。それを拭うように、一生懸命腕で拭っていくが、止まるという事を知らないように、ボロボロと流れに投げられていく。優しくいろいろな暖かい手が頭を撫でってくれる。ソッと抱きしめてくれて、何か自分は幸せなんだと思えた。

なんとなく。もうあいつはでないような気がする。

まっすぐに見つめていたはずのそれが消えて言ったかのように、心にはすっぽり穴が開いてしまった。が、それを埋めるように祐司達が優しくしてくれる。

悠汰の優しい顔や、祐司達のぬくもりが一気に入ってきて、抜けた場所は小さかったかのように、あふれ出てきてしまう。

一番に俺の手に触れたのは、俺から手を出した悠汰のぬくもりだった。

『悠樹……もう俺の役割は終わったよ』

悲しい顔。だけど、何かすべてをやり終えたように清々しいような、優しい瞳。そんな瞳が、光って見える。悠汰の頬から流れ落ちる涙が、綺麗な聖水みたいにキラキラと輝いている。

そんな口から出てきた言葉に、俺はいまいち反応できずに居る。

「悠……汰？」

『もう終わりだよ……悠樹。もう悠樹は俺が居なくても充分なんだ。もう心臓だって悠樹物さ』

「ちよつ待つてよ悠汰……おれらまだ一緒に入れるんだろ？」

さつきとは違う涙が、俺の頬にも流れ落ちてきた。

あつたのだつて、まだ昨日のように思い出せるのに、こんな短期間で消えていってしまうなんて、全く考えて居なかったし、居なくなってしまうなんて思いもしなかった。

一緒に居てくれるとも言っていたから、素直に喜んでいたのに。

『これからは祐司達がいるじゃない？ ね？ 大丈夫。俺はちゃんと悠樹を見つめているから……』

「悠汰！……！」

そう叫んだとともに、悠汰の方から光が勢い欲放たれ、破裂したかのように消え去っていつてしまった。そんな急な事。言われてすぐに理解できるかよ。

悠汰のいた場所に最後に見たのは、悠汰が流した涙の、最後の1滴だった……………。

「悠樹ー！！行くぞ」

「ちょっとまってえー！こっちの靴とこっちの靴どっちがいい？」

「ばあかそんなんどっちでもいいよ」

奥のほうから少し怒り気味の勝治と、少し呆れかけている祐司の
声が聞こえてきていた。それに答えるように、にかの部屋からは、
外靴生活の中でもまだ迷うというものを知っているかのように、大
量の靴の中から選んでいた。

元々こんなにも靴を用意しなくても良かったのでは無いだろうか
というほど、かなりの量が最初から準備されていた。そんな日を、
悠汰が居なくなってから三年がたつのに、昨日のように思い出せる。

思い出す度に、涙がホロリホロリと流れてしまいが、悪い記憶ではなかった。凄く気持ちがよくて、天国に言ったような気持ちのいい気分になれた。

けれど、それでもヤツパリ自分の片割れが居なくなっただよように寂しくて、そこらへんにまだ歩いてるんじゃないかな？？というくらい、すごく消えていった事を受け入れられなかった。

でも、そんな事を考えていたら、悠汰に変に心配をかけてしまっただった。だからこそ、できるだけ前向きに、ずっと見守ってくれていると思っただけ前をみ据えて生きることにした。

外に出かけられるようになっただし、土村家は挫折してきたし。土下座までしてきた事に、少しばかり馬鹿だなと思いため息をついた。なんだか子供の茶番だったような毎日を、クスツと皆で笑ったこともあった。

悠汰が居てくれたから、この世界は楽しく生きていけた。
いや。

この心臓があっただから、心臓のおかげで自分の進む道を変える事が出来た。

迷ったときには祐司がいて、勝治がいて。それで尚且つチョツと近寄りガタイ、最近主治医だった事に気づいた真治や、他の皆他に地もいろいろ助けてもらっていた。

謎はまだまだ深まるのに、どうしてかその謎というものが楽しく感じられる。

生きることが楽しくて楽しくて、まだまだやり足りないくらいなのに、高校にもちゃんと復帰していたから、今から大学にいくところだった。

それで学んだことは、勝治の運転は怖かった。

なんかふらついていて怖いとかじゃなくて、スリリングとかのか、迫力があるとか……。凄く狭い道なのに、思いっきりスピードを上げる怖がる様子も無いところとか。

「それで悠樹が怪我したらどうするんだ」という祐司の叫びによ

って、運転手は祐司と変わり、つまらないからといって勝治も同行していた。

平和になった今、自分は何をすれば良いのかっているいろいろ悩んだ。悩んだ拳句。

俺は

悠汰の分まで長々とのんびりと生きることを選んだ。

ありがとう皆

エピローグ 心臓の心（後書き）

作者の壬哉です

長々と進展の早めなお話。読んでくださった方々ありがとうございます。

出来るだけわかりやすく、尚且つ早めに終わらせるつもりがこの作品が、こんなにも長ったらしくわけのわからないものになってしまったことを心からお詫びします。

良ければ感想や評価厳しくよろしく願います。

まだまだ誤字脱字はありますが、いろいろと直していますので、酷い誤字脱字などがありましたら、よければ報告よろしく願います。

文章力がかけている部分がありますが、その分にも指摘を下さると光荣です。

読んでくださった方ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3569b/>

心臓の逃げ道

2010年10月13日21時55分発行